

# 天 天 天 返

## 時 報

No. 13

日中友好梅里雪山峰合同學術登山隊1996記錄

1998年11月

京 都 大 学 学 士 山 岳 会

## 目次

巻頭言	上尾庄一郎	
時報13号発行によせて	高村 奉樹	
日中友好梅里雪山峰合同学術登山隊1996記録		
地図		
写真		
はじめに	斎藤 惇生	1
隊の成立とその経緯	松林 公蔵	4
登山活動記録	人見五郎・中山茂樹	24
各担当記録		
気象	福崎 賢治	52
医療	松林 公蔵	58
装備	中山 茂樹	62
食料	小林 尚礼	65
輸送梱包	高井 正成	79
隊員行動記録	睦好 正治	85
隊員名簿		87
梅里雪山第三次隊反省会記録	松林 公蔵	88
梅里雪山の失敗		
—なぜサイクロンの影におびえたか—	平井 一正	116
支援いただいた企業・団体・個人一覧		

——この表紙の“AACK”の文字はカスティラオによってイタリア語に訳され、セビアにて1503年に出版されたマルコ・ポーロ著「東方見聞録」より採写したものである——京都大学付属図書館蔵

—巻頭言—

## 発刊に際して

京都大学学士山岳会会長 上尾庄一郎

AACK時報13号は、日中友好第三次梅里雪山合同登山隊1996の記録を中心に編集されました。本登山隊は、残念ながら今回も初登頂をはたせずに撤退のやむなきにいたりましたが、そのつぶさな経緯が隊員たちの手によって詳しく述べられております。

思えば、梅里雪山計画は、1985年の日中友好ナムナニ峰合同登山隊の成功にひきつづいて、第二の日中友好合同登山として計画されました。AACKは中国登山協会、雲南省登山協会との合議にもとづき、1988年秋に初めて先遣隊を派遣し、続いて89年には科学隊および第一次学術登山隊、90年春に偵察隊、そして第二次学術登山隊を90年11月に送りだしました。しかし、第二次学術登山隊は、91年1月3日以降、第3キャンプの日中隊員17名が消息をたちました。その後の救援活動や捜索活動ならびに事故調査委員会におけるさまざまな角度からの検討の結果、雪氷学の第一線研究者である井上隊長の想像をも超えた巨大雪崩により就寝中の隊員は遭難したのであらうと結論されました。

以後数年間にわたる反省と雌伏の期間ののち、ようやく梅里雪山再挑戦の機運が醸成され、第三次梅里雪山計画が会員有志の手によって着手されました。けっして容易ではなかった数年間における計画段階をなんとか乗り越え、第三次梅里雪山登山隊は1996年秋に梅里雪山の初登頂をめざしましたが、過去の遭難を背負った隊員たちの心理は、頂上直下数百メートルまで達したのち、その後の気象の変化とルートの荒廃という苛酷な梅里雪山の

自然の脅威を突破することができずに最終的に撤退を決定いたしました。第三次隊の無事初登頂の報を待望していた後方支援の会員たちにとりまして、撤退決定の報はまことに残念きわまりないことでしたが、第二次隊の全員遭難という過去の厳しい現実と、若い優秀な会員たちを失った現在のAACKにとって、あの状況下における撤退判断がなしえる限界であったと認めざるをえません。

本誌には、計画段階から登攀過程における隊員たちの活動の記録と読み取れますので、初登頂にいたらなかった事実をふまえ、諸賢の忌憚ないご叱正をいただければ幸いです。

本登山遂行のために御尽力いただきました中国登山協会ならびに雲南省体育運動委員会、徳欽政府のみなさまに深甚の謝意を申し上げます。また、本計画にご賛同、ご支援いただきました法人、個人のかたがたに深謝申し上げますとともに、今回登頂を果たせなかった事実に対して心よりおわび申し上げます。最後に、終始ご協力、ご支援をいただいた会員諸兄に深く感謝いたします。

本稿を上梓いたしました後の98年7月末、梅里雪山明永氷河上において、梅里雪山第二次学術登山隊の隊員の遺体ならびに遺品が現地村民により発見されました。AACKではただちに収容隊として5名の会員を現地に派遣し、雲南省体育運動委員会、中国登山協会、徳欽県政府のご協力を得て、遺体と遺品を収容しました。一部の遺体は寝袋に入った状態

で発見されており、隊員たちが就寝中に遭難したのはまちがいないものと思われます。遺体は現地から搬出し、8月7日大理において荼毘に付しました。続いて同所で遺品の見出し出されている日中隊員ご遺族の出席のもと、「骨灰、遺物交接儀式」を執り行い、身元の判明している遺骨と所属の明らかな遺品はご

遺族にお渡しいたしました。さらに9月にも再度現地に収容隊を派遣いたしましたが、現在までのところ、井上次郎隊長、佐々木哲男秘書長、清水久信医師の三名の遺品は依然としてみつかっておりません。

ここに慎んでご報告申し上げます。

—巻頭言—

## 時報13号発行によせて

京都大学学士山岳会前会長 高村 奉 樹

本報告は京都大学学士山岳会が、中国雲南省体育運動委員会、中国登山協会と協力して送り出した日中友好梅里雪山峰合同学術登山隊1996の、準備段階から登山活動の全過程を追った記録であります。当会がこの未踏峰、梅里雪山に偵察先遣隊を派遣したのは1988年で、その後1989年には第一次登山隊、翌年には再度偵察隊を送りました。しかし万全を期して送りだした第二次登山隊は、1991年1月4日未明に発生したとおもわれる未曾有の大雪崩により、日中両国の登山隊員17名の遭難という、まことに悲惨な結果に終わりました。日中ともに多くの優れた人々を亡くしたことは、痛恨のきわみであります。

その後、遭難原因の徹底的な検討と反省をかさねたうえ、若手会員の熱意と中堅会員の再挑戦へのかわらぬ意欲を汲んで1996年、当会は第三次日中合同学術登山隊を送りましたが、残念ながらまたもや未踏に終わりました。その経過は、以下の記録のとおりであります。現地の情勢はもとより、国内の社会、経済の状況も厳しいなかであって、この学術登山隊を実現するために、絶大なご協力を賜った法人、個人の皆様方にここに心よりお礼を申し上げます。合同遠征を実現するにあたり、中国側では雲南省体育運動委員会、中国登山協会、地元地域の住民の皆様のご理解とご協力をいただいたことに、深く感謝の意を表します。

鎮魂の登山ということはあまり意識せず、冷静に取り組むと自戒しながらも、隊員諸君の胸中には仲間たちの、美しく聖なる山への遺

志をついで、ぜひ登頂したいという強い想いが秘められていました。学士山岳会会員の皆様に、公的には初めて協力を求めましたところ、半数近いかがた、およびその関係者から多額の援助をいただきました。これも斎藤総隊長はじめ隊員への暖かいはげましの気持ちの表れと、ここに心よりお礼申します。

今回の登山隊については、讀賣新聞社の後援を受けました。インマルサットによる日本との即時交信が実現し、4名の記者の派遣によって日々の登山活動が新聞、テレビなどによって報道されました。水上達也大阪本社社長（現讀賣新聞社会長）はじめ関係各位のご支援とご協力を得たことに感謝いたします。

本計画の推進のためには近藤良夫名誉教授を長として京都大学内外の諸先生、先輩の皆様を委員とする後援会のご指導が不可欠でした。京都大学前総長井村裕夫先生には計画推進のため多くのご高配をいただきました。ここに心よりお礼申し上げます。

梅里雪山で肉親を失われた家族のかたがたには、隊員への励ましはじめ物心両面で応援をいただきました。

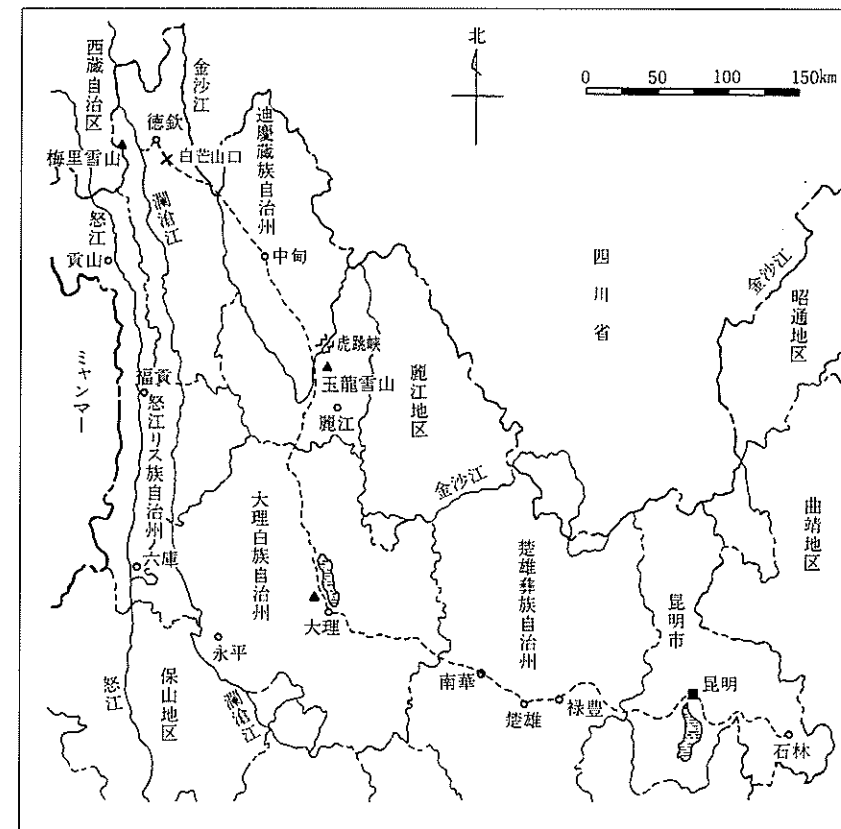
また、長期にわたってヒマラヤ委員会を運営し、登山計画の検討はもとより、募金活動にあられた木村雅昭、事務局担当の新井浩両会員の貢献によって本計画がはじめて推進できたことを改めて記しておきます。

今回は登山行動がインターネットで報じられたことも、ひとつの試みでありました。しかしあたらしい試みはつねに、問題点をはら

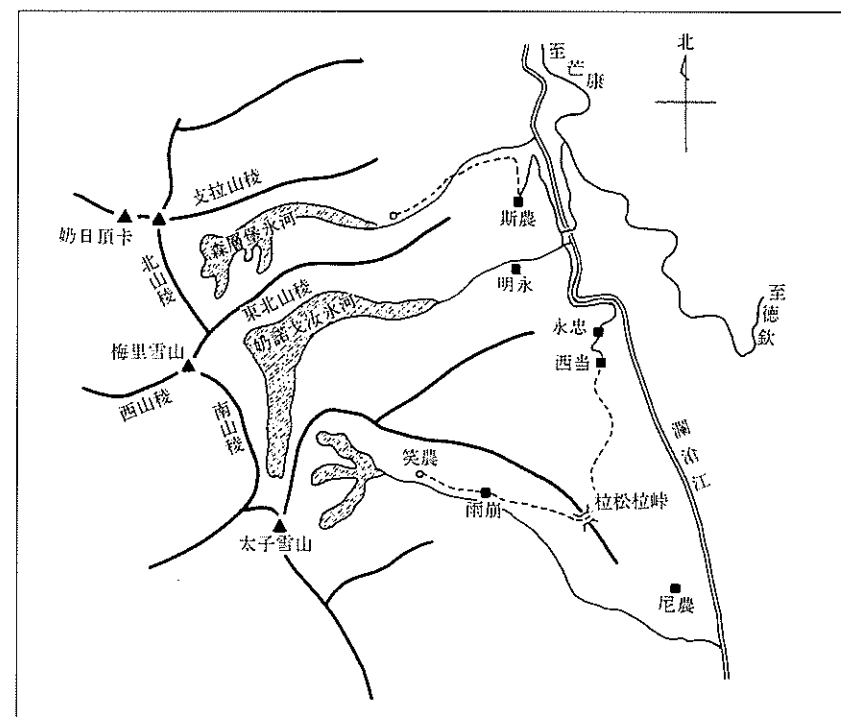
みます。気象情報についてはあまりにも具体的に情報が提供されたため、現地での観天望気という、かねてより山登りにとって重要則とされた、経験による判断にかけりを生じるような点があったのではないかと思います。山登りの成りゆきは、やはり現場での判断にゆだねるべきだと思います。しかしリアルタイムに現場での交信の内容さえも傍受できるわけですから、これに対する留守本部からの

対応を、気象データの解読の問題とともにどのように統合すべきか、今後21世紀の登山と学術調査への課題も残りました。会員皆様の創意によって、さらに新しい学術登山の途がひらかれることを期待いたします。  
最後に後援いただいた法人、個人の皆様に時報発行の機会に、重ねて心よりお礼を申し上げます。

## 概念図



昆明から梅里雪山まで



梅里雪山峰の東面概略図



### 行動概要

- 1996年
- 10月17日 先発隊 日本出発。
  - 10月20日 先発隊 昆明出発。
  - 10月24日～29日 先発隊 雨崩滞在。
  - 10月30日 先発隊 BC到着。
  - 11月 6日 本 隊 日本出発。
  - 11月 9日 本 隊 昆明出発。
  - 11月10日 先発隊 C1建設。
  - 11月12日 先発隊 C2到達。
  - 11月16日 本隊BC到着、先発隊と合流。
  - 11月20日 C2建設。
  - 11月30日 C3建設。
  - 12月 2日 バットレスを越えて頂上稜線に達する。  
最高到達点6250m。
  - 12月 3日 悪天候に備えて全員BCへ下山。
  - 12月 5日 ルートの危険増大のため登山活動断念。
  - 12月 8日 BC撤収。帰途につく。

キャンプ配置図

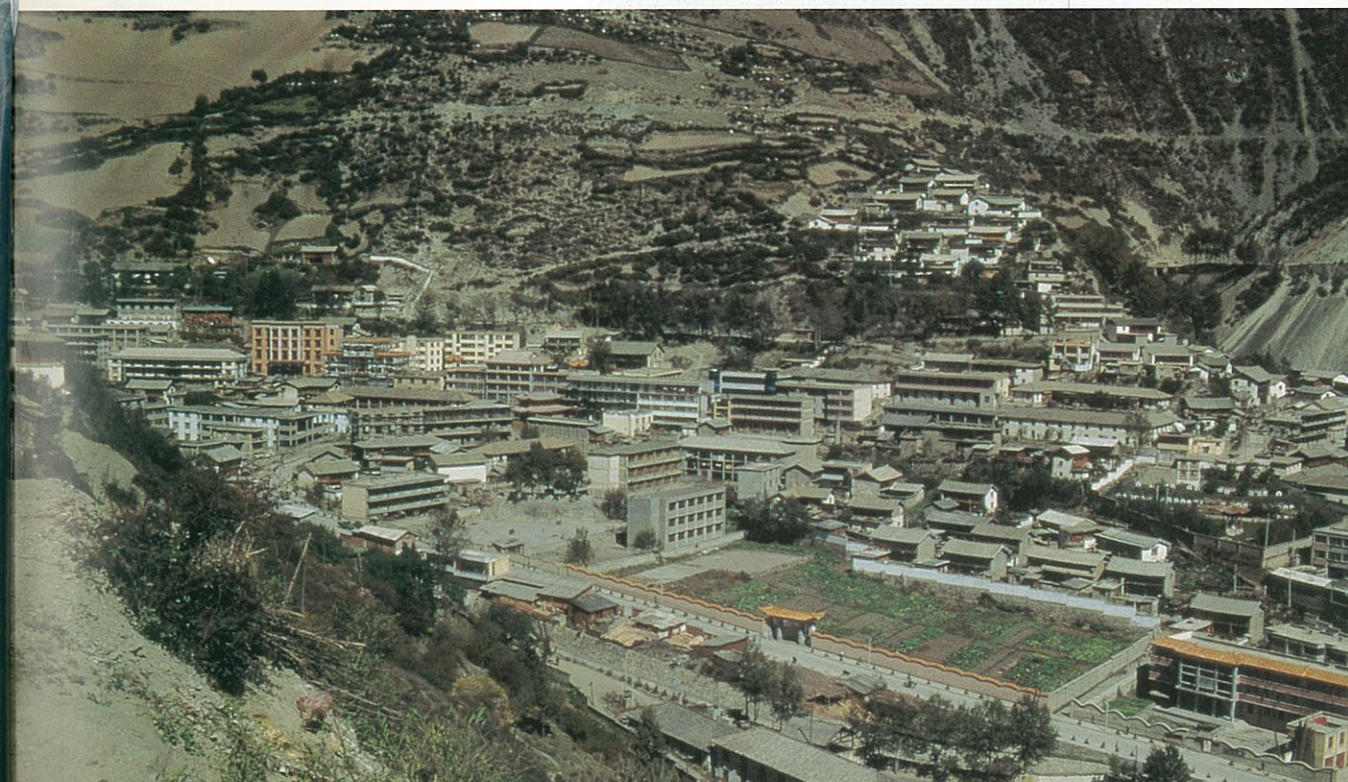


昆明での出征式

白芒山口付近のキャラバン

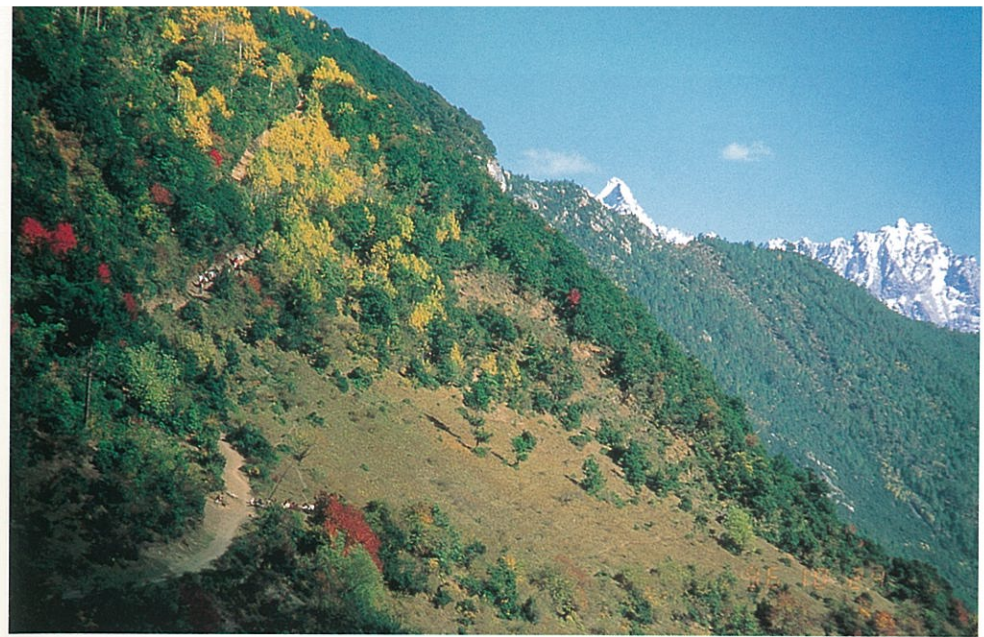


徳欽の街並み





第2次隊の慰霊碑にお参りする。



西当から雨崩への山道



メコン川の流れ



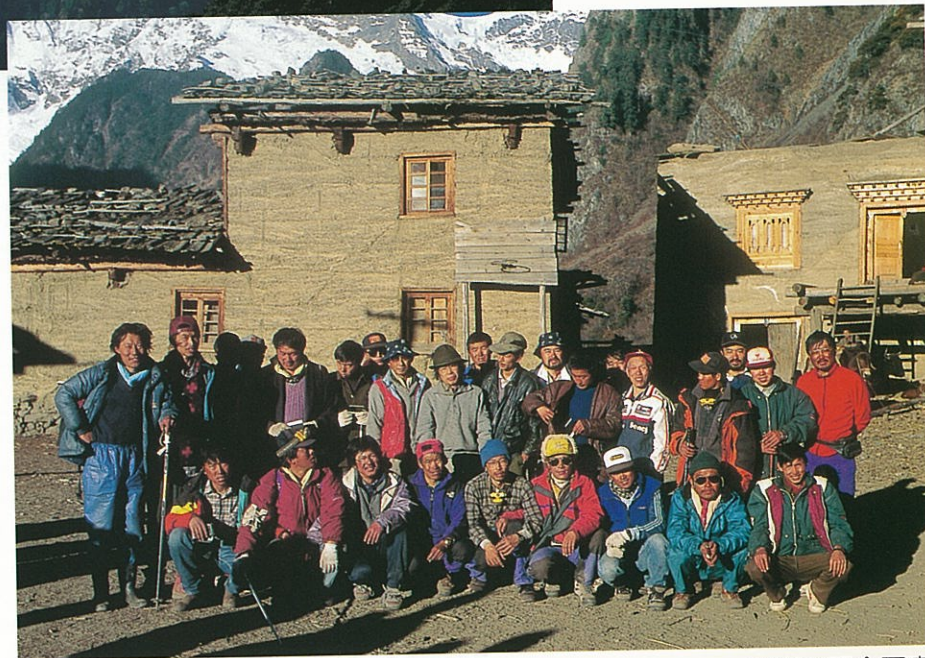
麓の植物



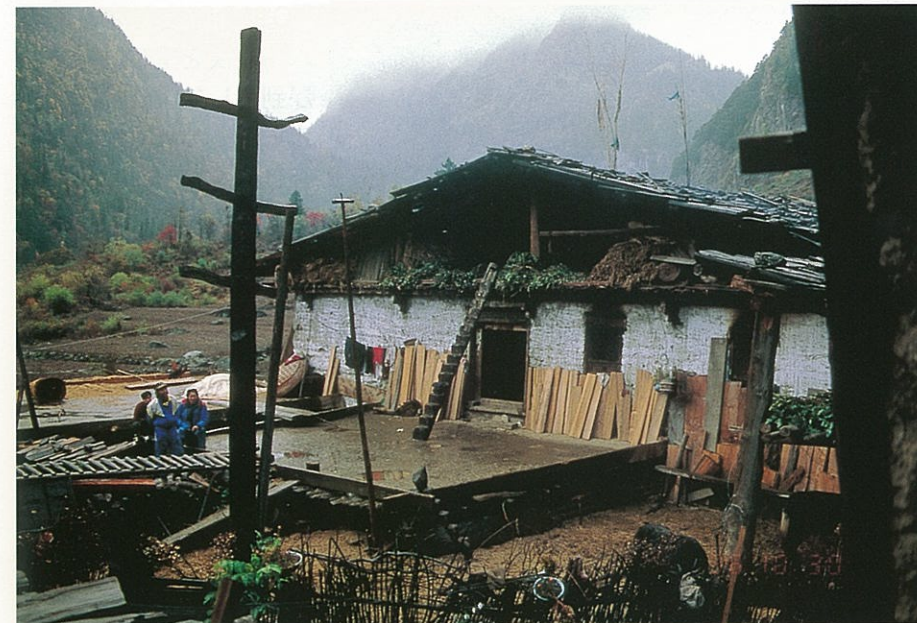
雨崩村の風景



西当から拉松拉峠を越えて少し下ると梅里雪山の雄姿が目に飛込んで来る。



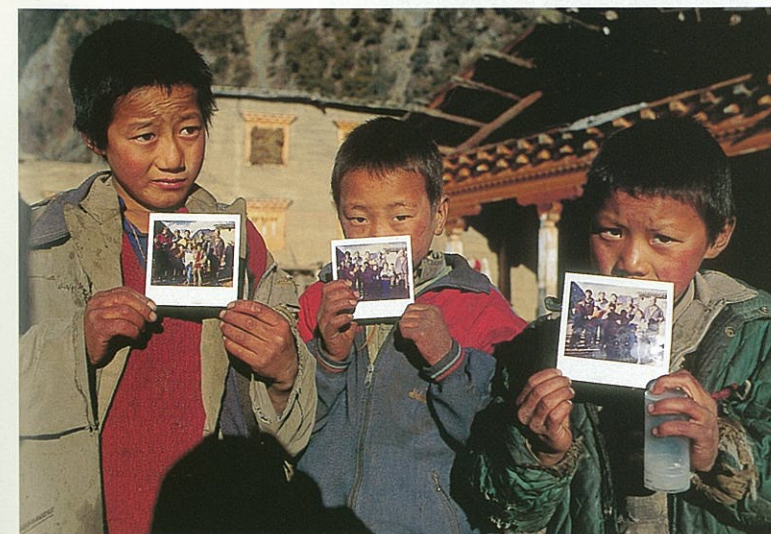
雨崩で記念写真



雨崩村の風景



BCの隊員小屋の様子



ポラロイド写真を手に喜ぶ雨崩の子ども達。



BCから登路となる雨崩氷河右俣を望む。先発隊が到着した頃は下部斜面まで30cm以上雪におおわれていた。左上に岩峰が見える。これがC2のコル。

BCの様子



BCでの記念写真





麓の植物



ネパール式に山の神に祈りを捧げBCの開設式を行う。



麓の植物



BCから雨崩氷河右俣へ至る荒涼とした放牧地



氷河取付（ラッパ口）の最初の固定ロープ



ラッパ口の落石  
多発地帯を登る



登攀中止決定時のラッパ口の  
様子。雪が解け、石礫が堆積  
している。



穏やかなC1



C1からC2への登路。コルの間にある岩峰が目印。



C2への登路からラッパ口方面を望む。中央やや上よりにC1が見える。



C2への登路から下を望む。かなりの傾斜だ。



C2。ここからは主峰を仰いでの登攀活動となる。  
写真中の○印は、登攀ルート第2バットレス上のC3の位置。



C2。3日程の降雪でテントの高さまで雪が積もる。



第2バットレス下部の登攀。



第2バットレスの弱点にC3を建設。



第2バットレス横を走る小雪崩。



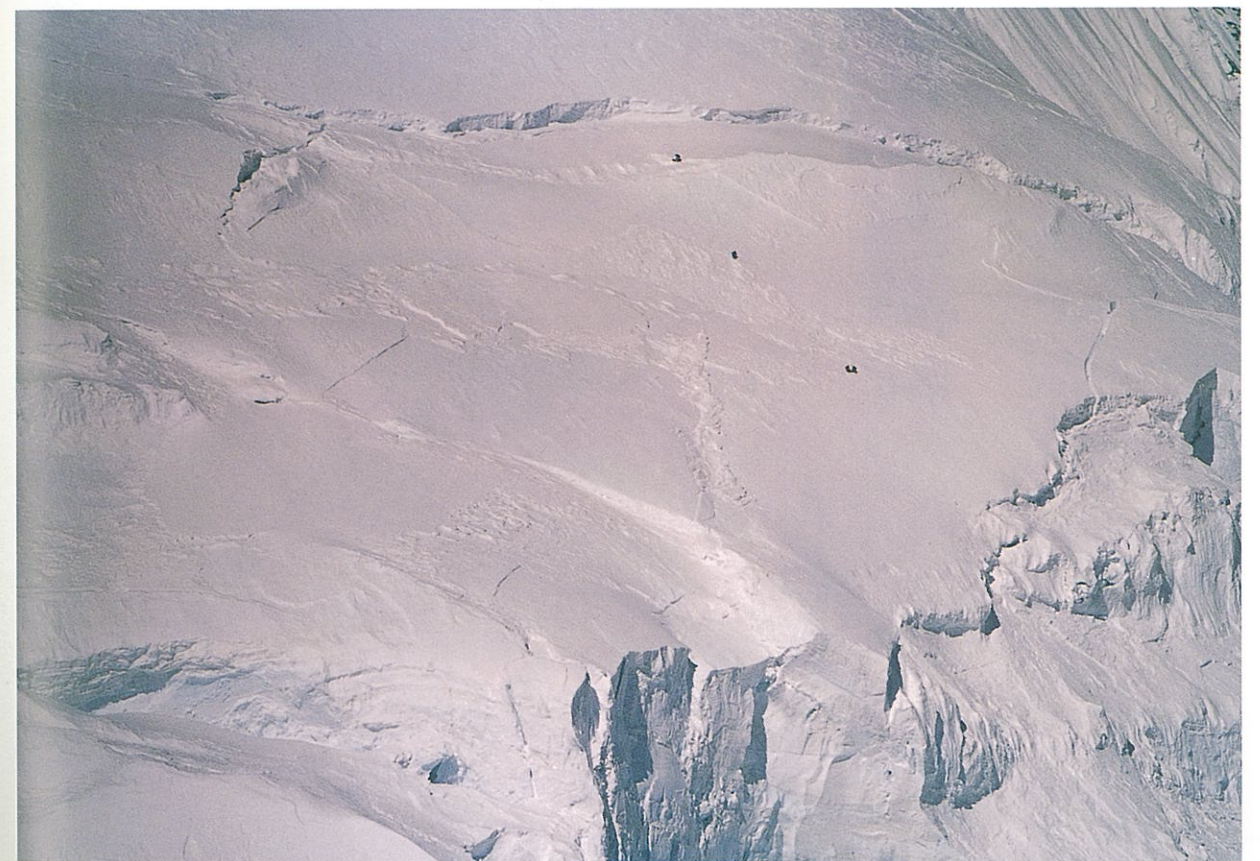
C3上部よりC3と、雪原を隔てた彼方にC2を望む。



C2からの第2バットレス核心部



バットレス上部の氷壁を攀る隊員。



(Y山口より) バットレス上部氷壁を越えて進む隊員4名。



Y山口（太子雪山と本峰南稜とのコル）から梅里雪山頂上を望む。



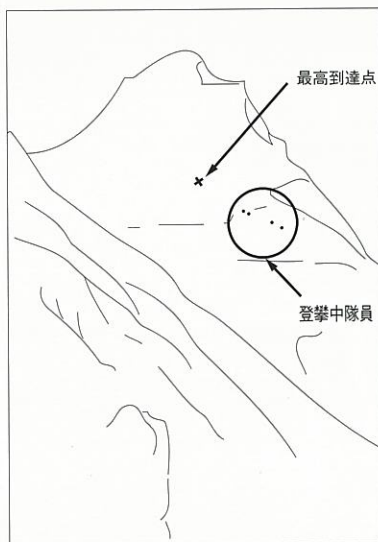
今回の最高到達点から頂上方向を望む。



(Y山口より) さらに前進し最高到達点付近に登る隊員を見守る。



(Y山口より) 頂上直下の様子



## はじめに

(第三次日中合同梅里雪山学術登山隊の成立までと終わり)

総隊長 斎藤 惇生

1994年4月29日早朝、私は始めて梅里雪山の秀麗な姿を見た。両翼を広げて飛び立とうとする白鷹に似た山容は、私がこれまでに見たヒマラヤのどの山よりも気高く、神々しいと思った。しばらくは眼をそして心を打つあまりの感動に茫然として立ちつくしていた。

1994年4月末、私は梅里雪山の遭難した第二次隊隊員たちの家族団の現地訪問に医師として随行した。1988年の先遣隊、1989年の第一次隊の秘書長であった倉智清司と先遣隊、第一次隊の中国側秘書長、第二次隊の隊員であった雲南体育運動委員会の張俊も世話役で随行していた。

徳欽に到着した翌日の4月27日、深く峡谷をえぐって流れる瀾滄江（メコン河）を挟んで梅里雪山山群と対峙する丘で、ラマ僧4人による法要を営んだ。この丘に遭難慰霊碑が建立されている。山群の南側のメツモ、五冠神山などは姿を見せているのに、法要のチベットホルンがひびきわたっても主峰はずっと雲に被われて姿を現さなかった。翌28日も同様であった。

29日は徳欽を離れる日だった。慌ただしいなか早朝にもう一度と行くことになった。その願いを聞き届けたかのように、澄みきった青空の下に主峰は崇高な姿を見せたのだった。C3のあった第2バットレス基部の雪原もはっきり見えた。私はこの素晴らしい奥津城に眠っている17名の隊員たちの志は、やはり中国とAACKの会員によって受けつがれるべきでないかと強く感じたのだった。

1993年ごろよりAACK若手会員の間、梅里雪山再挑戦の動きが始まった。私にも総隊長

として参加が求められていた。1994年11月松林とともに北京の中国登山協会（CMA）を訪問。梅里雪山の再挑戦の希望を述べ、中国側と実施における問題点を協議した。

1995年の夏の終りに私は胃に早期癌が発見され、9月に胃を3分の2切除した。その時は参加は無理かと考えたが幸い快復は早く、3ヶ月後には食事普通に食べるようになったので、そのまま計画には参加することにした。

梅里雪山の登山許可は1988年に京都の国際交流協会の吉田與和、倉智清司の両名が取得している。この取得後、京大探検部主体ですめられた計画は、5月よりAACKが主催することになった。中国CMAの未登峰に対する態度は、第一許可取得者の意向を尊重する。登攀が未登になった時続けて登る意志があれば優先される。梅里雪山が1988年の先遣隊、1989年の第一次隊、1990年の第二次隊と続けて派遣できたのもCMAのこの考え方による。第三次隊の派遣許可取得について、吉田與和氏の協力は必須条件であった。また遭難した第二次隊が日中合同であり、現地チベット族の住民感情などを考えれば、雲南省政府、雲南省体育運動委員会の理解、協力が必要で、日中合同は絶対条件であった。

何度も話し合いが持たれ、根気を必要とする政治的折衝が続いた。中国の開放政策による地域間の経済格差の増大（徳欽県の経済力は弱い）、チベット族が聖山と崇める山における多人数の遭難者が出たことに対する宗教的感情の刺激などがあって複雑な問題が山積した。3月12日昆明において備忘録が調印さ



C1付近から雨崩氷河右俣ごしに見える面茨姆峰（中央）、五冠神山（右より）



ラッパロ付近から望む面茨姆峰、五冠神山



れたが、5月上旬予定された議定書調印団の来日が延び延びとなってはっきりと目途が立たなくなった。7月20日までに来日の通知が無ければ計画中止を決断せざるを得ないところまで追いつめられた。しかし7月18日に8月上旬来日の通知があり、やっと愁眉を開くことができた。この辺の経過は松林の報告に詳しい。

議定書調印までの折衝は、吉田與和氏と木村雅昭実行委員長を中心に行われた。報道は既に読売新聞が備忘録に署名していたが、正式に現地取材と記者4名派遣が了承され、議定書に調印した。

このようにおおくの紆余曲折を経て、10月17日には先発隊3名、11月5日には本隊8名、報道の4名が関空を出発した。本隊が笑農の放牧地のBCに入ったのは11月16日であった。先発隊は11月1日より続いた好天に恵まれて、第一の難関BC～C1間を突破し、C2までルート工作を完了していた。その後も先発、本隊の隊員に加え、中国隊員の若手2名、シェルパ4名のたのしいサポートを得て、珍しく続く好天に計画は順調に進んだ。第二次隊のC3があった一帯は真白の雪原で遺留物のようなものは全く見当たらなかった。第二の難場の急峻な第二バットレスも11月29日には5,670mにC3設営に成功、その上方の三段になった氷壁も突破して、12月2日には頂上稜線に到達した。あと稜線上にC4を作り、3日もあれば登頂可能と考えられた。

しかし12月2日、チベット高原に強い寒気団があり、南のベンガル湾にはサイクロンが発生しておりこれが北上して合うと第二次隊の遭難の時の大雪、1995年にネパールで大量遭難を起こした大雪に匹敵する降雪があるかもしれないという気象予報が入った。BCでも天候悪化の前兆である高層雲の巻雲が観測され、ノアによる気象図でも同様なことが予想された。C2、C1も大雪となると決して安全といえず、やむなく全員をBCに撤収させた。

登頂態勢前の休養にもなって好都合とも考えた。

しかし隊員たちが下降時に、BC～C1間の工作開始点より8ピッチ約400mの懸無氷河と岩壁に挟まれたルンゼが連日の好天のため不安定なガレ場となり、氷河のセラツクの崩壊、岩壁からの頻発な落石のため、フィックスロープが8ヶ所切断され、2ヶ所岩に埋没しているのを確認した。これまではほとんどの隊員が落石の洗礼を受けていた。これからも唯一のルートであるここを通過して登山活動を続けるのはあまりに危険と判断せざるを得なかった。隊員会議で検討を重ね12月5日夕刻、残念だったが涙をのんで撤退を決定した。

明氷氷河原頭の美しい大雪原に消えた、第二次隊の日中双方17名の隊員の鎮魂を目的とした今回の隊は、安全第一で事故の発生は絶対避けねばならなかった。5、6年に1度はあると現地で聞いたが、好天続きが裏目に出て、ルートが悪化し一触即発の危機をはらんでしまった。

12月10日には徳欽に帰った。慰霊碑で「雪よ岩よ」を歌って17名に分れを告げた。11月到着したとき、神々しい全容をすっきり見せていた梅里雪山（カワケボ）は雲に被われて姿を見せなかった。

この山に1988年に取り組んで以来の合同の相手である雲南省体育運動委員会の葉明寿総隊長、張俊秘書長以下の隊員たちは、みな誠実に登攀を支援してくれた。登攀に実際に加わった若手二人、木世俊、袁紅波の体力は十分で技術の進歩は著しかった。雲南省の登山運動が隆盛に向うことを期待したい。

始めて雲南省に入山したシェルパ4人の明るい性格、抜群の体力、勝れた技術には心から讃辞を送りたい。

今回は読売新聞の後援を受けた。東京本社より2名、大阪本社より2名の記者が派遣され、インマルサットによる日本との即時交信可能な態勢がとられた。日々の登攀活動が新

聞、テレビ、インターネットで報道された。登頂成功の報道で喜びを分かち合いたかったのだが残念な結果になった。

梅里雪山はまた未踏の聖山として残ってしまった。北東面からは今回のルート以外見出せないと思う。西面にルートがあるかどうか分らない。BCの3,400mから頂上の6,740mの高度差約3,300mは、高度は低くてもチョモランマ登攀に匹敵する。この登攀中は緊張の連続で、気を休めるところが少なくと隊員たちは言っている。私はこの聖山は天と地と人の運氣がぴったりと一致した時にしか登れないのではないかと感じた。将来いつか、日中の旗、AACKの旗が頂上にひるがえる夢は持ち

続けたいと思う。

最後になったが、きびしい経済情勢のなかで、募金、募品に応じて頂いた各会社に厚く御礼を申しあげたい。またAACKの会員のみなさんに暖かい絶大な協力を頂いた。深く感謝の意を表したい。近藤良夫後援会長、高村奉樹AACK前会長、木村雅昭ヒマラヤ委員会委員長、新井浩事務局長の献身的努力に対し、隊員一同感謝の言葉を知らない。

また登山許可の取得から日中間の交渉過程において国際交流協会の吉田與和氏、西川真子さん、安井邦彦氏にひとかたならぬお世話になった。衷心より感謝の言葉を述べたい。

## 隊の成立とその経緯

松林公蔵

### はじめに

1988年3月22日、四手井綱英を団長、吉田與和氏を顧問とする京都大学山岳会学生代表団(他に、岩坪五郎、倉智清司、戸部隆吉、松沢哲郎、松林公蔵、河合明宣、瀬戸嗣郎)が北京を訪れ、2つの登山計画の備忘録調印を行った。すなわち、「京都大学シシャパンマ医学学術登山隊」と「日中友好梅里雪山学術登山隊」である。両計画は、その後5月22日のAACK理事会ならびに総会において、AACKが派遣する隊として正式に決定を見た。

以後、このふたつの計画は並行して、しかしながら互いに独立して進められた。

梅里計画は、1988年10月から11月にかけて、横山宏太郎を隊長とした先遣隊を送り出しその報告をもとに登路、気象状況などが検討された。なおこの間、1989年5月から7月にかけて、栗田靖之隊長率いる梅里雪山科学考察隊が派遣され主として民族学、地質学の調査研究を実施している。1989年9月、左右田健次を総隊長、横山宏太郎を登攀隊長とする第一次梅里雪山登山隊が京都を出発した。第一次隊は、前年の先遣隊による偵察をもとに、ルートをシェンチェンバオ氷河にとり、登山期間はモンスーンがあげて天候がよくなる時期と、白芒山口が雪に閉ざされる時期との間の10月と11月の2ヵ月を選んだ。しかし、この一次隊は予想をはるかにうまわる悪天候のために行動可能な日数が限られ、かつシェンチェンバオ氷河の上部アイスフォールに安全な荷上げルートを見い出せなかったために登行を中止せざるを得なかった。しかし、撤退の前に、わずかな時間を利用して、シェンチェンバオ氷河の南側にかかるナイノゴル氷

河の上部雪原を北東尾根のコルから観察し、この上部雪原と主分水嶺尾根から下がるバットレスがルートとして使えそうであるとの報告をもたらした。この報告を受けて梅里隊は、バットレスがルートとして可能か否かを偵察するために、1990年2月から4月にかけて、井上次郎を隊長とする第二次偵察隊を派遣し、本ルート登攀の可能性を見い出して帰国した。

一方、京都大学ヒマラヤ医学学術登山計画のほうは、1989年4月から6月にかけて、松沢哲郎を隊長とする第一次ヒマラヤ医学学術登山隊が、崑崙西部のムスターグ・アタ峰登頂の過程で、高所における医学的予備検査を実施した。また同年8月から9月にかけては、松林公蔵を隊長とする第二次ヒマラヤ医学学術調査隊がネパール王国ナムチェバザールを中心に予備的疫学調査を展開した。高所における医学検査と高所住民を対象とする疫学調査のノウハウを得て、ヒマラヤ医学学術登山計画は、1990年3月13日、第三次ヒマラヤ医学学術登山隊として中国チベットのシシャパンマに向けて出発した。医師13名を含む総勢33名の大部隊である。シシャパンマ隊は、3月31日のベースキャンプ到着から5月31日の撤収完了までに、22名が登頂に成功し、その過程で膨大な医学的資料の収集に成功した。松林公蔵以下6名は、その後も一ヵ月にわたってチベット族ならびにシェルバ族高所住民の疫学調査に従事して帰国した。シシャパンマ隊員たちは、年末一杯まで遠征の後始末とデータの解析に追われ、1990年は暮れた。

1991年1月5日、前年の11月に再度雲南に向けて出発した第二次梅里雪山登山隊のベ-

スキャンプから北京を経て、1月3日夜半を最後に第3キャンプとの連絡が跡絶えたとの一報が京都にもたらされた。京都では、緊急協議のすえ、1月13日から17日にかけて、日本側救援隊が3陣にわかれて現地をめざした。しかし、未曾有の豪雪によって救援活動ははかどらず、二次遭難の危険性も高いため、1月25日、日中双方の協議によって救援活動は打ち切られた。

救援隊の帰国後、1991年2月11日にAACKヒマラヤ委員会が開かれ、救援隊の報告を受けたのち、事後対策が種々協議された中で、事故調査委員会を設置することが決定された。2月24日近藤良夫委員長を中心に会員9名が集まって準備会が開かれ、委員に委嘱すべき顔ぶれについて話し合いがもたれた。20名からなる事故調査委員会は、3月24日の第1回から10月27日まで計8回の検討論議の結果をまとめ、1992年1月30日、梅里雪山事故調査報告書として刊行された。

### 梅里雪山再挑戦へのうごき

梅里雪山再挑戦の気運が芽生えてきたのは、事故調査委員会の活動も終え、遭難から2年が経過し多少は平穏をとりもどした頃であった。報告書や追悼文集作成のために集まる折などに、数人の若手会員たちが、再挑戦の問題を論じあい、その意思をもった同志を探し求めている。公式の第1回目の集まりは、1993年9月12日に高井、月原、藤田、小林、陸好の5名によって、京大山岳部のルームにおいて行われた。この会議において、本隊の派遣時期は、翌94年の12月頃、偵察は94年の4月から5月に行えるよう努力することが決められた。あわせて2次隊の関係者がいた京大の探検部と神戸大学の山岳部の関係者に再挑戦の計画の存在を明らかにし、参加の意志のあるものを募ることにした。一応6名+6名の日中合同隊を想定した。京大山岳部のルームで会合をもった理由は、遠征隊の派遣

母体をAACKとすることに疑問をもっているメンバーがいたためという。

一方、1993年夏ごろから、京都の若手会員たちのこうした動きとは独立して、松沢と松林はシシャパンマ医学報告会などで会合するたびに、梅里雪山の問題を話題にしていた。松沢、松林の計画では、雲南省からチベットに抜ける「茶の道(tea road)」の少数民族に関する学術調査と関連した登山班を組織するというものであった。雲南省は、人文、科学、医学その他の面からみて学術の宝庫である。したがって、シシャパンマ方式の、学術と登山を語の正しい意味で両立させる計画であった。過去の遭難のとむらい合戦、乾坤一擲の再挑戦という認識よりも、従来のAACKが行ってきた未知への領域の探究を継承するというものであった。このような計画があることが、高井によって、京都の若手会員たちに伝えられた。

### 具体化する計画と混迷する隊構成

1993年10月10日の第2回目の集まりは、松沢、牛田、月原、藤田、小林、陸好の6名の参加のもと、AACKのルームで行われた。若手会員たちは、学術にはさして興味を示さず、主として、登攀上の諸点が討議された。登頂の可能性を高めるなら、日中合同隊の原則は崩し、日本側8名+チベット人ポーター4名の実質日本側の単独隊とする基本方針が示された。解決せねばならない問題として、当時の経済情勢を考えると募金は殆ど期待できないこと、メンバーの中から京都常駐事務局の開設の問題の2点が提起された。

10月31日の第3回目の集まりにおいて、松沢、牛田、月原、藤田、小林、陸好の6名の参加のもと、登攀タクティクス素案が提出された。フィックスロープは最小を心がけるなら、頂上アタック時とバットレス上部のみだが、最大は2次隊と同じくベタ張りなるだろうことについて話し合われた。最大の問題

は、二次隊が遭難したC3の位置に関する問題であり、思いきってC3を第二バットレス上のやや緩やかな地点に上げることが提案された。ただし、滞在期間は最低限に抑え、あくまでC4建設のための基点とすることが確認された。そして、隊を成立するためには、あと2人ほど若くて海外登山経験のあるメンバーが必要であり、関心を寄せている人を探し、働きかけることになった。

11月初旬、松沢から松林のもとに電話によって、以上のような京都の動きがあることが伝えられた。松沢の感触では、若手会員たちは登山方法には熱心だが、外交問題、AACK対策、資金調達などについては無頓着である。隊として成立するためには、AACKが認める総隊長が必要であり、現在のAACKの中で、総隊長を引き受けてくださるような人は、斎藤惇生先生しか考えられないので、斎藤先生に総隊長就任を打診するとともに、若手会員たちと総隊長をつなぐ意味で、松林もこの計画に参加してほしいとの要請を受けた。松林は、梅里にむけての若手会員の動きを斎藤先生に伝えたと、斎藤先生は総隊長就任はともかく、隊の一員として参加する旨表明された。

11月28日に第4回目の会合がもたれた。参加したのは、松沢、松林、月原、小林、藤田の5名である。これまで計画を推進してきた牛田の参加が難しいことが伝えられた。登山のスタイル、および資金の調達方法としてAACK会員への募金などが検討された。気象係の必要性および総隊長候補が検討された。

12月19日の第5回目の会合では、松沢、松林、月原、小林、藤田、神戸大学OBの川端さんの参加のもと開かれた。予算および幹部構成が議題になる。募金が可能な総隊長について話題となり、斎藤先生に総隊長就任を要請することが全員一致で決議された。松沢の当初の心づもりでは、斎藤総隊長のもとに、

登攀を松沢が指揮し、松林が学術面を担当し、登山自体は全員でこれにあたるというものであった。しかし、若手会員たちは、梅里雪山の登攀は困難であり、旧来の極地法ではなく若手の力だけでやりたい、中年組は後勤にまわってほしいと強く反発した。松沢、松林と若手隊員たちとの温度差はおおむねもなかった。松沢は、この隊は「登攀パーティーとして形は整っていても、遠征隊としては実態がない。梅里に登りたい人が核になってパーティーシップを強力にする必要がある。それができないのなら、95年の末に延ばすべきだ。」と指摘した。

1994年1月、松沢から松林に電話がかかった。「若手たちの自らの力だけで登攀を行うという意志には自分についていけない。しかし、このま放置すると、隊は空中分解するであろう。斎藤先生に協力して、若手が満足できる隊をつくってやって欲しい。自分はこの隊から降りる」という意向を伝えてきた。

1994年2月6日の第6回目の会合は、松沢、月原、富永、高井、小林、藤田、川端の参加のもと開かれた。隊が成立するかどうか、関心を持っている人の洗い出しを行う。30代のAACKの会員が数人関心を寄せているが、藤田からは中堅層のメンバーが増えても無意味であり、必要なのは若くて登れる隊員だとの指摘があった。松沢は隊に参加しないことを表明した。

2月27日 第7回目の会合がもたれ、斎藤先生も出席された。参加者（斎藤、松林、高井、月原、陸好、藤田、渡部、小林）合同隊にするかどうか再度議論され、合同隊にすると「前の隊が、下界で忙しすぎ体力調整ができていなかった」点を月原が指摘した。斎藤から、これまでの中国との経緯、AACK内部でのオーソライズの必要が提起され、ヒマラヤ委員会と理事会の開催の手配を行うことが確認された。また気象隊員の必要性が論じられ、幾人か候補があがった。登山はあく

まで、高井が登攀隊長として指揮をとり、若手を中心にした登攀隊員たちだけで登る。94年の末に偵察、95年に本隊を派遣することで具体的に案をつめることを基本方針とすることが確認された。

4月15日、第8回の集まりでは、斎藤、中山、牛田、高井、陸好、藤田、小林、渡部および、藤田の紹介で北海道大学WV部OBで同大学の低温科学研究所助手の福沢卓也氏が参加する。福沢は、二次隊で遭難した近藤とパタゴニアと一緒にいており、近藤より梅里の写真をもらい、この山が気になっていたという。1994年秋には、日本ヒマラヤ協会隊の一員としてミニヤコンカに行くという。気象は専門外だが、気象衛星ノアの画像なら解読できるという。気象担当の人選が議題となる。また、中山からは中国人にルートワークをさせた場合の危険性についての指摘があり、その点でも合同隊はさげ、西藏人を使うべきとの意見がでた。またC3の位置について、バットレスは堅い氷であり、削ってテントを張るのは大変な困難をとまなうこと、登攀のルートは前回のものが唯一であること、および、BC建設を11月1日から15日までにやるべきだとの意見がだされた。

4月19日、ヒマラヤ委員会が開催され、梅里計画について種々の討議がなされた。隊をだすこと自体に反対は少なかったが、偵察隊の派遣については既知のルートであることおよび経済的な面から難色を示す意見がだされた。

5月8日、第9回の隊員会議には、斎藤、松林、高井、陸好、小林、藤田、渡部が出席し、先に開かれたヒマラヤ委員会の意見をもとに討議がなされた。高井はC3のテント設営地を確認し地形と氷の状況を確認しておくことは、本隊で登れる可能性が高くなるので、偵察隊はあくまでだすべきであるとの意見であった。また、梅里家族訪問団に参加した斎藤からの報告があり、目を見張る発展を遂げ

つつある雲南省についての報告と、雲南省体育運動委員会を尊重すべきとの意見がだされた。

1994年5月28日、AACK理事会ならびに総会において、梅里再挑戦に対して、一部危惧する意見が出されたが、基本的にAACKとしては了承することが決議された。

6月13日から15日まで、中国登山協会主席に就任した王富州が来日し、斎藤、松林が、王一行に随行し、梅里再挑戦の可能性を打診した。王主席は、原則的に協力を約束したが、同行した陳尚仁氏から、(1) ルートの困難性、(2) 徳欽県現地の問題、(3) 北京と雲南との関係、という3つの困難があると指摘された。

6月25日、第10回隊員会議には、松林、高井、小林、福沢、富永が出席し、斎藤と松林の王富州との会談内容が報告された。CMAの意見では、雲南省とも交渉が必要であり、雲南省との折衝には吉田與和氏の力を借りなければ困難であることが指摘された。しかしながら、高井からは、現在の段階で吉田氏に頼むのではなく、別の方途を探したいとの意見が出た。また福沢からは、若い人をつなぎとめていくためには、わかりやすい形が必要である。若者だけで努力してみても、それでも困難であれば、吉田氏に懇請するとの意見がだされた。しかし、具体的な代案は見い出せなかった。

#### 困難な外交折衝

1994年8月15日から9月4日まで、松林は、高知医大雲南医学術調査隊を率いて、雲南省を訪れた。中国側のカウンターパートは中国科学探検協会であったが、雲南省の接待窓口としては、雲南登山協会が副業として対応した。麗江、劍川での医学調査を終えて昆明にもどった際に、雲南省体委の張俊と会談した。数日前に、同じく人文調査の目的で昆明を訪

れていた松沢は、張俊とすでに会談しており、京大単独隊の梅里再挑戦を打診していた。張俊は、雲南側にもいろいろな事情があるので、梅里については、合同計画でなければ対応が困難であるとの感触であった。

9月15日、斎藤と松林は、吉田與和氏に、梅里再挑戦に関して協力を要請する会談をもった。その際、第二次隊遭難にともなう未解決な問題が残っていることを指摘された。すなわち、(1)空撮時に努力してくれた中国空軍の将軍たちが来日した際の費用は吉田氏が立て替えている。(2)雲南科学考察隊派遣時に世話になった科学院に対する土産として二次隊が用意したカメラが、あやまってシヤバンマの荷物に入り、雲南側に届いていない。また、吉田氏は、これまでの雲南省との関係を考慮するならば、倉智清司氏を隊の秘書長として遇する条件のもとに、協力することにやぶさかではないとの意向であった。

9月18日、第11回隊員会議(斎藤、松林、高井、陸好、小林、中村)CMAの王富州および陳尚仁を訪ねたことと、斎藤、松林で吉田與和氏への協力依頼が報告された。陳尚仁の意向では、北京が望む隊の構成は北京-雲南-京大の三者の密接な関係であり、チベット族の参加には否定的である。そこで隊員会議では、合同隊の可能性を検討し、受け入れ可能な中国側登攀隊員の員数は2から3名が限界であり、彼等を指導監視することを考えれば、チベット族高所協力員が4人必要になることが討議された。このような場合、3者の関係が4者と複雑になり、さらに経費がかさむことが懸念された。募金に関しては、4・5・6月の短期に集中して行うほうがよいとの方針が決まった。そして、10月にヒマラヤ委員会を開催し、中国交渉の開始をとりつけ、初動金を調達するという基本方針がたてられた。

### 隊員の離脱と再結成

この夏から秋にかけて、隊員候補であった月原が、仕事の多忙を理由に隊員を辞退した。ついで、1994年9月28日、日本ヒマラヤ協会主催の中国四川省のミニヤコンカ遠征隊に参加していた福沢を含む4名が雪崩のために行方不明との報が入った。数日後、捜索も打ち切られ生存は絶望となった。これに伴い、福沢が抜けた隊そのものの力に不安を感じた藤田が参加辞退を表明、隊としての力量が激減し、高井は自らが登攀隊長として隊を率いることは不可能と判断し登攀隊長を辞退するという事態がおこった。計画はいったん頓挫した。

隊を白紙に戻して解散することも考えた。しかし、「ここまで来てひきさがれない。外人部隊を投入してもやりとげる」という斎藤総隊長の決意はなみなみならぬものがあつた。松林は、若手の会員と同じ登山指向性を有し、若手を率いる登攀隊長として人見五郎と交渉し、人見は登攀隊長就任を受諾した。人見は数ヶ月前に、梅里再挑戦の動きを聞いて、隊への参加を打診してきたことがある。しかし当時、高井を登攀隊長として隊はまとまりつつあり、若手隊員は、高井よりも年上の中堅層の参加を好まなかった。しかし現在では、自分たちの力だけでやると言っていた若手会員たちが次々と離脱していつているのである。人見は、登攀隊長就任にあたって、登攀の全指揮権をにぎること、中山を参加させることを条件とした。また、これまで、自弁であった隊員会議出席のための交通費支給を制度化するよう要望した。松林は、何度議論しても具体化しない気象係の担当として、福崎賢治と交渉し、気象担当後勤隊員として参加することを要請した。福崎は理学部出身で、数学者であるが、中島暢太郎名誉教授や安成氏、森本氏といった気象の専門家と相談し、気象学の勉強にとりかかった。こうして隊員を再編成し、計画を当初の予定の95年秋から1年先に延ばし、96年秋の実施に向けて再始動す

ることとなった。

### 外交折衝再開

1994年11月2日から4日にかけて、斎藤、松林は北京のCMAを訪ね、梅里再挑戦に対する北京の意向を確かめた。その席上、王鳳桐CMA副主席は、以下のCMA見解を述べた。

- # 登山隊編成について、二国三方面合同(北京、雲南、日本)が望ましい。
- # チベット族の参加については、雲南やチベットと相談しなければわからない。
- # 事故をおこした山への再挑戦であるから、現地民族感情、宗教的なことは、初めて入る地域よりも困難である。
- # 雲南低所ポーターについては訓練する必要がある。
- # 北京は協力を惜しまないが、最終的な決定は、昆明次第である。
- # AACKとしては直接昆明と連絡を取り合うのがよいだろう。

以上から、北京は、積極的に梅里計画に参加してこない公算が大であることが推測された。

1995年5月28日、AACK理事会ならびに総会において、96年秋に本隊を派遣することが了承され、それに向けて、吉田氏を通じて雲南と交渉してゆく方針が確認された。1995年8月、松林は、高知医大の医学学術調査隊を率いてチベットを訪れた。これは、前年来日したCMAの王鳳桐、張江援から、1995年8月にチベットニューラム県に診療所を新設するので、ぜひ来て欲しいとの要請を受けて高知医大の隊を組織したものである。約20日間のチベットにおける医学調査期間中、王鳳桐、張江援と行動をともにした。この間、AACKの梅里再挑戦について、多くの意見を交換した。王鳳桐によれば、中央と地方組織との力関係は過去と較べると逆転しており、梅里計画に関して、CMAは主導権は握れない。計

画全体にわたって昆明の考え方が最優先されるであろう。しかし、もしも雲南が了承すれば、チベット族高所協力員の派遣については斡旋できる用意がある。北京としては、雲南が了承する範囲内において、極力、京大に協力できるであろうとのことであった。これらの意見を交換して、高知医大隊は帰国した。

1995年9月、斎藤総隊長の紹介で、広島山の会の吉村千春の参加が決定し、登攀隊としての層がより厚くなった。各担当が決められ、具体的な準備作業が始まった。

以後、若手隊員たちは人見登攀隊長のもとに結集し、松林、福崎が後勤を勤め、倉智が対中国交渉の窓口となる秘書長に就任した。

1996年2月、人見登攀隊長および国際交流協会の吉田、西川が訪中し、北京で中国側と予備交渉を行なった。この交渉結果を受けて、京都大学学士山岳会ヒマラヤ委員会において、木村雅昭がヒマラヤ委員長に就任し、実質的な実行委員会の責任者となった。同年3月には木村、斎藤、松林、倉智が、後援予定の島田読売新聞運動部長とともに昆明を訪れ3月12日備忘録に調印した(資料1)。

備忘録の調印により、計画の具体化に向けた準備が本格化した。5月の連休では赤谷尾根から剣岳への合宿を組み、雪崩対策の一環として雪崩ビーコンの使用法の練習を行うなど、梅里を念頭においた山行を行った。4月末よりAACKの新井浩が事務局長に就任し事務局は強化された。また、5月連休後より中村が専従事務局長として加わった。吉田與和氏へ正式に登山隊顧問の就任を依頼し、6月初めに議定書調印日団を迎えるべく準備がすすめられた。

登攀タクティクスについても、登攀隊長作成の登攀計画案を、AACK遠征経験者が中心となって検討する場がもたれ、隊員外からの登攀に関する意見をもう一度隊内にもちかえりさらに改正案が練られた。

1996年5月26日のAACK理事会ならびに総

会において、梅里雪山計画は一般会員にも周知され、会員募金が呼びかけられた。

なお、この頃、当初読売新聞社とともに後援が予定されていたNHKが、諸般の事情で降板することが、読売新聞社島田運動部長より伝えられた。実行委員長の木村は、対中国窓口の倉智秘書長に、NHK降板の事実を至急昆明に伝達するよう指示した。

#### 議定書調印団来日のめどたたず

当初、5月連休後に、昆明から雲南省体委の一行が来日し、議定書の正式調印をおこなうことが予定されていた。しかし、議定書調印団の来日は6月になっても一向に実現しなかった。倉智秘書長、吉田顧問を通じて問い合わせても現地の事情はつまびらかでなかった。徳欽現地住民に対する調整が難航しているらしいということ以外は不明であった。隊荷を集結して待機する隊員にはいらだちがつわっていった。7月に入っても議定書調印の見通しが立たなかった。準備期間の逼迫により隊の派遣は事実上不可能な段階に入りつつある。1996年7月7日、AACK拡大ヒマラヤ委員会が開催された。本委員会には吉田顧問も同席した。この時期にいたって調印団の来日が実現していない以上、本年の隊の派遣は中止すべきであるとの意見が、委員の大勢を占めた。隊員の中にも、諦感と同時に、このようなぎりぎりの時点まで出発の是非が定まらない現状では、登山事態が危険性をはらむとする危機感がつわった。最終的に木村実行委員長、斎藤総隊長は、7月20日を限度に、議定書調印の目処が立たない場合は本年度の計画を断念する事を決定した。この時点で事実上計画は保留となり、これをきかけとして今までの反省点や問題点が隊内部からも指摘された。

#### 隊内批判の噴出

隊員の多くは、本年の梅里隊派遣が事実上

不可能であると感じていた。1993年以降、星霜流れ隊員も入れ替わり、舵とる船頭の顔触れもかわってはきたけれども、隊としては営々として梅里計画に取り組み、やっとここまでこぎつけてきたのだ。若手の隊員たちの中には、もってゆきどころのない憤懣が噴出した。今まで、問題にされながらも、実務に追われて十分に議論できなかった、反省点や問題批判が一挙にふきだした。

議定書調印団訪日の目処が立たず計画が保留になった時期を中心に、隊内部で指摘された問題点や批判をまとめると、以下のような点に要約し得る。

#### (1) トレーニングについて

トレーニング山行の不十分さが指摘された。問題意識を持った上でのトレーニングや、技術的な問題点を考えそれを克服するための合宿が不足している事以外に、メンバーシップを養成するという意味での合宿の不足も指摘された。また、普段、国内山行にあまり行っていない隊員に対して、不安が指摘された。雪崩対策に関しても訓練や学習の面で、まだ出来ることのあるのではないかと指摘された。

#### (2) 問題意識について

梅里雪山をどのような意識で登るのか、についてのお互いの考え方の確認がされていないことに対する不安が指摘された。具体的にはシェルパを使うのか、使わないのか、使うならばどのように使うのか、というテクニカルな問題から、全員で頂上をめざすつもりで登るのかどうか、という理念の問題に及し、この時点では隊内で最終的な詰めがなされていない。シェルパ雇用の問題は、雲南の意向が不明であり、最終的な結論が出ていないため、議論のしようがなかったが、理念の統一は無理でも、お互いに考えを述べあうことが必要だとの意見があった。

#### (3) 隊員会議の効率化について

全国各地に分散する隊員が京都で会議を開くためには時間と経費がかかる事もあり、隊員会議の効率化が提唱された。FAX交換などで済む話は出来るだけ事前にしておく、レジメを完全に用意するなどの提案がなされた。

#### (4) 物品の管理について

過去の遠征隊装備のうち、散逸してしまっているものがあり、物品の管理をさらにしっかりするよう提案があった。

#### (5) 京都在住隊員に仕事が集中することについて

京都で実働する数人に作業の大半が集中し、登山そのもののトレーニング等に割く時間がなくなってしまうことの問題性が指摘された。

#### (6) 計画への取り組み方の認識について

AACK外部との接触が少ないことによる、登山界一般からの認識のずれがあるのではないかと指摘があった。特に、なるべく自費、自力で計画を実行するよう努力すべきとの指摘があった。

#### (7) 計画実現へ向けてのモチベーションについて

梅里雪山に対する「登りたい」という強いモチベーションが隊員各自にあるのかどうか、再確認の必要性が指摘された。また、そのような強いモチベーションを培っていくことの重要性が指摘された。

以上のような内部反省、批判が、主として隊員間E-mailで討議された。このような10日間を経た7月18日、突如、雲南調印団が来日するという報がもたらされたのである。

#### 急転直下の解決

7月18日、雲南調印団が、8月初旬に来日

するとの報が、吉田事務所を経て伝えられた。まさに、急転直下の事態変更である。諦念におおわれていた隊員たちは、気をとりなおして、来日団の受け入れ準備を開始した。

8月7日、京大会館において、雲南省体育運動委員会の葉明寿団長、中国登山協会の李致新副主席、京都大学梅里雪山実行委員長の木村雅昭、読売新聞社の島田公博論説委員による、議定書の調印がおこなわれた(資料2)その後、共同記者会見が行われ、梅里雪山再挑戦の計画は正式に発表された。隊では、議定書の運用に関する実施原則(案)をすでに用意していたが(資料3)、相互の信頼にもとづいた協議で十分ということになり批准はされなかった。シェルパの雇用が決定し、雲南側登山隊員4名が参加することが明らかにされたが、すべて人見登攀隊長の指揮下に入ることが確認された。

議定書の調印を受けて、装備調達、梱包、輸送、その他の実務的準備が本格化し、8月末には隊荷の船便第一便を発送、さらに9月初旬には第二便を発送した。

9月21日から23日にかけて、読売新聞の現地随行者・カメラマン計4名を含めた隊関係者全員参加のもとに広島三倉岳で最後の合宿が行われた。10月6日、京大会館にて壮行会が開かれ、17日には先発隊3名(人見、中山、小林)が日本を出発した。11月5日、斎藤総隊長以下、本隊8名と読売新聞記者2名が関空を出発した。

#### おわりに

第三次梅里雪山隊の性格的特徴は、当初、AACKの若手会員たちが、先輩たちが果たせなかった梅里雪山の初登頂を自分たちの力で近代的登山方法で登りたいという素朴な情熱から始まったように思われる。梅里雪山の高度、登攀の困難性などからみて、体力と技術がそなわった若い精鋭を集めて短期間に登るべきであるとした彼等の考え方自体はおそら

くまちがっていなかったであろう。速攻ながらも従来の極地法で、しかも中堅の経験者層が登攀指揮をとろうとした初期の松沢案に対して、若手が反発した経緯からもそれはよくみ取れる。松沢が隊を降りたのちも、彼等の「自分たちで手作りの登攀」をやりたいという意識は濃厚であった。しかし、若手隊員たちの発想はあくまで、ベースキャンプ以上のタクティクスであった。AACKという組織と直接の接触を当初好まなかった彼等も、現実的な隊の組織化となるとAACKに頼らざるを得ず、斎藤、松林に隊の基礎造りを依頼してきた。また、若手の梅里登頂に対する結集エネルギーは比較的もろく、月原がまず仕事の多忙を理由に不参加を表明し、ついで登攀能力が期待されていた福沢氏がミニヤコンカで遭難すると、隊の中核であった藤田が離脱し、それにともない高井も自信がないとの理由で登攀隊長を辞退した。若いスタイルで登るべきだとしながらも、彼等自身で登攀隊長をみつめてくることができず、結局は、松林が人見と折衝した。若手にしてみれば、人見ですら年寄りすぎるという不満は強かったようであるが、彼等と同じ体力、技術力で若手を指揮できる若いアクティブな会員は残念ながらAACKには居なかった。後勤を余儀なくされる気象係についても、若手の中から候補者はあられず、福崎に懇請して参加してもらった。

第三次梅里雪山隊が背負ったいま一つの問題は、少数精鋭の若手クライマーたちが短期間でアルパインスタイルで登るに足らず、解決しなければならぬ政治的な問題が大きすぎることであった。第三次梅里計画の外交折衝に入ってから明らかになったことは、第二次隊の政治外交的に未解決な問題がどっと噴き出したことである。当初、先輩たちの遺志を継承しようと初々しいエネルギーをもって梅里登山を夢見ていた若手たちは、隊の派遣を交渉してゆく過程で、登山以外のベース

キャンプまでの政治的、外交的距離がはなはだ長いことにうんざりしてゆく。AACKの古典的遠征はどちらかといえば、ベースキャンプ以上の登攀よりも、隊が出るまでの過程に苦労が多かった例が少なくない。しかし、時代は確実に変わっている。若手隊員たちは、自費でしかも外交折衝などはビジネスライクにすまし、山そのものと真剣にとりくみたいという意識が強かった。過去の経緯を考えなければ、梅里雪山は本来そのような山だろう。しかし、現実の梅里雪山はそうはいかなかった。そこにかかる費用、外交上の諸問題、過去の負債等いずれをとっても、AACKが総力をあげたからこそ実現可能だった。しかし、準備段階における隊員会議の席上や京都事務局が忙殺された大半の問題は、若手が好まない政治外交問題であった。しかも、隊の派遣が正式に決定したのは先発隊が出発するわずか3ヵ月前であった。日中合同隊でありながら、雲南側の隊員の資質、人数、運用については協議できないままに、先発隊は昆明入りせざるを得なかった。

結果的に、私たち第三次隊も梅里雪山の頂上に達することはできなかった。しかし、ベースキャンプ以上のルートを振り返ると、天候と人に恵まれるなら、従来のAACKの登り方で十分に登れる山であると思われる。いたるところにルート上の危険性があり、その年の気象条件によっては重大な結果をきたすおそれのある地域ではあるが、特別な精鋭が特別なタクティクスを用いなければ登れないという山ではないような気がする。しかし、この認識は第二次隊の貴重な教訓があったからこそ得られたものである。

ベースキャンプにおいて、撤退すべきか強行すべきかが論議されたとき、私は強行すべきであると主張した者の一人であった。しかし、今になって冷静に考えると、頂上を目前に撤退するに至ったこと自体が私たちのパーティーの限界だったのかもしれない。山登

り、とりわけ初登頂には、あるとき安全を賭しても賭けに出る局面が必要なことがあるが、今回の登山過程全般を通覧すると、登頂はできなかったが、全隊員を無事に返した登攀隊長の判断が正しかったようにも思われる。

しかし、歴史にIfは許されない。AACK会員や社会の応援をいただいて出発したにもかかわらず、初登頂し得なかった責は全隊員が負うべきである。

(資料1)

### AACK 備忘録調印団訪中報告

#### (1) 団員

団長：木村雅昭：AACK副会長、ヒマラヤ委員会会長  
 京都大学法学部・教授

副団長：斎藤惇生：梅里雪山合同登山隊・日側総隊長  
 新河端病院院長、AACK理事

秘書長：倉智清司：梅里雪山合同登山隊・日側秘書長  
 株式会社あおやぎ取締役営業部長

顧問：島田公博：梅里雪山合同登山隊・日側報道隊代表  
 株式会社読売新聞社・運動部長

団員：松林公蔵：梅里雪山合同登山隊・日側統括隊長  
 高知医科大学老年病科・講師

#### (2) 期日

平成8年3月8日-13日

#### (3) 行動概要

3月8日：関空-北京(斎藤、倉智、松林)  
 成田-北京(木村、島田)  
 CMA関係者と打ち合せ(曾曙生、李致新、陳尚仁、干良撲、李豪傑、王勇峰)於：天橋賓館

3月9日：昼食歓迎会(曾曙生、李致新、陳尚仁、李豪傑)  
 北京-昆明  
 雲南体委歓迎会(葉明寿、許曉華、張俊、李保誠、余放雄、李志平、劉長寿、秦建楊、徐弘、故王建華夫人)

3月10日：午前・午後：協議

3月11日：午前：協議  
 午後：備忘録作成、翻訳  
 夕：日側答礼宴

3月12日：昆明-北京

午後：CMAと協議(曾曙生、李致新、陳尚仁、干良撲、李豪傑)  
 夕：日側答礼宴(曾曙生、李致新、顏金安、陳尚仁、干良撲、李豪傑、史占春、王富洲、王鉄銘、金俊喜、愛新覺羅夫妻、劉大義、王振華、陳建軍、王淑琴(故宋志義夫人)、張小欣(故孫維琦夫人)、日本大使館領事部2名、北京日本人会婦人部能勢氏、読売新聞社北京支局2名、国際交流協会・有馬豊以下2名)

3月13日：北京-関空

#### (4) 協議の論点要約

##### # 基本的方針

- 1) 登山は日中合同
- 2) 京大が主(登攀)、雲南は副(後方)、CMAは両者調整
- 3) 時期は1996年11-12月
- 4) 経費は主体を京大が負担
- 5) 現地住民感情を十分配慮する
- 6) 雲南主張
  1. 物価の値上がり激しく、経費は前回よりもかさむ。
  2. 急な申し入れなので、十分な準備はできていない。
  3. 現地の要求はまだ把握していない。

##### # 報道

- 1) 読売新聞とNHKが報道隊を構成することには合意
- 2) 登山以外の取材はしない。
- 3) 報道は中央政府の規定にしたがって手続きをとる
- 4) 読売4名、NHK4名、共通日本人協力員1名、計9名
- 5) C2より上部へは行かない
- 6) インマルサットを通じて日本との連絡にあたる

7) 報道隊用の高所協力員5名を希望

##### # 組織

総隊長：日中各1名(日方：斎藤惇生)  
 統括隊長：日中各1名(日方：松林公蔵)  
 秘書長：日中各1名(日方：倉智清司)  
 登攀隊長：日本側1名(人見五郎)  
 (中国側の具体的人選は未定)

登攀隊長は登攀に関して全責任と権限を有する。

統括隊長は、登攀と報道のうごき全般を統括し、日中協議のうえ決定する。

##### # 登山隊員

日方：7名(気象係1名を含む)  
 中方：員数、人選は未定

##### # 名称

日方：「日中友好梅里雪山峰合同学術登山隊、1996」  
 中方：「'96中日友好梅里雪山峰合同登山隊」

##### # 高所協力員

日方提案

- 1) 安全と成功のために高所協力員の存在は欠かせない。
  - 2) チベット登山協会登山家(案)
  - 3) ネパール・シェルパ(案)
- 雲南見解

- 1) 登山の成功のために、強力な高所協力員が必要なことは十分理解する。
  - 2) 民族感情が最大の問題である。このことを十分理解している吉田氏と再度相談して欲しい。
  - 3) チベット登山協会登山家については、徳欽県と協議する。
  - 4) 雲南協力員の確保であれば自信がある。
- CMA見解

1) すべては、昆明と現地との協議いかんによる。

2) チベットよりもシェルパの方が受け入れ易いと推測する。

(曾曙生)

3) 雲南の体育家を懐柔県でトレーニングし、そのうち2名程度を仏シャモニでの中仏合同訓練に参加させることも可能である。その際、中国-仏の国際航空運賃は日側で負担して欲しい。

##### # 経費

- 1) 昆明からBC(BC滞在を含む)への往復は、雲南が負担する(確定)。
- 2) 日側は26人乗りマイクロバス1台と7人乗りジープ4台を提供する。  
 (ほぼ確定-新車、中古車については協議継続)
- 3) 以下、日本側提案
  1. BCより上の全食糧、装備は日方負担
  2. 中方隊員、協力員の必要装備は日方負担
  3. 日方隊員の国際航空運賃と中国国内航空運賃は日方負担
  4. 装備の昆明までの輸送費は中方負担
  5. CMAメンバーの中国国内航空運賃は中方負担

##### # 議定書の調印

- 1) 議定書の調印はできるだけ簡素にやりたい。
- 2) 調印は、今後の懸案の協議を考えると5月中旬から下旬となる。
- 3) 来日中方員数は5名(全額日方負担)。

##### # その他

- 1) 隊荷の中国入境は、登山隊入国の1.5ヵ月前(天津)。
- 2) 燃料用ガスボンベは車と一緒に陸路で輸送する。
- 3) 酸素は、日本側で用意する。

(資料 2)

### 備 忘 録

雲南省体育運動委員会、中国登山協会、日本国京都大学学士山岳会、日本国読売新聞社は、1996年3月10日-11日の協議において、以下の事項を討議し合意した。

出席者

雲南省体育運動委員会：葉明寿（副主任）、許曉華（副主任）、張俊（辦公室副主任）、李保誠、余放雄（計画、調度処）、李志平（接待処）、秦建揚、徐弘（經理）

中国登山協会：李致新（副主席）、陳尚仁（常務委員）

京都大学学士山岳会：木村雅昭（副会長）、斎藤惇生（理事）、倉智清司（隊秘書長）、松林公蔵（理事）

日本国読売新聞社：島田公博（編集局運動部長）

#### (1) 基本方針

雲南省体育運動委員会（以下：雲南）、中国登山協会（以下：CMA）、京都大学学士山岳会（以下：京大）の3者は、1988年以來の経過を踏まえて、1996年11-12月をめどに、梅里雪山峰に再挑戦する合同登山を実施することに合意した。

なお、今回の合同登山は、京大を主体として、雲南がこれに協力し、CMAが両者の調整役としてあたる。

本登山の遂行にあたっては、遭難した17名の岳友の慰霊を念頭におきつつも、登頂成功と安全第一を旨とする。

登山の実施に際して、現地少数民族の感情に十分配慮する。

#### (2) 隊の名称

日方：「日中友好梅里雪山峰合同学術登山隊、1996」

中方：「'96中日友好梅里雪山峰連合登山隊」

#### (3) 実行組織

社団法人日本国京都大学学士山岳会

中国雲南省体育運動委員会

中国登山協会

（後援：日本国読売新聞株式会社、日本放送協会（NHK））

#### (4) 組織構成

日方：総隊長：斎藤 惇生

統括隊長：松林 公蔵

秘書長：倉智 清司

登攀隊長：人見 五郎

中方：総隊長：1名（未定）

統括隊長：1名（未定）

秘書長：1名（未定）

登攀指揮は、原則的に登攀隊長がこれを行う。報道その他を含めた統括指揮は、日中双方の統括隊長が相互に協議して決定する。

#### (5) 登山隊員

日方：上記を除いて、他に7名（気象係1名を含む）

中方：未定（追って協議する）

#### (6) 時 期

1996年11月-12月

#### (7) 登山活動

1) 登山対象 雲南省最高峰 梅里雪山峰登頂

2) ルート 昆明—大理—中甸—徳欽—梅里雪山

#### (8) 経費負担

（総論）

合同登山のために直接要する費用は、主として京大が負担する。雲南、CMAは日中友好事業の原則に基づき、一部経費の負担と、

全体経費節減に最大の努力をはらうものとする。

（各論）

(1) 昆明から大本営（滞在を含む）往復に要する費用は雲南が負担する。

(2) 日本から雲南に提供する車両は、26人乗りマイクロバス1台と7人乗りジープ4台とする。

(3) 上記以外の費用の分担については、協議を継続する。

#### (9) 高所協力員

本登山は、過去の遭難、対象山域の地形的ならびに気象的困難性を考慮すれば、強力な少数精鋭をもって短期間に頂上を攻撃し、登頂後はすみやかに撤収することが、安全対策上必須である。

登山経験の乏しい現地協力員が、不測の事態に遭遇することを防ぐために、登山経験豊富な「高所協力員」の協力が是非とも必要である。

「高所協力員」の候補として、日方は、(1) 西藏登山協会の登山家（案）、(2) ネパール・シェルパ（案）を提案した。これに対し、雲南体委は、現地少数民族の民族感情のうえから、多くの困難な問題を含むものの、今後、現地政府機関と協議して、その可能性の実現のために最大の努力をする旨約束した。

#### (10) 報道に関して以下の通り合意した

1) 日本側報道隊として、読売新聞社とNHK（日本放送協会）が参加する。

2) 報道隊は、登山隊の登頂計画を中心に報道活動を行い、登山隊はそれに協力する。ただし、報道隊は少数精鋭を旨とし、登山隊の登山活動に支障をきたさないよう配慮する。

3) 日本側報道隊の中国国内における経費は、中国登山協会の対外開放費用徴収規定に

基いて支出、精算する。報道隊が使用する車両に関する経費は、同規定に基づいて使用料を支払う。

4) 日本側報道隊に対する関係事項は、中国登山協会、雲南省体育運動委員会と読売新聞社、NHKとで別途協議して定める。

5) 読売新聞社はベースキャンプでインマルサット（海事通信衛星）を利用して報道活動にあたる。必要な諸手続きは、中国登山協会と協議して進める。

6) 日本側報道隊は、中国国内での必要諸手続きのため、早急に申請書を中国側に提出する。

7) 読売新聞社とNHKは相互に協力しあうことを旨とし、報道隊員の人員は最大限それぞれ4名の計8名とし、これに両者共用の報道協力員（日本人）1名を加える。

8) 報道隊を支援する中国人高所協力員として、最大限5名を準備する。

#### (11) 議定書調印式

議定書調印は、1996年4月-5月の適切な時期に日本国京都で行う。

日本国社団法人京都大学学士山岳会

木村雅昭

中国雲南省体育運動委員会

許 曉華

日本国報道隊代表、読売新聞社

島田公博

中国登山協会

1996年3月12日

於：昆明



(資料3)

### 日中友好梅里雪山峰合同登山隊に ついての議定書

社団法人京都大学学士山岳会および中国雲南省体育運動委員会ならびに中国登山協会は、日中友好梅里雪山峰登山隊を組織し、雲南省未登の秀峰梅里雪山に登山することに同意した。

三者は、友好的な協議を通じて、以下の項目について議定した。

#### 一、登山隊組織

##### 1. 隊の名称

日中友好梅里雪山峰合同学術登山隊、1996

##### 2. 総人数： 名

3. 総隊長：日本側 齋藤 惇生  
(京都大学学士山岳会理事)  
中国側 葉明寿  
(雲南体委副主席)

統括隊長：日本側 松林 公蔵  
(京都大学学士山岳会理事)

秘書長：日本側 倉智 清司  
(京都大学学士山岳会会員)  
中国側 張 俊  
(雲南体委副主任)

登攀隊長：人見 五郎  
(京都大学学士山岳会会員)

##### 4. 派遣団体

日本側 社団法人 京都大学学士山岳会  
中国側 中国雲南省体育運動委員会  
中国登山協会

#### 二、登山隊活動概要

1. 登山対象：雲南省最高峰 梅里雪山峰登  
頂 6,740m

2. 入山ルート：北京——昆明——大理——  
中甸——徳欽——梅里雪山峰

3. 期 間：1996年11月—12月

三、報道 当事業の主旨を遵守し、登山活動  
に限定した報道班を別途組織する。

四、合同登山隊は、中華人民共和国および雲  
南省政府が定める関係法令ならびに中国登山  
協会の諸規定に従い、これを遵守する。

五、合同登山隊の構成、装備、食糧、経費等  
の詳細については、日中双方が議定した備忘  
録ならびに、本議定書に付随する議定書内容  
の実施原則に則って実施する。

六、以上の各項目について三者は完全に合意  
し、その実施を保証した。本議定書に定め  
のない項目については、友好的な協議を通  
じて解決する。

七、本議定書は、日本文、中国文によって、  
一式三部を作成し、同等の効力を有する。三  
者はそれぞれ各一部を保有する。本議定書は  
署名された日より効力を発する。

日本国 社団法人 京都大学学士山岳会 代表

中華人民共和国 雲南省体育運動委員会 代表

中国登山協会 代表

立会人 日中友好梅里雪山合同登山隊後援会長

1996年8月7日 於京都

(資料4)

### 1996年5月 日調印議定書の内容に 関する実施原則 (日本側案)

#### 日中友好梅里雪山峰合同登山隊

社団法人京都大学学士山岳会および中国雲  
南省体育運動委員会ならびに中国登山協会  
は、日中友好梅里雪山峰登山隊を組織し、雲  
南省未登の秀峰梅里雪山に登山することに同  
意した。

三者は、友好的な協議を通じて、以下の項  
目について合議した。

#### 1. 主催団体

社団法人京都大学学士山岳会、雲南省体育  
運動委員会、中国登山協会

#### 2. 組織機構

1) 名称 日中友好梅里雪山峰合同登山隊、  
1996

2) 総隊長：日本側 齋藤 惇生  
(京都大学学士山岳会理事)  
中国側

統括隊長：日本側 松林 公蔵  
(京都大学学士山岳会理事)  
中国側

秘書長：日本側 倉智 清司  
(京都大学学士山岳会会員)  
中国側

登攀隊長：人見 五郎  
(京都大学学士山岳会会員)

#### 3. 登山期間

1996年10月より1991年1月の間  
(事前準備や気候の関係による登山活動前  
後の予備日程を含む)

#### 4. 登山活動

1) 登山対象：雲南省最高峰 梅里雪山峰登  
頂 6,740m

2) 入山ルート：北京——昆明——大理——  
中甸——徳欽——梅里雪山峰

3) 登攀期間：1996年11月—12月

#### 5. 経費負担

合同登山のために直接要する費用は、主と  
して京大が負担する。雲南、CMAは、日中  
友好事業の原則に基づき、一部経費の負担と、  
全体経費節減に最大の努力をはらうものとす  
る。

詳細は以下のとおり

##### # 日本側負担

1) 日本人隊員の国際航空運賃ならびに中国  
国内航空運賃

2) 高所登山用装備ならびに大本营より上部  
の高所食糧のすべて

3) 中国側隊員の高所装備に要する費用

4) 「高所」協力員の高所装備に要する費用と  
雇用賃金

5) 雲南省梅里雪山地域現地少数民族に対す  
る対策費として、雲南対して、26人乗り  
マイクロバス1台と7人乗りジープ4台  
を提供する。

##### # 雲南体育運動委員会負担

合同登山隊が昆明から大本营(滞在を含む)  
往復に要する滞在費、生活費、及び活動費と  
隊荷運搬費。

##### # 中国登山協会負担

1) 北京滞在費

2) 天津～昆明までの隊荷・車両の通関、輸  
送業務に関する費用

3) 中国登山協会隊員の北京—昆明の往復航  
空運賃ならびに手配費

上記以外の費用の分担については、三者が  
友好的に協議して決定する。

## 5. 高所協力員

- 1) 合同登山隊は、登頂の成功と隊の安全第一を確保するために高所登山に熟達した「高所協力員」を最低3名雇用する。
- 2) 高所協力員に関する雇用費用は日本側が負担する。
- 3) 雲南省体育運動委員会は、上記高所協力員の雇用を円滑にするため、現地政府に対して工作を行う。
- 4) 中国登山協会は、合同登山隊の高所協力員雇用手続きに対して協力する

## 6. 生命保険

日中双方の登山隊員は、今回の活動を開始する前に各自生命保険をかける。保険料は、掛け主もしくは受取人の支弁とする。活動の過程で安全問題が発生すれば、日中双方が友好的に協議し解決する。

## 7. 少数民族に対する配慮

日中合同登山隊は、中華人民共和国の関係法律と政策ならびに雲南省の諸規定を遵守し、地方の少数民族の風俗習慣、宗教信仰を尊重する。

## 8. 報道活動

- 1) 当事業の主旨を遵守し、登山活動に限定した報道隊を別途組織する。
- 2) 報道に要する費用は、日中双方の各報道単位が、合同登山隊との協議のうえで自己負担する。日本側報道隊の中国国内における経費は、中国登山協会の対外開放費用徴収規定に基づいて支出、精算する。報道隊が使用する車両に関する経費は、同規定に基づいて使用料を支払う。
- 3) 日本側報道隊はベースキャンプでインマルサット（海事通信衛星）を利用して報道活動にあたる。必要な手続きは、中国登山協会と協議して進める。
- 4) 報道隊と登山隊との関係の詳細について

は、日本側報道隊は京都大学学士山岳会と、中国側報道隊は雲南省体育運動委員会ならびに中国登山協会と協議して定める。

9. 議定の内容に関し、問題が発生した場合は、日中双方が友好裡に協議し解決する。

10. 双方は、上で議定の基本項目を完全に合意したうえ、その実施を保証する。本実施原則のなかの各項目は、実施中異議があれば友好的に協議して解決する。

11. 本実施原則は、日中両国文で作成し、ともに同等の効力を有する。三者が各一部を保有する。本実施原則は調印した日から発効する。

(資料5)

## 梅里第三次隊の推移日誌

(1) 1993年9月12日

高井、月原、小林、陸好、藤田  
本隊の派遣時期は、翌94年の12月頃、偵察は94年の4月から5月に実施する計画を策定

(2) 1993年10月10日

松沢、牛田、月原、藤田、小林、陸好  
日本側8名+チベット人ポーター4名の実質日本側の単独隊とする方針を立てた。

(3) 1993年10月31日

松沢、牛田、月原、藤田、小林、陸好  
登攀タクティクスの素案づくりにかかる。

(4) 1993年11月28日

松沢、松林、月原、小林、藤山  
気象係の必要性および総隊長候補の名前があがる。

(5) 1993年12月19日

松沢、松林、月原、小林、藤田、神戸大学OBの川端氏  
予算および幹部構成が議題になる。

(6) 1994年2月6日

松沢、月原、富永、高井、小林、藤田、川端  
松沢は隊に参加しないことを表明する。

(7) 1994年2月27日

斎藤、松林、高井、月原、陸好、藤田、渡部、小林  
合同隊にするかどうかの再度議論。斎藤、松林が参加の方向で考慮する。94年の末の偵察、95年の本隊を派遣することで具体的に案をつめることとする。

(8) 1994年4月15日

斎藤、中山、牛田、高井、陸好、藤田、小林、渡部、福沢卓也  
北大の福沢参加希望  
BC建設を11月1日から15日までに行うべきだとの意見がだされた。

(9) 1994年4月19日

ヒマラヤ委員会  
偵察隊は不必要でないかとの意見が大勢を占める。

(10) 1994年5月8日

斎藤、松林、高井、陸好、小林、藤田、渡部  
偵察隊の派遣について再考

(11) 1994年5月28日

AACK理事会ならびに総会

(12) 1994年6月25日

松林、高井、小林、福沢、富永  
斎藤と松林で王富川をたずねた報告。CMAの意見では、雲南省とも交渉が必要である。

(13) 1994年9月15日

斎藤、松林が吉田氏へ協力依頼

(14) 1994年9月18日

斎藤、松林、高井、陸好、小林、中村  
合同隊の可能性を検討し、受け入れ可能な中国側の人員は2から3名とする。

(15) 1994年9月28日

中国四川省のミニヤコンカで日本ヒマラヤ協会の登山隊で福沢を含む4名が行方不明の報が入る。

(16) 1994年10月9日

高井、月原、陸好、小林、中村

藤田は不参加を表明、高井は登攀隊長を辞退。

(17) 1994年11月27日

人見が登攀隊長として参加、隊の派遣は1996年に延期。

(18) 1995年1月22日

(19) 1995年4月1日

吉村参加表明

(20) 1995年5月28日

人見の登攀計画案を討議

(21) 1995年9月9日

(22) 1995年11月18日

倉智秘書長として参加表明。吉田訪問。

(23) 1995年12月16・17日

(24) 1996年1月15日

吉村シベリアにて雪崩のため負傷

(25) 1996年1月21日

(26) 1996年1月24日

ヒマラヤ委員会

(27) 1996年2月18日

臨時理事会、ヒマラヤ委員会

(28) 1996年3月20日

理事会、ヒマラヤ委員会

(29) 1996年4月7日

(30) 1996年5月16日

齋藤・高村・木村・新井（鳥半）

調印団（5月30日訪日予定）を迎えるにあたっての準備・対応を協議。

(31) 1996年5月21日

吉田・西川・齋藤・木村・中村（鳥半）  
調印団（5月30日訪日予定）を迎えるにあたっての準備・対応を協議。

(32) 1996年6月5日

吉田・中村（吉田宅）  
調印団訪日を実現するための意見を吉田顧問より聞く。

(33) 1996年6月16日

吉田・西川・倉智・陸好・中村・小林  
（国際交流協会事務所）  
調印団訪日延期に関連する情報収集と調印実現へ向けての対応を協議。

(34) 1996年6月27日

吉田・齋藤・陸好・中村（鳥半）  
調印団訪日延期に関連する情報収集と今後の対応を協議。特に計画中止の場合についても協議。

(35) 1996年6月27日

吉田・西川・齋藤・中村・小林  
（国際交流協会事務所）  
調印実現可能性に関連する情報を雲南より収集。

(36) 1996年7月14日

緊急ヒマラヤ委員会（ヒマラヤ委員会委員、隊員、新井、吉田）（御車会館）  
調印団訪日延期のまま現在に至っている現状を委員に説明の後、7/20までに調印の目処が立たない場合、計画を断念することを決定。

(37) 1996年7月18日

調印団の来日が伝えられる。

(38) 1996年8月2日

吉田・西川・中村（吉田宅）  
吉田氏に訪日団福岡使用予定の現金を預ける。また中国側との討議用メモを渡す。

(39) 1996年8月3日－9日

議定書調印団来日、中国側との会議に吉田氏も出席。

(40) 1996年8月12日

吉田・松林・人見（吉田宅）  
通訳およびシェルバについて協議

(41) 1996年8月12日

吉田・齋藤・陸好・中村（鳥半）  
通訳・先発隊人数・入境ルート・報道問題・協調金・訓練費・前回隊合同報告書・隊で使う車輛の通関手続きの問題に関して討議。

(42) 1996年9月21日

吉田・西川・中村（吉田宅 ほか）  
前回隊報告書・協調金・訓練費等の問題に関し、意見交換を行う。

(43) 1996年9月28日

吉田・齋藤・松林・人見・中村（鳥半）  
前回隊報告書・CMA交流部・報道問題・先発隊メンバ・通訳などの問題を討議。

(44) 1996年10月6日

吉田・西川・齋藤・足立・中村（遠征隊壮行会の後、京大会館）  
先発隊中国側要員・通訳・シェルバ・車輛通関の問題を討議。

(45) 1996年10月7日

吉田・齋藤・木村・中村（齋藤診療所）  
車輛4気筒の問題を討議。

(46) 1996年10月17日

吉田・中村・他関係者（関西空港・先発隊出発後）  
ビザの問題等について討議。

(47) 1996年10月17日

11/5 吉田・中村（関西空港）  
中国入境後の行事日程について吉田氏より説明を受ける。

## 登山活動記録

人見五郎・中山茂樹

### 17/OCT. (1日目) 曇り 日本→香港

7:30 関西新空港対岸のホテル発。

10:00 発 12:35 香港着 今日香港泊。

高村会長はじめ、会員の新井、坂本、隊員の睦好、中村、本登山隊顧問の吉田氏、読売の橋野記者、長尾カメラマン、先発隊の家族が見送る。

15:30頃 中山→中村 電話

香港で、最後まで中国要人の土産をさがす。吉田氏から品目の指定があり探し求めるのに随分苦勞する。

22:00頃 倉智→人見 電話。23:30 人見→吉田氏 電話。

倉智よりFAXも入る。

#### <電話、FAXの概要>

・O2ボンベ、EPIカートリッジが天津にある。我々が昆明に着いて隊荷チェックをする時はまだ昆明にないので、騒がないように。

・吉田氏によると、18日にこれら危険物は北京を出るといふ。天津でも北京でも大差はないが本当はどちらなのか不明。

・我々の通訳の馮士剛は18日13:00→15:10で北京から昆明入りする。

### 18/OCT. (2) 晴れ 香港→昆明

8:40 起床 10:15 出発

13:33 香港発→15:45 昆明着

昆明の空港に着き飛行機を降りて隊荷が飛行機から運び出されているのを見てやっとほっとする。200kgを越える隊荷を通関させる。登山隊という昆明空港の通関でも例のない来訪者に戸惑っている様子がよく分かる。何か荷物を開けると指示され、中山が自分のスー

ツケースを開ける。うまい具合に登山靴、アイスパイルが出て来て、登山隊と了解してもらえ。税関職員がみんなやってきてわいわいやりだしたのには閉口する。

空港の出口には張俊(中国側秘書長)をはじめ、雲南省体育運動委員会(省体委)の職員が出迎えてくれた。手際よく荷物を積み込んでくれ、まずはホテルに落ち着く。

馮士剛とも空港で合流。彼はスーツ姿で現れた。

空港も建替えが完了しており、チェックインラゲッジはターンテーブルに乗って出て来る。

それから省体委に出向き、船便で送った隊荷のチェック。倉庫に詰まった荷物を全部チェックするのは大変な作業であった。省体委もベースキャンプに持って行く隊荷の買い出しとパッキングに追われている。

ホテルは昆明飯店。7年前に初めて泊まったが、全く様変わりしている。とびきり立派なホテルが出来ており隔世の感あり。

18:20～ オリンピックレストランで許副主任筆頭による歓迎会。総勢20名。

席上、今回我々と行動を共にする中国側登山隊員の紹介があった。隊員は木世俊と袁紅波の2名である。木は長距離の選手で広島アジア大会にも参加したというアスリートである。一方袁は小柄ながらレスリングの選手で彼も国際大会の経験がある。二人は登山は初めてながら北京の中国登山協会が所有する登山研修センターで訓練を積んでおり、また韓国隊の遠征にも同行して経験を積んでいる。彼らが今後どういう働きをするのか楽しみである。

この日、中国側からできれば明後日の20日に出発したいという提案があった。こちらとしては隊荷のチェック、買い出し、そのほか今後の行動に関して討議することもあり、はたして明日1日でそれが可能か不安を感じたが、中国側の意向を尊重することにする。準備が少々不十分でも昆明に足止めされるよりは前に進むことが先発の任務と思ひ同意する。

### 19/OCT. (3) 晴れ 昆明

8:00 食事

9:30 省体委に出向く。ちょうどこの日は区の40周年祝賀会が盛大に執り行われている。

買い出しに出る。傘5、ビール96、煙草20カートン、割り箸100。タンク金属製11個、ポリ製4個を省体委に買って来てもらう。その金属製10個に煤油(石油=灯油)を買う。

昼食はCAMERIA HOTEL(山茶花賓館)の横のレストランで米線(米粉で作ったうどん)。昼(14:00～)隊荷チェック。中方(中国側)は中方で梱包作業を開始。総力をあげて取りかかり我々が持参したプラスチックダンボールに食料をせっせと梱包している。何十という梱包を夜までに作り上げた。日方(日本側)は持参した土産の整理。船便のチェック。張俊との相談。

装備の梱包が終わり、トラックに隊荷を詰め終わったのは夜もかなり遅くなっていた。

・中方装備について、張俊と協議。日本で準備する装備について、隊員以外(隊長、秘書長、通訳、運転手など)の装備について、日方は今回考えていなかったが、張俊からの要求を、倉智あて3日前に送ったらしい。張俊と人見の協議の結果、少し削った形で同意し、FAXを日本に送った。

・キャラバンの道中で買うものを確認。

ガソリン180リットル

ガソリタンク 不足分1

シャベル(剣スコ) 1

丸太1本

#### <先遣隊が確定 12名>

日方：人見五郎

中山茂樹

小林尚礼

中方：馮士剛(通訳)

徐弘(連絡官)

木世俊(隊員)

袁紅波(隊員)

鄭貴華(炊事員)

徐運来(炊事員)(徐弘と区別するため以後、小徐と記す)

余放雄(運転手、徳欽連絡官)

謝紹祺(運転手)

劉玉林(運転手)

### 20/OCT. (4) 晴れ 昆明→大理

7:20 朝食

8:30 チェックアウト

8:45頃 体委に着くと二階の弁公室に呼ばれ、葉隊長と張俊と日方3名とが座り、葉隊長から事細かな今回の登山に対する注意、指導方針、葉隊長の考え方の演説があった。

要旨は、「徳欽では友誼に徹する。安全第一、登山第二。頂上は踏まない(宗教上の理由)。遭難した隊員たちの何かが出てきた時、力があれば登頂してその後埋める…(葉隊長はそういう表現をされた。)」

9:45 出発

楚雄で昼食。楚雄の手前までそれは素晴らしい道路(片道2車線)が出来ている。楚雄からは、センターラインのない昔ながらの道路になる。お尻をくり貫いたズボンをはいて走り回る小さな子供たち、小さな小さなテーブルと椅子の食堂、偵察隊の時に対向車と衝突したところなどを見て走る内にいろいろなことが思い出される。以前と変わらない風景が続く。しかし、女の子の格好が随分きれいになっている。なんでこの田畑しかない田舎にこんな小奇麗な娘がいるのか、と驚くほど風景と不似合いな都会派の服装を見かける。

20:50 大理着

大理はもっと驚く。蛍光灯が各店に設備されていて、街全体が以前より明るい。以前は10軒も無かったであろう小奇麗な土産物屋が100軒ほどに増えている。観光客など一切自分の生活圏外だという顔をしていた店がことごとく外人の方を向いているのだ。紅山茶花賓館に泊まる。LALA CAFé で夕食。こんなにうまい飯に、あの三百何十キロという田舎を走破してきた後にありつけるなど誰が期待するだろう！LALA CAFé で李楠（一次隊の英語通訳）と再会。

21/OCT. (5) 快晴 大理→中甸

6:30 起床 7:00 出発

6時半はまだ暗い。出発後途中の路傍で朝食。牛乳をあたためてその中に生卵をいくつも入れた飲物と油条という揚げパン。汚い露店だがものは新鮮でなかなかいける。

道路は湖から離れ、一本道を進むと、広々とした高原に稲が実り、あるいは収穫されている。野菜も多く、鶏、豚、牛など家畜も多く豊かさを感じる。

剣川を過ぎて麗江への分岐を過ぎたところで昼食。麗江は今年の2月に大きな地震に見舞われている。道路沿いからは地震の爪痕を見ることが出来なかった。

その後ナシ族の集落をいくつも過ぎて金沙江へ下る。天気は非常によく玉龍雪山がよく見えた。金沙江の右岸から左岸に渡り、しばらくして虎跳峡の方へ左折する。1989年の1次隊のときには土石流で一昼夜バスの中に閉じ込められた所もきれいな道で難なく越えて行く。もうひとつ峠を越える手前では哈巴（ハーバ）雪山の遠景が美しい。本当によく晴れ渡り素晴らしい風景が展開する。

これを過ぎると馬の放牧など広大な高原が広がり、蔵族の地域に入る。広々とした高原の中、まっすぐに走り続け、中甸に到着する。中甸は建設ラッシュで道路もあちこちで掘り

返されている。招待所ではなくホテルで泊まる。きれいなところだ。

隣の棟で国際電話を直接かけることが出来る。簡単な話を4、5分したら95元だった。それにしてもパソコンを操作して0081をダイヤルするとすぐに日本とつながる便利さには驚いた。

夕食は歓迎会。副州長の王氏、自治州人民政府秘書長 李紹珍氏、ほか3名。1989年や1990年の印象ではヤクの肉の料理が主体だったのだが今日の料理は完全に大理など他の町のものと同じ。逆に言うと蔵族の独自性がどんどんなくなっているということだろうか。

虫草チンコウ酒で何度も乾杯。登山活動の無事を祈ってハタを一人一人かけてもらう。

22/OCT. (6) 快晴 中甸→徳欽(4,200m)

7:30 朝食。朝食のメニューはバター茶と米線。

徳欽へ向う途中の町、奔子蘭も大きな四角い建物が増えており、のんびり屋外で食事をしていた7年前が懐かしい。以前には無かった4階建ての食堂で昼食。

13:30 奔子蘭を出発。白芒山口に向う。山口（峠）付近は所々日陰の部分だけ雪が残っている。雲一つない快晴。抜けるような青空。荒涼とした山岳地帯を走っているが、標高が高くなると樹林帯があらわれてくる。ちょうど紅葉の時期で晴れた空に黄色く輝く木々がなんとも美しい。4,200mの山口を過ぎ、下るうちに梅里雪山が現れる。雲一つかからず全貌を現している。徳欽で後で聞くと、10月17日に降雪があったらしく、それ以降晴天が続いているらしい。こんなによく晴れ渡っていると、梅里雪山が我々を歓迎してくれているのだ、という気になる。実に神々しく光り輝いている。

早速双眼鏡をだしてルートを追ってみる。逆光で細部までは見えにくい。懸案のバットレス上部の乗越し部分は二次隊の残した写

真とはかなり異なり、三段の段差になっている。垂直に近い段差をどう突破するか、双眼鏡で見ているだけで胸の拍動が高まってくる。

徳欽の宿舎も今年6月にオープンしたばかりの梅里飯店。スイスから来て、昆明からチベットに抜けるという二人連れが泊まっている。

現在の徳欽県の体育運動委员会主任は高虹という歌のうまい、背の高い人である。

夜は徳欽県長の招待を受ける。席上、受け入れ準備は整い皆さんを歓迎すると挨拶されたが、同時に住民感情についてはくれぐれも配慮してほしいと念を押された。県長以下12名が出席。斯農、西当の村長も来てくださった。ここでもハタを頂戴する。

そして明日出発するとのこと。我々としても一日でも早くベースキャンプについて登山活動をしたいというものの、あまりの慌ただしさに当惑してしまう。どうも登山隊を麓でうろうろさせずに、早くベースキャンプに上げ既成事実を作ってしまうという考えのようだ。夕食後、高虹、徐弘、余放雄と明日以降の行動について協議。

明日の行動：

- ・10時までに買い物。
- ・10時に小学校に行って贈り物を届ける。
- ・飛来寺には寄らない。
- ・記念碑の前で簡単なお参りをする。
- ・B.C. 到着まで景色以外（家、人）は撮影してはならない。
- ・西当ではたとえ何をされても知らん顔をして我慢すること。（非常にデリケートな問題があるようで、そういうことを繰り返し言われると大変緊張する）

<電話の内容>

- ・ガムテープ、PPバンド、マジックなど帰りの梱包用具がリストに見当たらない。なければ必ず用意すること。

・徳欽に着いた時、隊用とは別にガムテープ、マジックを用意してあげる。

- ・昆明にポラロイドカメラがデポしてある。
- ・徳欽にポリタン5個デポ。車の都合で持っていけなかったのでガソリンを入れて持って来ること（持って行くのは10個）。
- ・昨日高虹から言われた注意事項と予定を伝える。
- ・17日に雪が降った後快晴が続いているらしい。山が完全に見えた。乾季に入ったようだ。
- ・中村から先発隊へ：余にケンウッドのトランシーバーを渡すこと、シュラフ、羽毛服は日本で買うことになった。

23/OCT. (7) 快晴 徳欽→西当(2,175m)

8:30 朝食

10:20 小学校訪問。プラスチックコンテナ4つ、歯ブラシ1箱をもって訪問。小学生一同が道を作り拍手をして出迎えてくれる。帰りも同様。慣れないことをされると結構うれしくなってしまう。3階の広い部屋にはコナツミルクの缶ジュース、バナナ、リンゴなどを用意してくれていた。校長、県教育委員会の副主任他2名と、時間もないことで、家族団からピアノを寄贈されたことを聞いたり、記念碑の掃除をして下さっていることなどこれまでの厚情を感謝して早々においとます。

ガソリンもタンク10個全部手に入った。昼食後13:00 出発、西当には16:00 着。

途中、遭難慰霊碑を訪れる。慰霊碑は梅里雪山をバックに静かにたたずんでいる。記念碑に線香を一人ずつ供える。碑に刻まれた名前を一つ一つ見ていると、あらためてこの山が梅里雪山なのだと思う。慰霊碑の隣には仏塔があり無数のタルチョが秋風にゆれている。昨日までに貰ったハタをタルチョに結び我々の無事と登山の成功を静かに祈った。その後ろには深いメコンの谷を挟んで梅里雪山

が聳えている。

慰霊碑を後にし、メコンの対岸の村、西当に向かう。車は公路をそれて、メコン川の急な斜面を下る。道は乾燥した斜面を削っただけで、車は大きく左右に揺れながら走っていく。窓の下はメコンの濁流が流れており、大きくゆれる度に思わず悲鳴を上げてしまう。道が傷んで通行不能なところは、全員が車から降りて土砂を削らなければならない。四輪駆動のジープはまだしも、隊荷を満載したトラックは今にもひっくり返りそうになりながら進んで行く。

なんとか無事西当に到着。西当はメコン川の川岸に沿った小さな集落でここで車道は終わる。遠巻きに眺める村人の中で作業をしていると、これまでの様々な遠征の時のキャラバンとはまったく異なった雰囲気を感じる。省体委のスタッフもピリピリしており、村人との和やかな雰囲気は皆無である。登山のためのこれまでの交渉段階でも中国側は住民感情を非常に心配しており、しかも過去の遠征や救援隊でも住民とのトラブルがしばしば起こっている。我々も村人に近づいたり写真を撮ったりすると最初に注意を受ける。

この日我々は宿泊場所でひっそり一夜を過ごす。

宿泊場所は、搜索隊の帰りに泊まったところで、大広間だけの大きな建物。外には広場があり、バスケットのゴールがついている。建物の入り口が土間で特大の釜をかけられる薪用のかまどが2つあり、それ以外は一段高くなった板張りで、その中央にいろいろのスペースがある。村の集会所といったところ。

搜索隊で訪れた5年前には壁にマルクス、レーニン、毛沢東といった大きな顔写真がはってあったが今は何もない。こんな田舎にも思想の変化が伝わってきているものと見える。

夜、鄭料理長の初仕事。飯を炊き缶詰を温めたものを3種類と野菜スープ。飯を食べて小石をペッペッと吐き出すこともなく、うまい。

夕食後、1kgの荷上げ賃について村長以下何人かと高虹、余が話を始め、なかなか決着しない様子。どんどん人が増え女、子どもを含め我々の泊まる集会所に30人ほどが集まって来た。もちろん担ぎ賃の単価だけでなく1989年からのさまざまなことを話し相談していたのだろう。

1kg、1.5元とか3元という会話が聞こえる。

9時頃高虹と余が村長宅に向き協議。11時40分になって戻ってきた。結局担ぎ賃の単価が問題であったらしく1.4円で決着した由。

#### 24/OCT. (8) 晴れ 西当→雨崩

6時頃から起きだし、朝食の仕事を始め、7時半には食事は終わり、ポーターが来るのを待っていたが誰も集まって来ない。心配していると村長と班長が5人部屋の中に入って来て又戸を内側から閉め、話を始めた。暫くしてグループに荷物を分け始め、隊荷の塊が出来上がっていく。かさの高い軽い荷物は稼ぎの効率が悪いので最後まで残ってしまう。テントマット、はしご、赤旗の類を集めてくじ引きをする。これが面白い。班長が床に落ちている紙切れや石ころを一人ずつ拾い、誰がどれを拾ったのか分からないようにしてから村長に渡す。村長はその小さい印(紙切れや石ころ)を荷物に一つずつ置いていく。自分の拾った印が置かれた荷物がその班長の担当になるのである。

発電機のような重いものは逆にみんなが欲しがる。人気の高いこれら重いものも亦、集めてくじ引きをする。発電機を当てた班長は嬉しさを隠しきれず思わず手を口にあでて笑っていた。

荷物の分配が終わると、村人がどっと入ってきて自分の荷物を選び出した。まさに「喧嘩」とはこのことか。自分の持つ荷物が決まると、出口で荷物のナンバー、重量のチェックが行われる。

体委は名前、荷物番号、重量を左右に書き

込み半券をポーターに渡し、雨崩で荷と半券を回収して賃金を払う、というシステムを用意して来ている。これで隊荷の紛失を防ごうというのだ。

我々日方は10:30スタート、しばらく登ると樹林帯に入る。南アルプスを歩いている雰囲気、しっとりした空気が気持ちよい。峠(拉松拉)の手前で精悍なチベット人の家族と出会う。彼らは村人とはまったく異なり、伝統的な服装で、髪の毛も長髪である。おそらく巡礼をしているのだろう。峠には無数のタルチョがかけられている。峠を一気に駆け下りると谷間に20戸ほどの集落がある。ここが今日の目的地、雨崩である。周りは秋に色づいた木々が取り囲み、大変のどかな所だ。遠くにポーターたちのヤクの鈴音も響いている。人見は3:30雨崩着。中山、小林は4時着。12時に出発したという徐弘は4:40にバテ気味で到着。馮士剛は完全に疲れ果てて5時到着。一人離れたところに座り込んで暫く動かなかった。

かなり隊荷が集まった頃、二個所で再度重量を量りながらお金を支払い出した。余と高虹の二人で支払業務を行う。この検量は途中で荷物の中身を抜き取っていないかを調べているのだ。朝の喧嘩を繰り返して、村人は三々五々引き上げていった。

隊荷をどこの家に運び込むのかと尋ねるとわからない、雨崩の郷長は来ていないと徐弘は言う。6時過ぎ頃まで隊荷がロバなどで運ばれてくるのを待つ。馬を持っている者はいくら重い物でも左右にくくりつけ、馬を追うだけでたくさんの儲けになる。一方、女の子や小さな子供もできる限りの荷物を担いで上って行く。

荷を運んでくれる人、西当の村長、雨崩で我々を迎えてくれた人たち、皆少なくとも悪意を見せない。それどころか、ホットケーキのような(見た目も味も)パアパアという昼飯をたくさん我々にくれたりする。

ところが結局夕刻遅くになって、隊荷は巨大なマニ車のある日本というお宮の祠のような所に収めることになった。ただ屋根と三方に壁があるだけで表は高さ70cmくらいの仕切りがあるだけ。左半分が巨大マニ車のスペースで右半分のスペースに隊荷を収めろという。収容先が決まらなかったのだ。

ランタンを4台出して真っ暗の中、インスタントラーメンを作る。以前来たときには小学校だった広場のすぐ横の家の二階に寝ることになった。隊荷の見張りに中方2人日方1人が祠の前で寝て、ほかの8人が2階で寝ることになった。(廃屋と化した、しかも一階は牛やブタの寝床で糞だらけでボロボロの藏族の住まいにはじめから寝たくなかったのだろう)馮は自分も外で寝ると言って外へ出て行った。確かに天井からは、天井の材料である木片や新聞紙が落ちてくるし、壁はボロボロだし、しかも大変狭い(8畳くらい)。北京住まいのシティーボーイにはかなりきつい突然の「事件」だったのだろう。

村人の我々に対する待遇があまりにもひどいことに啞然としつつも目をつぶって寝るしかない。我々はまったく歓迎されざる客なのだ。結局人見、中山、袁、木、鄭、小徐(運来)の6人が中で寝た。

#### 25/OCT. (9) 晴れ 雨崩 足止め

7:30頃起床。

昨夜、余、高虹が村人たちと協議。村人たちはすでに取り返しのつかない損害を被っている、これを償ってくれるならBCへ行って良い——趣旨としてはこのようなことを言われポーターの役を請け負って欲しくないらしい。

余と高虹が昨日ここに泊っていた西当の村長ともう一人の男と一緒に今日下山。余と高虹が徳欽へ戻って県長、公安と再度協議し明日か明後日に戻ってくるようになった。10:30頃高虹は「对不起」を繰り返し下山していっ

た。(昨夜は一時まで協議が続いたらしく、一時は本当にけんかになりかけたらしい)

こちらは寝床に養生シートを敷いて少し快適にし、手足を洗い、水で頭を洗う。湯を沸かしてコーヒーや紅茶を飲む。というような退屈な一日。天気だけは今日も素晴らしく日中は眩しく暑い。

昼過ぎから麻雀が始まった。

6年前見覚えのある男が雨崩に住んでいて、いろいろ話をしていた。以前は少年であった彼が今は3歳の子供を抱いていた。彼のように雨崩の人たちの印象は決して悪くない。彼などは鶏2羽、牛乳をわけてくれた。

但し、高虹は下りる際、写真はだめ、村をうろうろするな、BCの方向には絶対に行くなと我々にくぎをさして行った。

麻雀をしている最中、隊荷が盗まれていたことが発覚。袁の服を入れた袋から服がごっそり抜かれているらしい。これで麻雀は終わり。

個人装備なら昨夕チェックしていそうなものだが、今日の昼過ぎになって盗難事件として発覚した。雨崩に着いてから盗られたのだろうか?この事件は結局うやむやになった。

今日、この建物のそこそこを見ていると時計やそろばんなどの教材、先生用の指導要領を示した本、漢字と発音を大書した紙などを見つけた。我々の泊ったところは2階に3つの間仕切りがあり、右端(広場側)で寝たのだが、真ん中の部屋の入り口には「学生宿舎」と書いてあった。

一つはこんな僻地に泊まり込みでないと学べないところに住む子供の為の宿舎まであったことに驚いた。さらに今はこの村には小学校がないということ。先生があまりにも辺鄙な村ということで逃げ帰ったそうで、また親も子供を学校に行かせず仕事をさせるので学校は自然消滅してしまったようだ。この村で中国語が読み書きできるのは20代以降の数人の男だけである。

## 26/OCT. (10) 快晴 雨崩

8:30 起床。

中方は午前4時まで麻雀。4時過ぎにごそごと寝始める用意をするので起こされた。

結局10時頃朝食。蕎麦というそば粉を練ってポテトチップのように揚げたおやつと、ジャガイモの炒め物、昨日買った鶏スープ。

ヤクミルクが今朝届けられた。ヤクミルク、4元/Kg。大体4kg買った。大理で牛乳は1.6元/Kgだそう。足元を見られている。

ヤクミルクは少し獣の匂いがするが砂糖を入れると旨く飲める。

朝食後、みんなそれぞれに洗濯。

昨夕からじゃんけんで負けた二人が皿洗いをすることになっており、昨夕は小徐と小林、今朝は人見と中山。皿洗いと洗濯で素晴らしく手がきれいになった。

細引きで物干しを作り、洗濯挟みで洗濯物をとめる。

寝室はというと、ガラスが割れて風の吹き込む窓に、ほかの窓からガラスを外してきてはめ込み、素晴らしい窓に早変わりし、壁とシートの間を板を立てて壁土がシートにこぼれ落ちるのを防ぐ。かなり生活環境は改善された。

10時と3時が余との交信だと言うので、峠まで行こうとすると、村から外へ出るなど言われていると、徐弘は行こうとしない。

中山も洗濯の後、麻雀をやる。暗カンをして嶺上開花であがったら、それだけで360元稼ぐ。昨夜も150元稼いだ。一般人民の1ヶ月分の給料に近い金額だ。こんなレートで良いのか気になる一方、彼らの金銭感覚を不思議に思う。

昼から西側(山側)は完全に曇ってしまった。おかげで洗濯物はちっとも乾かず。

何もせず一日が暮れて行く。

## 27/OCT. (11) 晴れ→曇り 雨崩

昨夜半、22時頃余が戻ってきた。西当の

村長と徳欽県体委の太星(という姓名)と郷鎮工作員と4人で戻ってきた。高虹は徳欽にいらしい。今日11時頃から郷長がやってくるので地元民幹部だけで会議。

徐弘に昨夜尋ねると、明日(今日のこと)午後出発できる可能性は80%位だと。信じて寝ることにした。というより寝るしかなく、麻雀組も12時に終了した。

生活サイクルは完全にめちゃくちゃになってしまい、人見と中山が7時半に起き外でコーヒーを作り始める。小徐は8時半頃起き出しやおら朝食の準備。朝食が出来たのは10時半。白菜とかぶらの煮物、豚肉と白菜の炒め物、ジャガイモの辛炒め、茹でたジャガイモの油炒めと鶏肉の瓶詰めの温め直し、米飯。昨日買った2羽の鶏はあれですべて食べきったらしく今日はかぶら煮にがらスープを使っただけ。鶏は1羽25元の由。

午後我々の宿の2階に郷長、西当村長、県体委、郷工作員がやってきて小さな声で話し合っていた。その直前、若者を含めた村人たちが散会していった。どうやら話しはおさまらなかった様子。

結局余を含め彼らは15:30、再度徳欽に向かうべく雨崩を發った。余は連日の乗馬ゆえ、尻に鞍ずれをおこしており、ガーゼに薬をつけてテーピングテープで貼ってあげる。そして今日も亦、馬の背に揺られて峠へ向かう余を我々は見送った。

郷鎮工作員はライフルを背負っている。いったい我々はこの穏やかに暮らしている僻村の人々に対し何をさせているのだろうか。漢族の中華思想への抵抗なのかとも思うし、あるいは純粹に聖山を侵される怒りなのかとも思う。しかし郷長や村長が決して反対でないのにもめているところに、貨幣経済に毒された条件闘争を展開しているだけという気がする。

殆ど世界を一覧できるこの時代にあつて、つまり山登りの世界で言えばどこへ行ってもシステムチックに(商業的に)ガイドを雇っ

たりして山にとりつける、そういう時代にあつて、ある次元から見ればすごい経験をしている。

天候について:今朝は高層に絹雲がかかっていた。これが午後には全天に広がり、同時に太子雪山が雲に隠れる。天候の移り変わりは分かり易いように思えた。

## 28/OCT. (12) 曇り→雨 雨崩

7:40 起床。二階のテラスへ出て湯を沸かし人見と中山はコーヒーを飲む。昨日と同じパターン。

鶏が鳴き、野鳥がさえずり、ヤクの首にかかった鈴がカラコロと音を立てる。村人の生活は緩やかに始まっているこの時間帯、実のんびりと楽しい時間。果たして今日はどういう展開になるのやら。

朝から雲多く、太子雪山は見えず。上空に青空はあるものの、低い雲が多い。白芒雪山は見えている。9時には全天曇りとなり、遅い朝食を済ませた11時には雨が降り出す。今朝の皿洗いじゃんけんに又負けて、小雨の中、小林と片づけをする。昼寝と麻雀と読書の繰り返し。

谷底から雲が湧きあがり、蕭々と降る雨は遠近をなくし深山幽谷の相を呈す。

19:30 余が帰還。西当村長、県体委(=太星)公安局(局長+4人)、法院1名、副県長の計10名、馬に乗って雨の中、完全に暗くなった頃到着。又じゃんけんで負けた中山が皿洗いをし、すぐにそれでラーメンを食べてもらう。

彼らは2、3軒の村の家の分宿する様子。西当村長が段取りを付けに回っていた。公安の若い4人は食後いきなりトランプを始めた。彼らにとっては只ただ面倒なだけの公務なのだ。

余は24日に雨崩に入ってから今日まで毎日往復。2.5往復したことになる。大変なご苦労だ。明日はどうなることか。

徳欽にて葉副主任と連絡をとった由。我々にはじっと辛抱するようにとのこと。

明日朝、再び雨崩にて会議。11時に県長が飛来寺まで来て、余が峠へ上がり、雨崩の我々と3点で交信する予定。

我々の寝室は1個所雨漏りあり。  
公安は一丁自動小銃を持参。

皆が分かれて泊りに行った直後、旧小学校の我々の宿の隣の家で26歳の娘が亡くなって村中の人が通夜に駆けつけていることがわかった。(事実はそうではないと言うことが後日判明するのだが、その時点では、馮士剛の通訳によりそう確信した)

勿論娘さんの病気は我々の存在と独立したところで進行していたのであるが、我々にとって実にタイミングが悪い。明日の会議にも直接影響するかも知れない。

通訳の馮士剛はにぎやか好きで、皆に率先して騒ぎたがる。隣で通夜をしているのに、「徐弘が隣に見に行ったら、皆で飯を食べていたから大丈夫なんです」と言って騒ぎつけようとする。この件で、人見の怒りがついに辛抱しきれずに爆発した。

### 29/OCT. (13) 雨 雨崩

8:00 起床。

雨は静かに降り続く。副県長が風邪らしく、朝早く袁が太星に薬を渡していた。村人との会議は午前中に始まっている。11時の県長との交信のため太星が峠へ向かった。

徐弘との筆談により、隣の娘は2ヶ月前に亡くなっており昨日は四十九日のような集まりであった由。ことほど左様に馮の通訳には限界があり、限界をカバーすべき努力、前向きな姿勢がないところが人見も中山も不満とするところだ。

12:30 会議は終わり、ようやく村人は我々の前進を許した。結果として、明日朝出発。徳欽からの方々は明日我々を見送ってから帰

る。公安の2人はBCまで同行してくれる由。余たちは雨の中、明日の段取りを村人と協議。

終日、雨は降り止まず。

夕刻、馮が部屋に入ってきた。新しい情報を持ってきたと言う。3軒の村人の家を袁、木と訪ね、村人の本音を聞き出した。曰く、「1991年に遭難があつてから、雨崩では家畜、村民に大きな被害があつた。今回日本人がやって来て登るのは構わない。構わないが、その後災いがあるだろう、それらの賠償として4万円を徳欽県政府は雨崩村に対して支払ってほしい」。それが拒否されるのであれば、この村を通らずに山へ取り付けてほしい。この点(要するに、徳欽県政府、さらには雲南省体委と雨崩村との間の政治問題=金銭問題)が解決されずに我々はここに滞留しているのであつた。

馮の生き生きとした表情は久々である。確かに重要な情報であり、おそらく本当のことだろう。昨日人見に注意されたことがよほどこたえた様子だ。

### 30/OCT. (14) 雨 雨崩→笑農

8:40 スタート - 11:00 着。峠、3,520m。笑農、3,510m。

ついにBC入り。ルートを知る中山が一番にスタート。11時に到着。あとの隊員は村人の間に入って、村人を監視しながら行動する。公安の持つマシンガンが異様な雰囲気醸し出している。雨でぬかるんだ道に足を取られながら、先を急ぐ。軟禁状態が長かったので早くベースキャンプに着きたい気持ちがそうさせるのだ。2時間ほどの行程でベースキャンプに着く。この2時間のために5日間も待たされたのだ。

6軒の夏場の放牧用の小屋を見て回り、一番手前の小屋を日方小屋に決める。1つおいて奥の小屋を中方、日方の右側の小屋で発々を動かそうとするもプラグが点火せずうまくいかない。

何よりもBC入りは嬉しいのだが、雨は降り止まず。隊荷は悉くヤクの糞、馬の糞、どろにまみれ、手のつけられない状態で続々と到着。日方小屋の前で運んできた隊荷をチェックし金を支払い、日方と中方に分ける。日方隊荷は支払業務と集積すべき小屋が同じなのでとにかくしっかり区別をつけなければならず、糞にまみれていようがドロドロだろうが小屋に運びいれるというどさくさの中での作業となった。とにかく小屋の半分にシートを敷いて、すべては明日以降に持ち越す。

隊荷の片づけはだいたい15時半に終了。ビールで乾杯。付いてきてくれた公安2人、太星、余は徳欽へ下りた。

雨崩に来たときにはそんなに感じなかったのだが、笑農へ下る峠に出たとき「来たぞ」という実感が湧いた。

### 31/OCT. (15) 雨

BC 高さ(気圧):朝3,520m→夕3,495m

終日ベースキャンプの整備にあてる。朝食後BCの建設作業。

・プラダン(プラスチックダンボール)で天窓を作る。

・雨漏りを直す。

・プラコン(プラスチックコンテナ)を川に運び14個全てをタワシで洗う。

・プラダンは雑巾で一つ一つきれいに拭く。

・通信アンテナを立てる。

・ヤッケ上下、テントシューズを配る。(全員)

・発々は始めて動くことは動いた。

発々の不調は、四苦八苦の末、エアクリナーがオイル漬けになっていたことが原因だったとわかる。クリナーをガソリンで洗う。明日朝取り付けてそれでもだめなら人見が徳欽まで下りることになった。

### 1/NOV. (16) 晴れ

BC

昨夜遅くから星空になった。早朝はよく晴

れ、久々の青空だ。

BCにて装備の整理、中方装備分配、それから洗髪と洗濯。

発々はうまく動くようになり、まずはやれやれ。10wの無線機を設置、飛来寺との交信はまことに良好。アンテナは谷側に向ける。5Aのヒューズがプラス側、マイナス側ともにとんでしまった。徳欽で買えるかどうか、10時の交信で購入依頼。上等のガソリンを買ってくることも依頼した。

日方小屋の右隣のヤクの糞まみれの小屋を朝から掃除し完全な姿に戻り装備小屋として使うことにする。

日本人3人でじゃんけんをして勝った順番に自分の仕事をやる。洗髪、体も洗う。パンツもはきかえて洗濯。みんな久々にすっきりする。

回りを見渡せば3,700mくらいまで白くなっている。午後、氷河取り付き付近に新たに茶色く小さな雪崩跡がついていた。

ベースキャンプの整備が一段落した後、中国側隊員に支給する装備を配布する。特に登山隊員である木と袁には登攀装備一式を支給する。

### 2/NOV. (17) 晴れ

BC □ 取り付き

本日から登山活動を開始する。高度の順応と氷河末端の取り付きの状態を見るべく先発隊員5名で行動する。これまでの降雨が上部では降雪となっており、3,700mから雪が出てくる。氷河末端あたりは60cm位の積雪である。ルートも最短の尾根ルートは上部からの雪崩が怖いので、右に大きく迂回しなければならない。

7:30 スタート - 11:00 取り付きの手前の大岩デポ地

取り付き偵察 - 14:00 BC

取り付きまで結構雪が深い。(直前の4日間に降ったもの) 袁と木にはテントセットを



持たせたがステップを踏みぬき辛そうだった。

取り付きは2ピッチ分（1ピッチは登高距離で50m）土色のデブリが出ており近づいてみると結構大きい。流れの左側に取り付いてもよさそうだが土砂交じりの真っ黒の氷塊でこれが大変硬くステップカットも困難。左の裏側が薄く切り立っている可能性もあり危険と判断。右寄りの滝から水も流れている。一見して非常にいやらしい取り付きである。ルートは右下から左上するラッパ口を横切る形をとる。氷河の末端周辺は氷河の後退によってできたのか、非常に急な岸壁の上に不安定なセラックが乗っており、しばしば大音響とともにそれらが崩壊する。この音になれるまでは毎回首をすくめなければならなかった。人見、中山、小林、木、袁：デポ地まで荷上げ

### 3/NOV. (18) 晴れ

BC コ フィックス3ピッチ

5:00 スタート - 8:00 デポ地 - 8:20 取付点  
~12:40 下降開始 - 13:30 BC

本格的なルート工作に取りかかる。昨日の偵察から雪の安定している早朝にルート工作するべく、中山と小林は半月の月明かりの下、5時にスタートし、末端で夜明けを待って行動することにする。人見と木、袁は先発2人より1時間ほど遅れて出発し、氷河末端まで荷上げする。

月明かりが美しく、ライトは必要ない。錯綜はしているものの放牧用の道がつけられているので、道なりに高度を稼いでいく。途中でモルゲンルートが始まる。この荘厳さは何度見ても感動する。雪もこの時間帯はクラストしており歩きやすい。

昨日全員であがった氷河末端から一段下を当面のデポ地とし、中国隊員はそこから返す。人見はそのまま中山らのルート工作を下から支援する。

フィックス開始点は右端の岩壁にとらず、

左右にデブリのある小岩の上の雪面にとりスノーバーを2本打つ。

土色に完全に變化した部分を左上して横切り、土砂まじりのセラックを上る。上り切って1ピッチそのままルンゼ右岸をまっすぐ進みデブリを超えてその上のセラックにアイスピトンを打つ。その先、最も急なセラックの氷にルートをとる、あくまでも右手の岩石のすべり台には足を踏み入れず、3ピッチ目を張る。1、2ピッチは続けてロープを張る。3ピッチ目も、はじめのピッチも小林がトップ。くだりてフィックスの長さ調整をする。

木、袁は、取付点まで荷上げ、即下山。10:30 B.C.着。

中山、小林 フィックス、3ピッチ。

人見 荷上げのあとフィックスの監督（デポ地にて）

### 4/NOV. (19) 晴れ

BC コ C1手前

4:50 スタート - 7:00 デポ岩 - 7:30 取付スタート - 11:30 フィックス終了点 - フィックス装備デポ - 12:50 3つのデブリを越えてC1予定地が見えるところ - 13:50 取付点 - 15:30 BC

昨日の3ピッチ目まで、中山が取付点のデポ装備1つをかついで上がり、4ピッチ目から新たに張り出す。4ピッチ目のセラックが崩壊しており、取付点より下まで氷塊がいくつも転がっていた。崩壊地は氷塊だらけで、まだ不安定なセラックが残っている4ピッチ目は、左に氷塊、右に雪崩道という恐いところにルートをとらざるを得ない。

5、6ピッチ目と7、8ピッチ目は50mフィックスロープを2本つないで張る。5ピッチ目以降ルンゼの左端をルートにとる。左端までデブリは届いているが、右へルートを振り、さらに左へ渡り直すよりはずっとよからうと考える。8ピッチでルンゼを乗り越える地点に着く。5m先の大岩を目印にして残りのフィックスロープ、スノーバーなどをデポした

あと、コンテで、右からさらに2つ落ちてきているデブリを越えてC1の予定地の見える所まで進んだ。進行左側はクレバスが重なる危険地帯。

デブリの残る右端しかルートはとれない。

しばしばガスにまかれる天候であったが、中山にとっては2次隊の偵察でこのルートを工作しており、人見としては安心して任せられる。

この日からデポ地をフィックス開始点の岸壁の下にすることにし、ここに荷物を集積する。このデポ地は岸壁上部からしばしば細かい落石が起こる。ブーンと音がして足下の雪面に石がめり込むのを目の当たりにするとデポ地でのんびりする余裕は全くなくなってしまう。

中山、小林 5ピッチ フィックス、C1手前 (4,385m) までコンテ

人見、木、袁、荷上げ（取付点まで）

この夜、ベースキャンプでは新たな問題が巻き起こった。木、袁が荷上げがつまらないとか、つらいとか、明日休みなどという不平をもらしており、これが表面化。当初の期待に比べ、我々の行動は話が違う様子。彼らはこの秋韓国隊に合流してヒマラヤに行き、続いて我々に合流している。木が言うことには、「君たちはBCに入ってチベットで疲れた体を癒し、体力を回復させなさい。何もなくてよろしい」と省体委幹部に言い渡されている由。

成る程それなら話しが違ふ。もっと早く遠慮せずその点を言って欲しかった。

中国側には連絡官はいるものの、彼には権限が与えられておらず、この問題を解決することができない。登攀に関しては登攀隊長の人見に権限が与えられているはずであるが、それに関しては中国側に十分了解されていないようだ。

然し我々としても、好天をみすみす何もせずやり過ごす訳にはいかない。

登山がマラソンに似て単調なつらい作業の繰り返しのうえに、登頂という成功がつかめること。我々先発隊の使命として好天をつかんでルートを延ばす必要があることを登攀隊長が説明、皆、納得してくれる。ともあれ、盗まれた袁の荷物が出てきたという別の事情もあるので、特に明日は全員休み。

木、袁は雨崩へ下る（往復）こととする。人見の人柄で今日の難題がうまく解決したと思う。悪もよく通訳として働いてくれた。好天周期に入っているのも明日も精神的に行動したかったのだが、先発隊にとっては貴重な戦力である中国隊員とはこの段階でこじれることだけは避けなければならない。

今夜の話し合いは、先発隊にとって非常に有意義なものとなった。明日1日損するが、収穫は大きいに違いない。一同問題を解決したということで、本隊合流時に飲むために用意したビールを1本ずつ配って飲む。明日休養になったこともあり今夜は大いに盛り上がった。

### 5/NOV. (20) 晴れ

BC 休み

10時、木、袁、雨崩へ出発。

昨日午後 雲多く悪天へシフトするのかと思われたが、打って変わって好天。

思い思いにベースキャンプでのんびりくつろぐ。昼間のベースキャンプは暑いくらいで、小屋の横を流れている川で裸になって体を洗うこともできる。氷河を眺めながら裸で日光浴をするのは何と気持ちのよいことか。

通訳の馮と雲南側のスタッフとの関係があまりよくないらしい。基本的には北京と雲南とのギャップが原因のようであるが、この問題も解決しなければならない。

午後4時、兩名帰還。サルスの居る家の娘とその母が馬とロバ一頭ずつに鳥2羽、豚肉、キャベツ、タバコなどをもって兩名と共にやって来た。母も娘も、村中で（おそらく）最

もきれいにしている。雨崩一番の資産家なのだろうか。

その娘をマドンナと呼ぶことにする。12月の下山時、木は本当にこのマドンナとの別れがつかなく泣き出すことになる。

中山がもちのバター焼き、チーズ、のり巻きとお好み焼きを作る。いずれも好評。ヤカンとマホウビンが届けられた。

<本隊：関空～北京>

いよいよ本隊が日本を出発した。

### 6/NOV. (21) 快晴～晴れ

BC ⊃ CI直前

4:50 スタート - 7:00 デポ岩 - 10:00 8ピッチ目終了点 - 12:30 CI直前 - 13:00 下り出し - 15:00 取付 - 16:10 BC

3ピッチ目をしっかりカッティングして5人でCIまで荷上げの予定であったがアクシデントあり、その直前で終了し、戻る。

中国隊員と雪上行動をするのは初めてであり、念入りに装備の点検を行い、落石時のコールを教えてロープを通過させる。まだフィックスにしがみついて登っているが、おいおい慣れてくるだろう。登山の基本動作はこれまでのトレーニングですでに理解しているようである。これからは十分戦力として行動できるであろう。

1ピッチめの急登の出だしも雪がはがれ氷が出ている。3ピッチ目の急登をしっかりカッティング。ルンゼ終了点（8ピッチ目の終了点）からCIまでロープをべた張りするつもりでまず、デポしていたロープ4本を張る。次に人見が荷上げてきたロープを出したところ、8本入りの箱に5本しか入っていない。そこにはあるべきロープがなく、石が数個入っているではないか。途中のキャラバンで村人がロープを盗み、重量のつじつまを合わせるために石を入れたのだ。村人の巧妙な手口に怒りつつ、必死で石を荷上げていたことが情けなくなってくる。

右側壁づたいにデプリを3つ超えたところで終了。

明日その地点から中央へ進み、CIに達する予定。そこまで右端を進まないとクレバスがギタギタに割れて口をあけているので、氷河中央へは出られない。

帰りはすぐゆるくなるアイスピトンをやめ、スノーバーに打ち直しながら帰還。

人見、木、袁、BCから荷上げ

中山、小林、デポ地（取付点残置）から荷上げ、フィックス。

<本隊：北京滞在>

### 7/NOV. (22) 晴れ

BC ⊃ CI

4:50 スタート - 7:00 取付

小林は、先のフィックスの為、7:30取付スタート。人見はトランシーバーを忘れ取りに戻ったので遅くなる由。木と袁と中山3人で上がる為、中山は取付で待機。

9:00 取付スタート - 10:00 8ピッチ目終了点 - 10:50 昨日の最終点 - 12:00 CIに隊荷集結 - 12:30 下降開始 - 15:00 BC

一昨日袁の服と一緒にフィックスロープ3本が返ってきた。全く気が付かず荷上げた箱に、実は石が入っていて8本のところ5本しか入っていなかった昨日の事件と符合するのだった。そのおかげでCI到達が今日になってしまった。

先発隊の当初予定の行動目標であるCI建設は早くも達成することができた。氷河末端からCIまで50m×20ピッチのルート工作であった。天候も安定しているようなので先発隊だけでまだ先を延ばせそうである。

ただベースキャンプから氷河末端のデポ地までの標高差が約500mで水平距離も長く、この区間に相当のアルバイトを強いられている。二次隊はCIまでの荷上げに当初デポキャンプを作っていたほどで、4,450mのCIへ一気に荷上げするのは非常に消耗する。しか

もラッパ口は途中で休めないで、精神的にもよけい消耗するのだ。

人見 BC ⊃ 取付 荷上げ

木、袁 BC ⊃ CI

中山、小林 BC ⊃ CI フィックス（荷上げは取付点から）

話を聞けば、木、袁のトレーニングをさせてもらった韓国チョモカンリ隊では、一日動いて一日休んだそうだ。彼らが戦力でなかったからだろうが、彼らにすれば今回の行動はきつく、不満を増幅させている。

<本隊：北京～昆明>

### 8/NOV. (23) 晴れ

BC ⊃ CI 荷上げ。中山、小林、木、袁4人共（人見は取付まで空身）BCから荷上げ。7:00 スタート - 10:20 取付スタート - 12:00 CI - 12:30 下降開始 - 13:15 取付 - 14:30 BC

矢張り、BCから荷を担ぐと、取付までかなり疲れる。木は強い。袁は、「昆明では休養せよと言われたのに何故荷上げをさせられるのか」という精神的疲労が重なるのだろうか、結構きつそうだ。

この日で当面CIへの必要量の荷上げが完了する。この頃になるとデポ地までの斜面の雪もすべて消え、放牧用の夏道があらわれている。

<本隊：昆明滞在>

### 9/NOV. (24) 快晴→晴れ

全員 休み

3勤1休（BC～CIに限って）の体制とし、4日目の今日は明日からのCI入りに備える意味もあって全員休み。8時半頃起き出すのが日射が当たらないので活動する気にならない。11時頃、ランチを食べ、それから皆、洗濯、洗髪などを始める。

今日も前回の休養日と同様、快晴。1時半ごろから河原で洗髪、体を拭く。一人で居ると2次隊で逝った連中のことを考える。タン

ネが風にゆれるのを見ながら広瀬や工藤のしぐさ、話し声を思い、目を閉じてまぶたに陽光を感じながら、米谷や近藤を思う。ひとりずつ、しぐさと声を確認する。斯那次里だけは会ったことがないのだが、正隊員に格上げされるぐらいだから素晴らしい男だったにちがいない。

C2のコルの三角岩は6年前から何も変わらずそこにあるのだが、隊員の面子は全く変わってしまった。

主題歌も変わる。1次隊ではクレイジーキャッツと加藤登喜子だった。今回は中島みゆきになりつつある。趣味が偏っているというべきか。

今日は圧力鍋を使って、ペペロンチーニを作った。これも好評。

昨日、雨崩の斯那頂主（村民の名前）に話をつけて、明日雨崩村民7～8人に上がって来てもらい、デポ岩まで15個程の荷上げを2元/kgで請負って貰ったのだが、今日午後7時の徳欽との交信で昆明からの指示にないことであり、事故など何か問題が発生した時の責任の所在が不明確だという理由で却下された。

そもそも、木、袁が休養という「命令」を昆明で受けて来ているというので、彼らの負担を減らそう、荷上げをさせずにそれでも時間を有効に使うという発想で人見が考え出したものだった。

夜、木、袁、徐弘（結局、皆集った）と再度会議。彼らは登頂主力隊員として来ているので荷上げで体力を消耗したくない（してはいけない）の一点張り。荷上げの為にシェルバが来るではないか。俺達は登頂する隊員なのだという。そもそも登攀隊長が毎日の各隊員の行動に対する指揮権を持っているという事がわかっていないから話にならない。

何の為に先発隊があって、晴天の下、何をしなければならぬのかが全くわかっていない。

ただ、省体委の命令で、登山隊員に仕立てられ、登頂して来い、そのためにBCでゆっくり休養せよと言われて来ただけなのだ。先日の人見の演説は全く無意味だったのか？。

袁は風邪だから4～5日休みが必要だと言いつ出す。居る次元が異なるのだからそのことは致し方ないとしても、何かにつけて中国側のスタッフは昆明の方ばかり向いていて、現場の考えを優先してくれない。もうじき本隊が来る、それまでの辛抱と思うがやりきれない物を感じる。

<本隊：昆明～大理>

### 10/NOV. (25) 快晴

BC→C1

8:00 スタート - 14:00 C1

中山、小林がC1入りする。中国隊員は休養日になったので、荷上げは人見がデポ地を往復する。

デポ地で何者かによってコンテ用ロープ、シュリングが盗まれている。やられたと言いつながら被害は軽微なのでそのままC1へ上ることにする。C1入りする中山たちの個人装備が重いので行動が遅く、フィックスに入ったのはすでに11:00近くになってしまった。ラッパ口の本流を直径30cmくらいの石がぼんぼん落ちてくる。落石の間合いを計りながらデブリを横切り、氷河を駆け登る。見ている方が恐ろしくなる光景だ。

先にC1に着いた小林がテントが盗まれているという。すでにデポしてあった小林の個人装備が雪上に放り出されており、セーターがなくなっている。テント本体、フィックスロープ2本、外に出してあったフィックスロープ3本が少しずつ切られており、袁のカメラも盗まれている。他になべじき、のこぎり、ポリタン、EPIヘッド1つ。間違いなくC1まで来て盗んでいったのだ。おそろべし。

このままではC1に泊まれない。中山がバテて動けない。仕方がないので小林に一人で

デポ地に下ってテントを上げてもらうことにする。高所登山では単独行動は絶対避けたいところだが、そうも言いつられない。14:30に小林が取付点まで下りだし、取付点にデポしてあった幕営装備を持って再びC1に戻る。おかげでC1に泊まる事ができた。

中山がC1までのフィックス途中、2ピッチ目で左手甲に落石を受ける。幸い小難ですんだようだ。危険帯をぬけたつもりで、下を向いていたらいきなり左手にもすごい衝撃がきて、左腕がとばされた。瞬間、手がちぎれたほどの衝撃を感じた。ショック症状からぬけるとじわじわとした鈍痛がやってきた。親指を甲の方へそらすとすごく痛む。腫れもあるが、握る動作に支障ないので、C1に予定通り上がった。

それにしても、中方隊員の問題、どろほう事件の頻発、ルートの落石、等々。前途は多難だ。

ベースキャンプでは盗難事件で大騒ぎだ。連絡官が徳欽と早口で交信している。

彼も相当興奮しているようだ。どうも雨崩村の数名が怪しいというのだ。中国語を理解できるのは数えるほどしかおらず、しかも昨日休養日というのを知っているのは限られている。しかも二次隊の遭難のあと雨崩の村人がC1に上がり事故を起こしている。またベースキャンプから見える樹木の尾根上からC1を見ることもでき、C1に荷上げされていることはそこから確認することもできる。

夜11:00過ぎ徳欽から連絡が入り、公安が雨崩に捜査に入るとのこと。梅里雪山登山は全国ニュースになっているので、公安も本腰を入れて対応するようだ。

人見 BC □ 取付 荷上げ  
木、袁 休み

<本隊：大理～中甸>

### 11/NOV. (26) 快晴～晴れ

C1 □ 4,900m フィックス 11ピッチ

8:20 スタート - 10:00 フィックス開始点

- 14:20 フィックス終了点 (4,900m)

- 15:10 フィックス終了点 - 15:40 C1

朝、4,200m程度から下は雲海の中、上部は快晴。

小林は5本、中山は6本のフィックスを持ってコンテでスタート。

1本大きなクレバスが開いており、右へ大きく迂回。それから又、中央へ戻り台地状を進む。台地状から急傾斜にかわる所からフィックスを開始。3本、4本、2本、2本とつないでロープを延ばす。10本も張ればコルの直下くらいまで行けるのだろうと考えていたが、大きな誤算。ようやく半分、これからまじめな急登というところで、高度も4,900mでちょうど半分。

ともあれルートは二次隊と同様にコルの右側に突き上げるコースが良さそうで、そのルートを見極めて降りてきた。

それにしても、偵察の時は雪がべったり、安心感を与えるに十分についており、3ピッチ程しか、C1～C2間で張っていない。2次隊の写真資料があったとしても、3ピッチ→20ピッチという大増加は考えられなかった。これは中山の責任だ。

どろほう事件で、今日夕刻、公安が雨崩に入る由。徐弘と小徐が雨崩に下った。

さらに今日、木と袁がデポまで荷上げしたところ、デポ地に残しておいた我々のアイゼン、ピッケル、シットハーネス、ヘルメットが盗まれているのだ。これでは登山どころではなくなってしまう。またまた、どろほう事件。狙いは一体何なのだ。犯人は一体何者で何人いるのだ。夕方やっと公安が雨崩に入り捜査を開始したとの連絡を受ける。

とにかくBCにたどり着いた時点で、問題は終わったと思っていたのに、いつまでも悩まされる種は尽きない。

<本隊：中甸～徳欽>

### 12/NOV. (27) 快晴

C1～C2

8:20 スタート - 10:00 フィックスの続き開始  
- 18:00 C2コル到達 - 20:20 C1。

C2コルの岩峰の右側へ上がることは了解していたが、その右側を本流からまっすぐつめるか、ひとつ右側のセラック帯の手前から右折して、上部で左上するか、ルートが2通りあった。最初、後者のルートをとるも、本日2ピッチ目でクレバスにはばまれ、これを乗り越すのが雪崩の流心しかなく危険と判断、このルートを断念。氷河中心をなるべく右端に寄りながらさらに進み、岩峰右へ直上するルートをとる。ここも雪崩を完全に避けられるわけではないが、雪崩ルートの間のリッジ状を使って直上する。小さなクレバス2つ、完全にあいているが、一歩でまたげるクレバス1つこえた時点で、日差しが完全に陰った。午後6時、本峰の見えるコルに到達。何年ぶりかでC2コルから本峰とそれに連なる峰を見る。雪上は全く平らで、1991年正月の遭難の痕跡など全く認められない。

雪ふかくずいぶん時間をくって上がる。中山は荷上げ1箱分のロープを持って上がる。下りは日も照らず、途中からヘッドランプをつけて、すでに凍りついたステップをたどる。最後は星空の中C1にたどり着いた。

ベースキャンプの3名はすでに氷の上を歩く装備がないので、しかたなくデポ地への荷上げしかできない。幸いC1に当面の資材が上がっていたので、上部での行動に支障がないのありがたい。デポ地に残された足跡を辿ろうとするが、すでに斜面には雪が消えており、手がかりを見つけることは不可能だ。

雨崩には、公安が来て、まず、村民に倫理、道徳を論している由。

<本隊：徳欽滞在中>

### 13/NOV. (28) 曇り～晴れ

C1 ⊃ C2→BC

8:55スタート - 13:30 C1～15:00 - 16:50 C1 - 18:10 C1スタート - 21:10 BC

中山、小林はC2へ荷上げ、スタート時点では薄かったガスがすぐに濃くなり、全くガスの中を荷上げ。しかし、上空には全く雲はなく時々薄陽がさす。

人見からも、10時の交信で、今日中にBCへ下りる事も頭に入れて行動せよと言われる。(取付～C1が交信できず、取付の人見の声はこちらで受信できるが、こちらの発信が届かない - 人見はBCの憑を介してC1上部で行動する2人に伝えようとするのだが憑にはうまく伝えることが出来ない。こちらは両方の発信が聞こえているので、もどかしく、情けなくなってくる)

ガスの中、C2コルへ向かう側は快晴。本峰が良く見える。但し、明永氷河沿いにガスは上がってくる。風強し。C2コルのくぼみには十分雪洞が掘れる。1時間半もコルに居て、荷物をデポし、C1へ下る。ガスはBCの谷間へほとんど湧いては流れて行く。悪天の兆と考えてBC下山決行。結果として満天の星空の下を下山。2日続けてヘッドランプを点けて行動。

ラッパ口の下降で中山の横にあるセラックが突然崩壊し、危うく巻き込まれそうになった。無事で何よりだ。「二人は疲れ切っていたが満足そうな表情である。連日二人は本当によく頑張った。先発隊は予想以上の成果をあげて本隊を迎えることが出来た。」と、登攀隊長も満足気であった。

夜、斎藤隊長と交信する。先発隊の行動を高く評価してくれ、我々も誇らしい気持ちになる。本隊の隊員も登りたくてうずうずしているとのこと。先発の我々も早く合流して一緒に登りたい。

BCにはどろぼう事件で、夕方、公安3人と

太星が入って来る。結局雨崩では犯人を発見できず、盗難状況を見分に来たのだ。ベースキャンプに降りてきた中山、小林も加わり、盗まれた装備を示しながら説明する。カラビナを手にした公安の隊長は「これは役に立つ」と感心している。ピッケルも農作業に使うと便利だと逆に解説してくれる始末。犯人を本当に捕まえてくれるのか不安になってくる。夜10時～11時まで、どろぼう事件について会議。

本隊が西当入りしようとするも、木永の村民50人とも100人とも言われる大勢に阻まれ、(要するに、先発隊の荷上げに木永村が参加させて貰えず、造反したもの) 徳欽へ戻ったらしい。張俊が政治工作に奔走し、明日徳欽から雨崩にはいることになった由。

<本隊：徳欽～西当～徳欽>

### 14/NOV. (29) 晴れ

BC 休み

人見、木、公安3名、9時よりデポ岩付近の現場検証。太星11時雨崩下山。

BCより下流左方向の小径をたどると30mの大きく美しい滝あり。

そこらじゅうに踏跡あり、多分尾根のむこう側にも踏跡があるだろう。どろぼう事件は結局迷宮入りだろう。

<本隊：徳欽～西当>

結局本隊は西当に泊った。

### 15/NOV. (30) 快晴

本隊が西当から上がってくる。ベースキャンプでは本隊受け入れのため新たなテントの設営など忙しい。

夕方、吉村、高井、中村とシェルパのドルジ、ゲンドゥが本隊の先行組としてベースキャンプに上がってきた。他の隊員と隊荷は雨崩泊まりで、明日上がってくることになった。久しぶりの再会で話がはずむ。

<本隊：西当～雨崩/一部メンバーはBC入り>

### 先発隊総括：

・日本を発ってから西当までは非常に順調に進めたが、雨崩で村民の抵抗を受けた。結局当地での受け入れ工作が不十分だったようで、主要には金銭問題でもめていたようである。

・BC到着後、日中は気温が15度まで上がる快晴が続いた。BC到着時の悪天で降った雪とデブリで当初ラッパ口は50cm以上の積雪があったが、見る間に融け、徐々に状態が悪くなっていた。ただしC1上部は非常に安定しており、中山、小林が短時間でルートを延ばすことを可能にした。

・中国側隊員2名が先発隊に合流したことで、計画以上の荷上げ力が確保された。しかしながら、彼らが昆明で受けた指示がBCでの休養であったため、しばしば不満が出、その対応に苦慮せざるを得なかった。

・2日にわたる村民の盗難事件で大いに消耗させられた。C1でのテント盗難もさることながら、ピッケル、アイゼン、ゼルプスト、ヘルメットの盗難により氷河上を歩けなくなってしまった。

### 16/NOV. (31) 曇り

本隊が雨崩からベースキャンプに上がってきた。静かだったベースキャンプにもぎやかになった。日本側隊員11名、報道隊員4名に中国側隊員、スタッフを合わせると、40名近い陣容になる。日本側の隊員も一月ぶりの再会で話が弾む。昨日先行してベースキャンプ入りした吉村、高井はさっそく小林と氷河末端まで高所順応に出かける。今後の活動をより安全にするため、ラッパ口の浮き石の掃除もあわせて行う。

この日の夜は、日中に分かれてこれまでの出来事やつもる話に夜遅くまで花が咲いた。

### 17/NOV. (32) 雪

BC ⊃ C1 中山、吉村、高井、中村、小林、木、袁

6:00 スタート - 8:30 フィックス取付点 - 10:30 C1 - 12:30 取付戻り - 13:30 BC

ベースキャンプの整備。気象観測機材、気象ファックスなどが設置され、報道陣は解放軍のテントを新たに設営し、インマルサットや様々な機材を設置している。国内で事務局を担当していた中村は、中国側に支給する装備や備品で頭を悩ませており、電気に強い陸好は無線機や電気の配線など忙しく動き回っている。

設営の合間をぬって、日本側の幹部隊員で今後の方針について話し合う。先発隊が予想以上にルートを延ばしており、今のところラッパ口の落石帯の問題はあるもののルートに関して特に大きな問題はない。このまま引き続いて短期で頂上を落とそうということになった。その方向でタクティクスを再検討していくこととする。

ベースキャンプ設営がほぼ完了した後、日中合同の幹部会が開かれた。登攀に関しては日本側の方針が了承される。また先発隊でしばしば問題になった登攀指揮に関しても登攀隊長の権限が確認された。

今夜はベースキャンプ開きの宴会が催された。日中で順番に歌や余興で大いに盛り上がった。

しかし今日は、今までで天候最悪。登っている時は青空も見えたが、細雪が降り続け、下る頃からまともにあられが降り出し、ついに降り止まず。悪天到来。

### 18/NOV. (33) 曇り

昨夜の雪でベースキャンプでは3cmの積雪。午前中、シェルパによる登山中安全無事登頂、下山の祈り。タルチョの旗を大きな柱に3本かかげ、祭壇にしつらえた炉に柏槇の生葉を燃やして煙を立ちのぼらせる。そしてシェルパがラマ教のお経を唱えはじめた。我々も彼らの後ろに並び、登山の安全を祈願する。最後にシェルパがダライ・ラマから授

かったという「ラマ・ライス」を我々にも配ってくれる。これを身につけていると、落石や雪崩から身を守ってくれるのだそうだ。

じつとうしろで、神へ捧げる米を握って立っていること、再びこのBCへ帰って来る事ができなかった彼らをしみじみ思い出してしまう。

そのあと、取付まで荷上げ。

本隊に同行していた中国隊員の宋一平と金飛彪は、雲南省の隊員公募で選出された隊員である。二人は42歳と37歳で年がややいっている上に、登山の経験も山歩き程度でほとんどないという。荷上げも軽い荷物にもかかわらず、すぐに息があがってしまっている。デポ地まではともかく、ラッパ口という非常に不安定なルートを通るのには技術的、体力的に問題がありそうだ。この日もちょうどデポ地に着く頃にかなり大きな落石があり、本人たちもビビったようだ。ただ隊員として参加している以上、ベースキャンプでお茶を濁してもらわなければならない、彼らの扱いに苦慮する。2名は当面松林の監督下に置き、登山の訓練を受けてもらうことにする。

11:30 スタート - 14:00 取付 - 15:20 BC

取付まで荷上げた者：シェルパ×4、木、袁、人見、中山、吉村、高井、小林、陸好、金、宋

### 19/NOV. (34) 晴れ～曇り

BC→C1 中山、小林、吉村、高井

BC ⊃ シェルパ×4 木、袁、人見（陸好、中村）

6:40 スタート - 9:10 取付スタート - 11:30 C1

漸く、C1入り。明日、中山、小林2名、C2入り予定。

シェルパ：ニマドルジ、ゲンドウ、パサンツェリン、パサンキデラの4名はC1に滞在して、取付から逆ボッカしそのままC2へ荷上げできるといふ。多分明日、C1入りするだろう。

今後の基本タクティクスは、メンバーのうち、先発の中山、小林と高所での実績のある吉村、高井がルートの先端を開拓し、陸好と中村は順化を確実にこなして上部へ上がるといふものである。中国隊員の2名は先端での行動は経験的に無理とはいえ、その運動能力は非常に高いものがあるのでできるだけ上部での行動を経験させるようにする。シェルパには基本的にルート工作は行わず、荷上げ活動に従事してもらう。シェルパの活用については、あくまでもルート工作は隊員が行うことを原則とし、荷上げに要する日数を短縮するために活用するという原則に基づいている。

陸好は本格的活動の初日ということで張り切っており、かなりの重量の荷物を担いでいる。中村はキャラバン中の中華料理が体に合わなかったのと、事務局として昆明や徳欽での事務仕事に疲れたのか調子が上がっていないようだ。結局二人の行動は遅れ気味になっている。

荷上げを終えた人見と中国隊員がデポ地に降りたとき、斎藤隊長、松林、福崎が順化を兼ねて氷河末端を視察に来た。デポ地より一段下がったところで隊長らを迎え、休憩を取りながらルートについて話し合う。12:00ごろ隊長らが氷河末端に向かおうとしたとき、ラッパ口の中段のセラックが大音響をあげて崩落した。無数の大きな氷の塊が隊長らをめがけて宙を飛んで向かってくる。3人は休憩した大岩に向かって急いで走って戻り、事なきを得た。もし休憩せずにそのまま氷河末端に向かっていたらまともに食らっていたかもしれない。

崩落はラッパ口の3ピッチ目あたりのセラックで、フィックスロープ、ルートがどうなっているのか下からでは判断できない。

中村、陸好が下山開始した直後、人見から「セラックが崩壊し、ルートが損壊を受けた」といふ交信あり。C1直前のフィックスと、

9ピッチ目のフィックスをはずさせ、ピンをいくらか持たせて、2人に修復させながら下ろす。4ピッチ目がセラック崩壊により切断された由。陸好、中村で新しいフィックスを張り直して下山。補修によってルートは確保されたものの、落ちきっていないセラックがいくつか残った状態になっている。今後の活動では十分注意する必要がある。

### 20/NOV. (35) 快晴

C1→C2 中山、小林

C1 ⊃ C2 吉村、高井

BC→C1 ⊃ C2 シェルパ×4

他 休み（中村、陸好は中村不調ですぐ戻る）

8:10 スタート - 15:00 C2

吉村、高井、シェルパ C1着 17:40

個人装備がなぜこれほど重いのか、80リットルのザック満杯+小箱、それにスノーバー10本、メインロープ1本、ツェルト等を持ち、25kgは超えている。遅いペースで上る。

12ピッチ目で休み、下を見るとシェルパはすでにC1入りし、テントも設営し終わり、上へ向かって歩いている。てっきり空身でルートの下見をしているものと思った。

17ピッチ目でついにシェルパと合流。吉村は体調悪く、かなり遅れる。今日、シェルパは登攀具をかなり上げてくれた。彼らが下ってから、1時間半ほど風防のブロックをつくる。雪が軟らかくブロックをとるのにかなり深く掘らなければならない。

C1からC2間のルートは、はじめ30分ほど広い雪田を詰めていく。傾斜が出てくると谷はやや狭くなり左右の落石、ブロックに注意して登っていく。この傾斜が出てくることから50m×20ピッチのフィックスでコルに到達するが、最後の4ピッチ分が非常に急な斜面となる。ユマールが非常に役に立つ区間であり、下りはこの部分をエイト環をセットしてアプザイレン気味に下降しなければならない。

コルに上がると梅里雪山が眼前に大きくそびえているが、風が非常に強い。C2はコルの強風を避けるため、コルから水平距離にして300mほど雪原側に下った所に設営されている。ここも風が強いので、テントは入念にブロックで囲まれてはいるものの一日中強風ではためいている。

### 21/NOV. (36) 晴れ

C2～バットレス取付

8:15 スタート - 12:00 取付 - フィックス張り  
はじめ - 15:20 偵察終了 - 18:30 C2

中山、小林はバットレス工作を始める。C2から雪原をバットレス取り付け向かって歩くのだが、ワカンをつけても膝までもぐる雪に難渋し、延々歩き続け、4時間もかかって取付。決して荷も重くなく、(フィックスロープ5本、スノーバー5本など) ラッセルもきつくない。(ところによって、ワカンひざ下) 最初は、アイゼンで歩いたぐらいだ。

もうあと1時間くらいにみえて、2時間以上かかる。30分にみえて1時間以上かかる。恐るべき、大横断。黄旗も雪原半ばでなくなる。

途中二次隊の遭難現場のC3付近を通過する。遭難現場とおぼしき周辺に立っても雪原が広がっているだけで、彼らの痕跡は何もない。黙祷を捧げ、今なお雪の下に眠る彼らの冥福を祈る。

ただあまりにも雪原が広いのでC3位置を明確に「ここだ」と確定することは不可能である。二次隊の秘書長だった佐々木氏が遺した記録のC3位置に関する記述に周囲の状況を加味して、おそらくこの辺りではないか想定するしかない。その上で彼らが設営したC3位置は十分に妥当な判断がなされたと言えるだろう。

バットレスの取り付けには末端を取り囲むようにクレバスが走っており、簡単に取り付けない。バットレス基部、岩の左側を直上するところを小林に行かせるも大変恐しそう。

大股開きでクレバスをわたり、急斜面の深雪となる。ヤバそうなので、戻らせ、一段上の傾斜の緩いところのクレバスがルートとして使えるか、偵察に上がる。こちらは第2候補としていたが、幅5m程の大きなクレバスが割れており氷塊の落ちる道筋まで大きく迂回しなければならないので却下。再び、最初のルートにすることにして、取付に装備をデポし、これにて時間切れ。

日射の去った延々の上り（平坦な様で帰りは登りである）をとぼとぼと、しかもすごく気温は低く、手先、足先に凍傷気味の痛みを感じながら泣きそうになって帰還。シェルパが日本酒をあげてくれていたが、それがうれしくないほど疲れていた。2張目のテントの整地、ブロックの風防もできている。矢張りシェルパはたいしたものだ。

C2から上は、BC、C1と交信しにくく、帰りは6時の交信が取れず、疲れ果てて帰還した後に連絡。定時交信をしなかったと、かなりきつくおこられた。C1では、吉村、高井、シェルパ2人が救援に出るところであった由。申し訳なし。

C1の登攀隊長からすればこうなる。曰く「15:30に仕事を終了し帰りはじめたが、雪原を吹く強風でトレースはきれいに消えている。行きと同じラッセルの苦労を味わいながら18:30によくC2にたどり着く。この帰還中、中山からの連絡が途絶えたので、C1、ベースキャンプで万一の対策を検討するといったハプニングが起こる。ルートの状況が下から全く把握できない場所で、2名だけが行動することはあまり精神衛生上よくない。」

人見、中国隊員がC1へ上がる。C1では吉村、高井が休養しており、テントの外でくつろいでいる。日当たりの少ないベースキャンプや強風が絶えないC2とはちがって、C1だけは別天地である。ほとんど風もなく、陽は一日中射し込み、周りの景色も隣のメツモと五冠神山とがテントの正面に見える。下部の

ラッパ口と上部のC2のコルに至る急な雪壁に挟まれてはいるものの、テントサイトとしては申し分のないところである。

人見、袁、木 C1入り。  
吉村、高井 C1で休み。  
シェルパ×4 C1 ⊃ デポ地 ⊃ C2

## 22/NOV. (37) 快晴～曇り

C2 ⊃ バットレス ルート工作

6:40 スタート - 9:00 フィックス開始 - 14:50 フィックス終了 - 16:00 フィックス開始点から帰り始め - 17:50 C2

吉村、高井C2入りし、中山、小林は昨日に引き続きC3へルート工作を行う予定で行動開始。

バットレスに7ピッチ、フィックスでルートを延ばす。1ピッチ目はバットレスに取付くため、左上の巨大セラックを横目で見つつ、クレバスをひとつ大股開きで渡って取付く。2ピッチ目以降は、ほぼ直上。きわめて急峻な雪壁で、下りがこわい。当初C3予定地としていたバットレス中間部のやや傾斜が落ちた地点の下まで到達した。しかしどうも緩傾斜帯はテントサイトとしては不相当で、さらに上部に候補地を探す必要がある。

夕方C2に上がった吉村が不調を訴える。高井によると朝から吉村の顔がかなり腫れていたようで、なんとかC2へ上がったもののむくみがひどくなり、顔や手足に痺れがあるという。典型的な高度障害の症状である。吉村、高井はこれまでの高所経験を踏まえて十分な高所順応をせずにC2入りしている。やはり無理があったようだ。大事をとってC1へ下ることにする。ちょうどシェルパが荷上げにC2へ上がっていたので、彼らにエスコートさせて下る。

高井のみC2入り。  
人見、吉村、袁、木 C1 ⊃ C2  
松林、福崎、宮坂（読売） BC ⊃ C1

睦好 C1入り。  
中村は体調が回復せず休養。

## 23/NOV. (38) 晴れ～曇り→雪

吉村が急遽C1へ下ったので、中山、高井、小林共に休み

・睦好、木、袁 C1 ⊃ C2荷上げ  
・木、袁 BCへ下る  
・松林、中村、報道隊員の宮坂 BC→C1

これで登攀隊員全員がC1以上に上がった。この日以降12月3日にベースキャンプに降りるまで日本人隊員は撤退の判断となったラッパ口を通過しなくなる。

午前中は大した悪天でもなかろうとタカをくくっていたが、荷上げ部隊がC2へ着く頃（11時頃）より、本格的に降雪。夜までに積雪150cm。

吉村も松林の点滴を受け高度の影響は回復している。C1に上がった中村も薪の煙に悩まされるベースキャンプから上部キャンプに上がって調子は上々だ。

明日休養日となる中国隊員からベースキャンプに降りたいと言ってきた。どうも高所食が口に合わないことと、中国人の話し相手がないC1は居心地が悪いようだ。幸い雪も小降りの状態なので、ベースキャンプに降りることを許可する。

## 24/NOV. (39) 雪

昨日からの降雪で一日沈殿。ペタン予報（気象担当の福崎による天気予報をこう呼ぶ）によると、中国大陸北方に有力な低気圧があり、その周縁に位置する梅里雪山には弱い気圧の谷が続いているという。大雪のパターンではないが、数日間天候が悪いだろうとのこと（28日迄、別々の気圧の谷が通過する由）。C2では60cmの積雪で、テント周りの除雪をする。C1で40cm、ベースキャンプ12cmの積雪。

この日は朝一番にシェルパからベースキャンプに降りたいという要請があった。

後から思うと、彼らには数日間天候が悪化する「勘」があったのかもしれない。C1から彼らの足で30分後には土の上に立てるわけで、登り返しの労を厭わなければ快適なところで悪天をやり過ごすのは賢明な処置ともいえるだろう。

C2では17:00～19:00まで2時間、3人でまじめにテントラッセル。のけてものけても積もる。斎藤隊長の交信で、「登山には、ドラマがある。がんばって乗り切ってくれ」と。

日本酒をしこたま飲んで、替え歌をトランシーバーで歌って息切れ激しく倒れそうになった。

九州場所の千秋楽のラジオ短波が聞けた。史上初の5人による優勝決定戦（曙、武蔵丸、貴乃花、若乃花、魁皇）で不戦勝の曙が勝つかと思っただが、武蔵丸があっけなく優勝した。

## 25/NOV. (40) 雪→晴れ

全面的に停滞。

C2では14:00～17:00まで大々的なテントラッセル。ペタン予報では、今夕8時に大きな谷が通過すると、そして29日まで連日小さなトラフが通ると。（28日から29日まで悪天が延びた。）

夜に大きな気圧の谷が通るといっているので、小林もそれまで居た一人のテントから中山、高井のテントに移して寝ようとしているのに夜9時、星と月が出、本峰がはっきり見える。何はともあれ、明日以降天候のくずれが小さく動けるようになって欲しい。

退屈な沈殿生活を和らげるためベースキャンプの報道隊員がトランシーバーを使った読売FMを開設してくれた。これは読売に届いたインターネットのメールをトランシーバーで読み上げてくれたり、ベースキャンプに持ち込んだ音楽テープを放送してくれるものである。隊員には非常に好評で、この日以降隊員からのリクエストまで出てくるようになった。

## 26/NOV. (41) 晴れ→曇り～雪

C2 コ バットレス取付

8:40 スタート - 13:10 取付フィックス開始点  
- 16:10 C2

雪はやんだが、積雪状態の安定を待つため、行動を控える。C2ではバットレスまでの雪田部分のラッセルを行い、C1では上部急斜面のフィックス開始点までラッセルを行う。C1で雪面の逆層テストを行ってみるが、雪崩の危険があり、急斜面には踏み込めない。

早朝は、きわめて天気良く、月明かりだけで外で動ける程。

行動しだしてから、主山稜の向こうから雲が湧きこちらに流れ込む様になる。時々、全くのラオフエンでどこに居るのかさっぱりわからなくなる事あり。小雪も舞い、いつもの小さな低圧帯の通過と思われる。北東方面は、常に天候良く、メコン川以東には、青空が広がっている様子。

ラッセルは、ひざまで、中山、高井、小林3人で交替、食べるものしりとりをしながら往復する。バットレスに近い上り部分は、ラッセルがすねまでと浅いところもあり、表層雪崩があったのかもしれない。取付への20m程の斜面が、腰までもぐり、雪崩を気にしつつ進むと、“ズン”という音とともに、少し沈み、5m程上部に亀裂が走った。帰途は半ばから完全にトレースが風で消されており、まじめにラッセルのやり直しとなった。

小林が終日頭痛を訴える。テントに戻るとすぐシュラフにもぐり込むが、いつもの事なので体調が悪いのか判断に困る。

## 27/NOV. (42) 曇り～晴れ

C2では、朝4時に起き、外を見るも、本峰方向ガス、月明かりも雲の向こう故、バットレス方向へでかけることは止め再び寝る。隊全体としては活動を再開する。本日の行動はC1～C2間のフィックスロープの掘り起こしにあてる。C2からはコル直下の急な部分

6ピッチを上から掘り起こし、C1からは下から掘り起こす。フィックスロープは高強度ポリエチレンという新素材の6mm径で、これまでのロープより細いため回収は比較的楽に行える。しかし部分的に小規模な雪崩に埋まって回収できない所もあり、そういった場所では張り直す必要もある。

ラッパ口を出てからC1へ至るルートは、雪田のクレバスを避けて側壁側につけられている。このルートも側壁からの雪崩で埋まっているところもあるので、クレバス帯にルートを引き直すことにする。この仕事はヒマラヤ経験の浅い睦好、中村にやってもらうことにする。

この日もラッパ口は雪の安定をまってベースキャンプからの荷上げは見送る。

中山、高井、小林：10:00 C2スタート

- 14:00 C2戻り。

ペタン予報では、29日～30日にも弱い気圧の谷が通るとか。11月初旬の快晴続きは、もはや望めないのだろうか。

## 28/NOV. (43) 快晴/強風

バットレスフィックス延長 中山、高井、小林

6:00 スタート - 9:00 取付 - 14:00 最高到達点  
- 15:00 取付点 - 17:30 C2

久々の快晴。ヘッドランプを付け、3人で新たなるラッセル。もう4度目だ。しかし、だんだん慣れてきて、前回のトレースをうまくつかむと、あまりもぐらない。

それでも3時間かけて横断。1ピッチ目からフィックスロープはかなり埋まっている。2～3ピッチ目の斜面からの雪崩で大股開きで越えていたクレバスが完全に埋まっていた。

雪面の状態は表面から8～10cm程のクラスト部分が、簡単にはがれるのを小林と確認。「こんなんが上から来たら流されるやろうな」と言っていた矢先、高井、小林、中山の順で2ピッチ目の急斜面を直上していたら、2ピ

ッチ目終了点付近から亀裂が入り、幅10m程にわたり表層雪崩が発生した(10:45)。ルート上にデブリを残しながら真下の巨大なクレバスに吸い込まれて行った。中山が一番下で最も衝撃大きく、2m程の垂直に近い部分を左上へ乗っ越したところで遭遇したので、もとの位置へ飛ばされ宙づりになった。

異常に気づき、眼前に板状の雪崩がおしよせて来るのを認めたのはほんの一瞬だった。

必死で雪崩からのがれようともがいているつもりが、すでにユマールで宙づりになっていて、股間にハーネスの圧迫を感じて我に返ったものの、サングラスと顔の間に入り込んだ雪のおかげで視界を奪われ、暫くはショック症状であった。上の2人の衝撃は小さく、その場で倒れた程度。小林があとから右脇が痛い訴える。

雪原横断中、さらにフィックス通過直前に危険を感じていながら、事故を未然に防げなかった事は大きな反省点である。

事故のあと、右上する3ピッチ目終了点で、荷をデポしてC2へ戻るつもりだったが、その上の雪は存外安定しているので、上ことにした。ここから上は風が強く降雪の影響はほとんどない。7ピッチ終了点から新たに2ピッチ延ばし、当初のC3候補地を越える。当初の候補地は、傾斜のあるリッジ状の上、強風が常に吹き適地とはいえない。11時間半の行動、その内容は雪崩遭遇、強風の中バットレスのルート工作、トレースの埋まったC2への折返しで疲労困憊。  
吉村、睦好 C2入り

## 29/NOV. (44) 快晴/強風

中山、高井 C2で休み

吉村、睦好、小林3名ルート工作

ニマドルジ、ゲンドウ C2入り

松林、中村、宮坂(読売)、袁、木5名 C1  
コ C2

今日も快晴。

C2でも風強い。睦好の交信は風が強いことをしきりに訴える。吉村もこれ程まで風が強いとは思わなかったのだろう。交信の度、風が強い事を報告する。

フィックス工作隊は、昨日の終了点からさらに5ピッチ延ばしてC3位置を確定して戻る。右側が欠けて氷が出ている巨大なセラックを左から回り込んで、その上に小林が到達。ここをC3にすることを決定。ちょうど2張りほどはれそうなスペースがある。標高5,670mである。バットレスの取り付けからC3まで20ピッチのフィックスを固定した。今日の行動も強風で大変だった。

C1の日本人隊員、中国人隊員も順応を兼ねた荷上げを行い、シェルパ2名がC2入りする。シェルパは当初C1からC2への荷上げまでを担当するという事で契約したが、C3への荷上げを要請すると快く応じてくれた。

ペタン予報では、天候は、12/3～4に大きな谷が来る由。それまでに、C4建設すべく、明日、中山、高井2名はC3入りする。

## 30/NOV. (45) 無風快晴

中山、高井 C3入り。ニマ、ゲンドウ、睦好 C3荷上げ。

人見、中村 C2入り。吉村、小林 C2で休み  
8:00 スタート - 14:45 C3～上部フィックス工作 - 17:30 C3

C3への途中で、昨日右へ延ばしたが戻って来てそのままになっているフィックスロープが1本あり、途中で中山が回収。中山、高井がC3入りし、睦好とシェルパ2名がC3まで荷上げする。C3を建設後、中山、高井で氷壁の取り付けまで3ピッチ、ルートを延ばす。氷壁は大きく3段になっており、下の氷壁は40mのほぼ垂直な壁である。

C2に人見、中村、中国隊員2名が入り、登攀隊員がすべてC2以上に上がる。今後の体制としては、C1には松林が残りベースキャンプとの中継を行い、C2で人見が上部の

ルート仕事を指示し、C3の中山が先端を指揮することになる。

隊員の調子は、本隊の隊員もなんとか順応ができた模様だが先端行動に参加するには至っておらず、特に若手隊員の睦好と中村はルート工作に参加できないので不本意だろう。

C3建設で今後のアタック体制について検討を始める。これからの氷壁ルートの状態と隊員のコンディションを踏まえた上で、C4の荷上げ体制を検討しなければならない。

ベースキャンプからの天気情報は毎晩気圧の谷の通過を知らせてくるが、翌朝は風は強いものの晴れている。ここ数日来このパターンが続いている。晴れてはいるものの気圧が不安定な状態が支配しているようだ。

昨日のペタン予報を気にして、中山のこの日の日記には「明日風が吹かないことだけを祈る。明日バットレスをぬけ、12/3できることなら、LongAttackをかけたい。」とある。

## 1/DEC. (46) 快晴

### C3 コ ルート工作

8:00 スタート - 18:00 C3

中山、高井 上部氷壁ルート工作を行う。人見はC2から単眼鏡でルートの指示を出す。C2からはこれから登る氷壁が真正面に望め、指示を出す場所としては申し分ない。

以下、人見登攀隊長の記録。

「中山、高井は氷壁末端に達し、最初高井がややガリ状にルートを求める。しかし数メートル上がったところで行き詰まり、今度は中山がやや左の壁に取り付く。ほぼ垂直な壁を強引にピッケルを打ち込み、ひたすら上に向かって体を伸ばしていく。中山の気迫がC2の双眼鏡にまでひしひし伝わってくる。中山が先発隊から終始ルートを切り開き、バットレス末端で雪崩に遭って宙づりになった時でさへひるまずルートを延ばしてきた。これも梅里の最大の核心部であるこの氷壁を突破するためである。中山の奮闘で下部氷壁に

もルートが切り開かれた。中段、上段の氷壁は技術的には問題がなさそうだ。さらに上部へルートを延ばす。ルートはやや左の方へふりながら中段の氷壁の弱点を攻める。この氷壁も中山トップでルートが完成する。あとは上部氷壁の乗越を残すだけだ。この日5ピッチフィックスを伸ばしたことになる。

C3入りした吉村、小林もそのまま上部に上がり、下部氷壁のルート整備を行う。急なところにアブミをセットしたりするが、このルートは荷上げを頻繁に行うには適していない。

この日の夜、今後のアタック体制について検討する。C3の食料は12月6日まで確保されている。C3にテント2張り上がっており、C4建設も可能である。

できれば現在C3に滞在している4名でアタック隊、サポート隊を形成したいのだが、中山、高井の消耗も激しく、無理な行動もできない。

C3からのロングアタック、ビバークキャンプを上げたアタック、C4を建設してのアタックといくつかの方法が考えられるが、主稜線以降のルートの状態がまだ分からないので、現時点ではなんとも言えない。いずれにしても先行している中山らはこの先数日間は何行動してもらわなければならないだろう。

天候は相変わらず強風、快晴が続いている。12月3、4日に来るとみられていた深い谷の予報は修正されたが、ベンガル湾に下層擾乱(低気圧)があり北に移動しているらしい。ベースキャンプからは、この低気圧が早くて3日、遅くとも4、5日に接近するだろうと伝えてきた。

今後の行動を判断するのは非常に難しいが、焦る気持ちを抑えて一つ一つ不確定要素をつぶしていくことが大切である。明日の行動はバットレスを突破し上部の状態を確認し、C2の若手にはC3入りに向けた休養をとらせることにする。」

<先端行動の詳細>昨日の到達点からさらに2ピッチでバットレス上部3段壁の基部。中山トップで1段目雪壁を直上。ダブルアックスをまじめにやらなければならないルート。堅雪壁といった感じのピッケルの刺さり具合で不安感はない。途中で3本のアイスピストンを打ち50mいっばいのぼす。このピッチはフィックスロープではなくケービングロープを使用し、そのままフィックス。つづいて、フィックスロープ2本をつないで、中段を越え上段途中まで到達。最後の乗越がクレバスとザクザクの雪氷に阻まれ、果たせず。

吉村、小林 C3入り。

## 2/DEC. (47) 快晴

### C3 コ ルート工作。

6:00 スタート - 15:30 6,250m - 18:30 C3

C3では吉村、小林が先行してルートを延ばし、中山、高井がそれに続く。C3から合計16ピッチで、主稜線の上部雪田の末端(6,250m)に到達する。主稜線上は強烈な風で、ブリザードの中の行動となる。

人見、睦好は太子雪山と主峰とのコル(Y山口)へ頂上直下裏側のルート偵察に出かける。頂上の西側はピーク直下まで傾斜の緩い雪田となっており、大きなクレバスが2本ほど走っている。

中山らが到達した主稜線からは2つのルートが考えられる。一つは主稜線から稜線伝いにピークを目指すルートである。距離的には最短で行けるが頂上直下で一段せり上がっており、その処理に手間取るかもしれない。もう一つは大きく雪田上を迂回し、西にのびている稜線に取り付いてピークを目指すルートである。これは技術的には問題ないが、距離がかなりある。どちらのルートも十分対応できるだろう。アタックメンバーが現場で判断できる。

頂上稜線に達したことで明日のアタックの構想を固めたが、14時過ぎ、ベースキャンプ

の福崎からC1の松林へ悪天が来そうだという連絡を傍受する。人見はコルから下りだしていたところで、急いでC2へ戻る。

夕方全員がテントに戻った時点で各キャンプ間で、ベースキャンプからの気象予報を聞き、今後の対応について相談する。福崎からの予報では、ベンガル湾の下層擾乱がサイクロンに発達し、それが梅里雪山に接近する可能性が高いという。夕方の時点で上空に高層雲が認められ、梅里雪山の西側には雲海が発達しており稜線を越えて我々が活動している東側にまで流れている。福崎によれば、最悪の場合95年11月にネパールで大量雪崩遭難をもたらした悪天と同程度になる可能性があるという。

我々としては最悪の事態を想定し、全員ベースキャンプへの待避を決定した。C1ないしC2で悪天をやり過ごすことも考えられたが、1990年の第2次隊の大雪の例もある。登り返しは大変だが1日でベースキャンプに降りることができるので、あえて全員がベースキャンプに下ることにしたのだ。

上部キャンプからは最悪の悪天が来た場合、フィックスロープやその他が埋まって登攀を再開できなくなるという意見も出た。

<先端行動の詳細>三段目雪壁の最後をダイニーマ10m程小林が延ばして、フィックスを始める。これが1時間ぐらいかかってしまう。これで壁は越えたのだが傾斜は落ちない。

次にケービングロープを1本張り、フィックスロープを4本、それでも全然足りないので、メインロープ2本を張る。計7本を継ぎ足し、ようやく上部を見渡せる頂上稜線の下端へ出る。

三段雪壁を越えたら、傾斜もゆるくなってピーク直下まで走って行けるものと考えていたが大間違い。傾斜は予想よりはるかにきつく、風が恐しく強い。下から肉眼で見える顕著な段差を2つを越えること(当初実際の大きさがはつきり読めず突破に手間取るかも知



れないと思われた)それ自体は全く問題はなかったが、カリンコリンのクラスト急傾斜と強風で、全面的にフィックスを強いられた。しかもまだ頂上まで標高差500mを残している。

### 3/DEC. (48) 快晴

C3→→→BC

9:30 スタート - 17:30 BC

C3は早朝キャンプを出発。各キャンプとも悪天に備えてテント周辺を整理し順に下山を開始する。

C1からベースキャンプに下りだし、ラッパ口が非常に険悪な状態になっていることを知り、愕然とする。ラッパ口の7ピッチ分の雪がほぼ完全になくなってガレ場と化しており、アイスフォールの形状も大きく変化している。

ラッパ口の区間でロープ切断箇所8ヶ所。岩に埋まっている部分2ヶ所、ロープの皮膜が喪失している箇所が約5mもある。さらにラッパ口上部の非常にもろいルンゼにも雪がなく、そちらからの落石の危険性も非常に高くなっている。全体にいつ岩雪崩が起きてもおかしくない状態だ。このルートを下りながら今後の活動に非常に不安を感じる。

ベースキャンプへ下り隊長以下皆から出迎えられるも、これまでの疲労とラッパ口の状態に対するショックで口数は少ない。ベースキャンプ詰めの隊員からの心づくしの夕食を食べ、久しぶりに土のおいさを嗅ぎながら休息する。

中山はC3からラストでC2へ戻る雪原を一步一步踏みしめて帰る。一人離れて歩くと、つい17人の遭難に思いが至る。「この下に埋まっているのか」その次に言葉が続かず、わかんの歩を進めては、「なんで死んだんや」「こんな寒いところで」。冷たい風が吹き渡る。皆の埋まった辺りを踏みしめてC2に戻る。

中山もBC~CI間のルンゼの様変わりに驚く。この日の日記にこう記されている。「8

ピッチ分すべてが危険地帯。この部分の通行の危険をもって登山行動を打ち切るべきかも。』

### 4/DEC. (49) 快晴

BC 休み

予想されたサイクロンはインド大陸に西進し消滅した。完全に肩すかしを食ったことになる。天気は恨めしいほど良い。

新たに重大な事態が発生しているが、少しでも休養を取り、昨日のラッパ口でのショックを癒すべく昼間は休養にあてる。本来ならばアタック体制がほぼ完成した今、隊員の意気は上がっていないかならないはずなのだが、隊員の意気は今ひとつ盛り上がらない状態で一日が過ぎていった。

夜、日本人隊員だけで隊員会議を開く。隊員会議ではラッパ口の危険性が指摘され、今後ルートとして採用すべきか議論を重ねる。今日は結論を出すことはせず、隊員の率直な気持ちを述べあう会議と位置づけたが、危険を承知した上で再開すべきという意見と、危険の許容範囲を超えているので登るべきではないという意見が平行線のまま出口のない状態で終始した。

1990年2月に偵察した時とBC~CIのルンゼの様子は全く異なっている。偵察時は完全に雪に埋まった平坦なルンゼでひざまでもぐった程だった。1990年冬の2次隊の写真を見ても氷が目につくものの雪と氷のルンゼである。今の岩だらけのルンゼには恐怖があり、ルートとして適切なのか、はなはだ疑問。死にたくないし、誰にも死なせたくない。氷河は上るつもりで来ているが、岩河を上ったり、渡ったりするのは違うと思う。一方で、これほど天候よろしく、フィックスも6,250mまで張ってあるこの状況で、ピークに立てないなら、いかなる状況の下で登頂できるのか、と思う。巨大なジレンマの前に皆、沈滞。

### 5/DEC. (50) 快晴

BC 休み

夕方15:00より再度、日本人だけで隊員会議を行う。昨夜の会議、今日の昼間と隊員は思い思いに今後の登攀について検討し、話し合った。この会議での結論は断念であった。隊員全員がこの結論を受け入れる。

この結論をもとに、斎藤隊長が中国側と協議し正式に登攀断念が決定された。

日本側会議は、人見の「基本的には止めようとおもいます」から始まった。「基本的には」という言葉に人見のつらさが滲み出ているように感じられる。若手の小林が「登攀隊長の首をすげかえても僕は登りたい。ケイハクさん(中山のこと)、やってくれませんか」という驚くべき発言あり。それ程までに、皆の登りたい気持ちは強く、ここまで来ていながら何故断念するのか、という反発は強かった。

確かに、1990年2月の偵察のときは、1ピッチ目が土まじりの氷であっただけで、あとは、上部ルンゼからの雪崩を避けることだけを考えてフィックスを延ばせばよい、比較的危険の少ないルートであった。

しかし今回は、雪が増えてルートのラッセルがつかないという状況とは全く逆の様相を呈し、日ごとに雪は消え、スノーバーやアイスピトンさえ抜け、いたるところでロープは切断される状態で、昼夜問わず岩石の崩落が頻繁におこるようになった。今回の様変わりについては、先発隊がBCに着いた時に被っていた雪が解けた時点で、ルンゼの右側岸壁上部に周りの色とははっきり異なった、色の薄い大きな崩壊箇所が認められ、ここが大崩壊した結果の、一過性(多分一年経てば底雪崩と共に殆どは洗い流される)の岩河状態だろうと思われるのだが。

「こんなルートなら、1990年の偵察で『ルートは確定した』と胸を張って帰国しなかった。」と会議上、中山が発言したことは決し

ておおげさなことではなく、中山の本心だった。

12月6日	撤収準備
7日	撤収準備
8日	BC~~雨崩
9日	雨崩~~西当
10日	西当~~徳欽
11日	徳欽~~中旬
12日	中旬~~大理
13日	大理
14日	大理~~昆明
15日	昆明
16日	昆明
17日	昆明~~北京
18日	北京
19日	北京
20日	北京~~関空

# 気 象

福 崎 賢 治

## まえがき

梅里雪山周辺の地域は、長江・メコン河・サルウィン河の三つの大河が東西60～70kmの範囲に接近し、それぞれの分水嶺には標高5000～6000m級の横断山脈がそびえる、地勢の激しい地域である。そのため、この周辺地域への主な水蒸気供給源であるベンガル湾より湿潤な気流が到来すると、この障壁による強制上昇によって降水となる。そして、その量はより前面、より高所で多くなる。

従って、メコン・サルウィン両河の分水嶺であり横断山脈の最高峰でもある梅里雪山一帯は、ベンガル湾との間にさほど顕著な障壁がなく、ベンガル湾からの湿潤な気流が直接ぶつかることになり、周辺地域の中でもかなりの多降水地域となっている。

以上の理由により、入山時期の設定が大変重要となるが、一次隊、二次隊の収集したデータから、今回の登山隊は11月、12月を登山期間とした。この地域は11月上旬に偏西風帯となり、やっと天候が安定してくるのである。この事実は、日本気象協会の後藤あずみ氏のご好意により作成していただいた長期間にわたるひまわりの連続画像によっても確認された。

しかしこの地域では、12月から1月にかけて大雪が降ることがある。そのひとつが1991年1月2日から3日にかけての、二次隊の遭遇した大雪である。この結果17名の中日隊員の生命が失われた。

今回の登山隊は、二次隊の遭難の反省をふまえ、できる限り大雪に対する注意を心がけた。

## 天気予報システムと天気予報の方法

今回の登山隊の天気予報は、現地での気象観測と気象ファックスによる天気図などの受信、現地での気象衛星NOAAの雲画像の受信、衛星通信を使つての日本気象協会からの気象情報の入手、中国側を通じて徳欽気象台からの天気予報の入手、という5つの情報を総合して行った。また筑波大学安成氏(AACK会員)のご好意により、随時日本から衛星通信を通じて気象情報を提供していただいた。

### 1) 現地での観測

#### a) 目視気象観測

BCでグリニッジ時間(北京時間)、00(08)03(11)、06(14)、09(17)、12(20)と3時間毎に天気、雲量、視程、雲の種類、降水、降雪等を記録した。前進キャンプからのデータの入手については、乾湿度計を各キャンプに設置し、気圧(高度計による計測)、気温等観測する予定であったが、人員の都合等のため系統的に行うことができなかった。

#### b) 自動気象観測システム・データロガー

日本山岳会より借用した自動気象観測システム・データロガー(白山工業株式会社製)をBCに設置し、気温、湿度、風向、風速、気圧を1時間毎に自動計測し、得られたデータを毎朝回収し、分析した。

#### c) 気象ファックス天気図の受信

北京発信の500hPa予想天気図を中心として、他に500hPa解析、300hPa解析等を毎日受信した。BCの地形のためか日本、インド、モスクワからの天気図は受信できなかった。

#### d) 極軌道気象衛星NOAAの雲画像の受信

BCで、日本船用エレクトロニクス株式会社より借用した、NOAA受信システムNP S-1を用いてノートパソコン(拡張ボックス付き)によりNOAAの雲画像を受信した。画像は可視画像(VIS)と赤外画像(IR)の2種類が得られる。BCが谷間にあるという地理的条件のためNOAAの軌道によっては電波が遮られ受信できなかった。

### 2) 徳欽気象台からの天気予報

毎日中国側が夕方、無線にて徳欽気象台からの当日20:00から翌日20:00までの天気予報を受信し、日本側に伝えられた。予想気温と天候に関する簡単なものであった。一度12月1日に10日間の中期予報をもらっている。(これは昆明気象台、北京気象台からの予報でもあった。)

### 3) 日本気象協会からの気象情報の提供

日本気象協会から読売新聞社のインマルサット海事通信衛星を通じて毎日送っていただいた情報は次の通りである。

- a) 300hPa 高層天気図 実況図と20時間後の予想図
- b) 500hPa 高層天気図 実況図と24時間後、48時間後、72時間後の予想図
- c) 850hPa 高層天気図 実況図と24時間後、48時間後、72時間後の予想図
- d) 梅里雪山周辺の5日分の気象解説

なお随時ひまわりの雲画像も送っていただいた。

これらの気象協会からの情報は、登山隊にとって大変有益であった。気象協会の方々の、このご苦勞に対し、心より感謝いたします。また快くインマルサットを使用させていただいた読売新聞社、ならびにこの貴重な情報を毎日ファックスで送信する勞を執つて下さった読売新聞社大坂運動部次長坂田孝良氏にもお礼申し上げます。

### 4) 安成氏からの気象情報の提供

安成氏から読売新聞社のインマルサットを通じて送っていただいた情報は次の通りである。なお送っていただいたのは、11/19、11/25、11/30、12/02、12/03、12/04、12/05、12/06の8回である。

- a) 500hPa Temp
- b) 500hPa Z&T
- c) 500hPa Height
- d) 梅里雪山周辺の気象解説

なおひまわりの雲画像、数値予報課の予報天気図も、時によって送っていただいた。

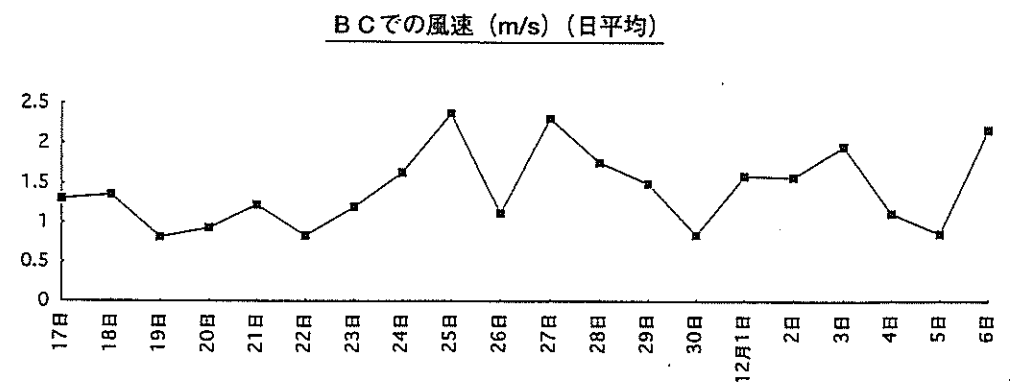
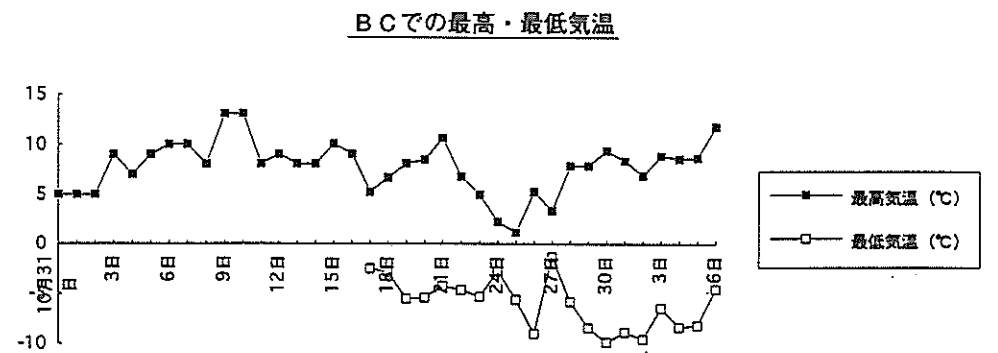
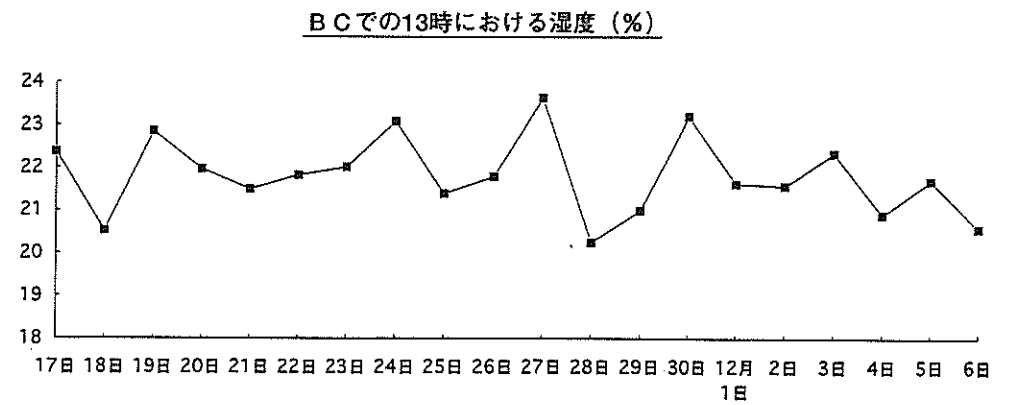
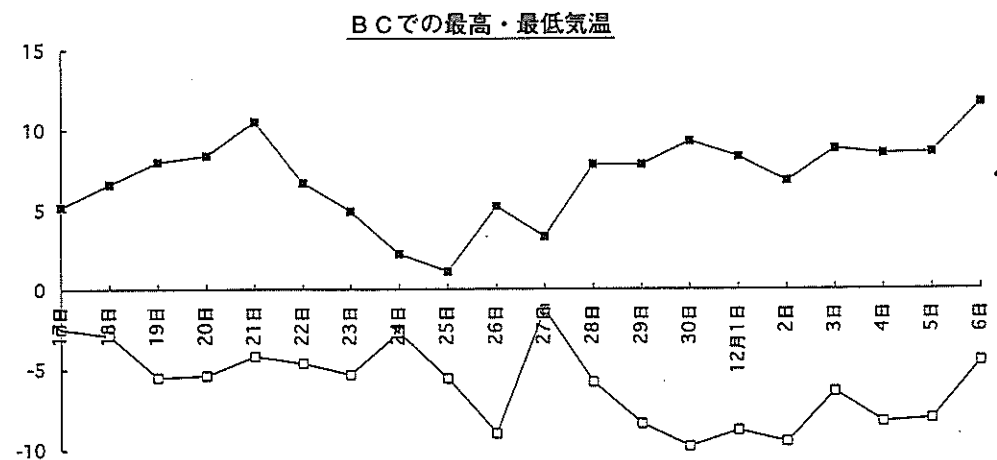
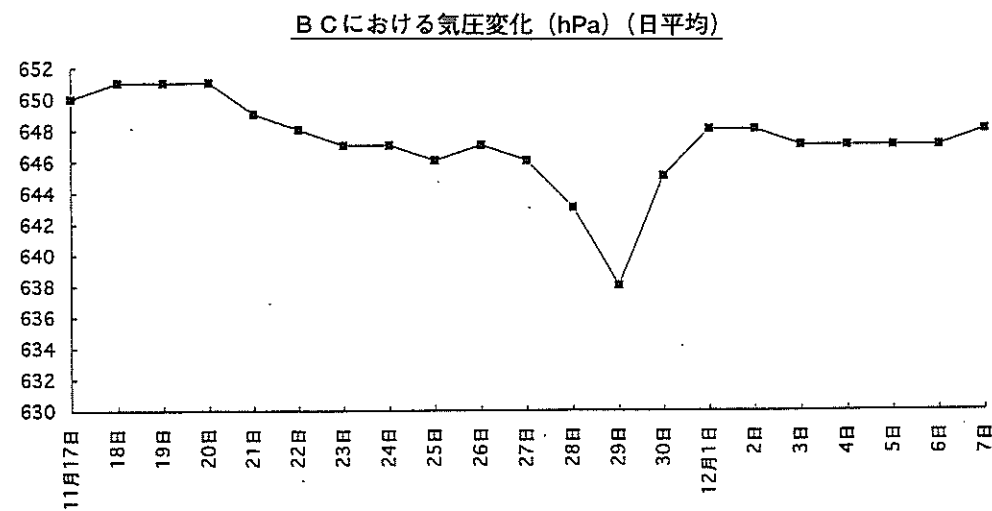
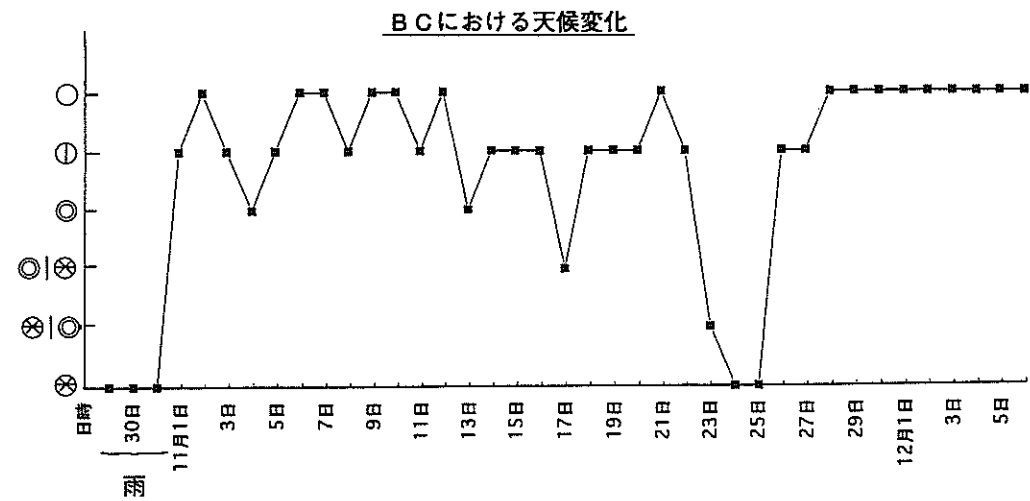
お忙しい中、常に登山隊に気を使っていただき、心より感謝いたします。

## 天気と気象の変化

### 1) 気象観測結果

登山期間中のベースキャンプの観測結果を図に示す。ベースキャンプは、東西にのびた谷間に位置し、高度は3,470mである。夏の放牧地であり、周囲は針葉樹林に囲まれている。後ほど地元の人に聞いたことだが、今年は例年になく天気が良かったそうである。実際降雪を伴う悪天は、11月23日から11月25日の1回であった。11月23日14時頃から25日21時頃まではほぼ降り続き、降雪量は降り始めよりBCで13cm、C1で70cm、C2で90cmほどであった。

気温については、同時期比較の材料として1990年12月の第2次梅里雪山登山隊(遭難した隊)の残した佐々木メモしかないが、今年は気温が高かったようである。(当時、BCで日中2℃、日の出で-15℃の記述がある。)上部の系統的データは得られていないが、C1で朝7時から8時の間で、-9℃～-18℃、夜18時30分から20時の間で-4℃～-14℃、C2で朝方で-14℃～-21℃、夜で-12℃～-20℃であった。C3は観測したのが、朝、夜各1回しかないが、朝-14℃、夜-18℃であった。



風については、BC、C1、C2とも地形の影響のせい、一定した風向は観測されなかった。まさに風が舞う感じである。ただし、C2より上部は常に風が強く、風がない日は11月30日のみであった。1990年の2次隊の記録を読むと、それほど風に悩まされた記述がないが、今回はかなり手ひどく風に悩まされたというべきであろう。これは300hPa実況図を見ても40m/sから50m/s前後の風が吹いていることが多いことから確認できる。

湿度は、BCでは1日を通じてそれほどの変化はない。これはBCの高度が3,470mでありながら、針葉樹林に囲まれているという環境のせいだと思われる。まさに湿潤ヒマラヤといわれるにふさわしいものと思われる。チベットのような乾燥地帯と大いに違う点である。

気圧は、11月29日に、一番低くなっているが、その日は快晴であった。これはこの地域が、単に気圧の谷が通過して悪天となるのではないということを示していると思われる。実際11月23日から25日も余り強くない谷が通過しているが、このときは、衛星雲画像によればベンガル湾からの下層暖湿流が流入しているのが認められる。この暖湿流の有無によって降雪があるかないかが決まるようである。

## 2) 天気図からみた気象

500hPa高層天気図では、梅里雪山周辺、北緯30度東経98度周辺は等高線が東西にのびた状態である。そして弱い谷が次々と梅里雪山周辺を通過するというパターンが続いた。11月23日から25日の悪天時の衛星雲画像をみると、梅里雪山の南西方に南北に立つ何本かの筋上の雲がみられた。これはベンガル湾方面(ないしはベトナムやマレーシア半島東海上)からの下層暖湿気の流入を示している。他の日の気圧の谷通過時の雲画像をみると、南北にのびる筋上の雲がないか、または梅里雪山に届いていない。従って、この地域の降雪は、

気圧の谷通過時の南からの暖湿流の流入によってもたらされるというべきであろう。予報面からいうと、この現象は困難性をもたらす。天気図には、下層暖湿流の雲は現れず、常に雲画像で見張らねばならないからである。

一方11月29日に、衛星雲画像によって、ベンガル湾の北緯13度東経84度付近に熱帯擾乱(サイクロン)ができていたことが確認された。周辺の雲域の一部が梅里雪山周辺の南方にのびてきていることも確認された。12月1日には北緯15度東経89度付近に移動し北上中であった。この時点では北上するにつれ東よりに向きを変えて進むとみられていた。従って11月29日から12月1日までの間、気圧の谷が通る度、熱帯擾乱からの暖湿気が流入する恐れがあり、予報面で大変気を使った。一方熱帯擾乱の動きは、12月2日、3日ゆっくり西進し、12月4日、5日には北緯15度東経82度付近に停滞ないしは西北西進し12月6日にはインド東岸に達しそのまま上陸してしまった。また熱帯擾乱から吹き出す雲のバンドも北緯25度までで、梅里雪山付近には達しなかった。

なおこの地域の中期予報として、チベット高原西方に寒気を伴った気圧の谷が現れ、北緯30度付近まで南下したとき、ヒマラヤ山脈及びチベット高原によって寒気の擾乱が起こり、南からの寒気が梅里雪山周辺にベンガル湾からの暖湿流の流入をもたらす降雪となる、というものがある。実際11月23日から25日の降雪に先立ち、11月19、20日にチベット高原西部に、500hPaで-25℃程度の寒気を伴った気圧の谷が出現していた。この寒気の擾乱が3日後の、ベンガル湾からの暖湿流の流入をもたらしたと思われる。12月1日頃、再びチベット高原西部に、寒気を伴った気圧の谷が出現した。この谷はより北方の大きな谷につながっていた。一方ベンガル湾には熱帯擾乱があり、この時点ではチベット高原東縁を回り込んだ寒気が、熱帯擾乱の水蒸気を雲南にもたらし、3、4日後の12月4日から6

日にかけて梅里雪山周辺に大雪をもたらす危険があった。一方12月1日に徳欽、昆明および北京からの中期予報として、12月2日から10日の間に、ベンガル湾からの暖湿気の流入による2、3日続く降水の確率が大であるという情報が中国側よりもたらされた。実際の推移としては、チベット高原西方の寒冷低気圧(停滞性)は徐々に弱まり、降雪はなく良い天気が続いた。

## 3) あとがき

今回は、筑波大学安成氏がコメントして下さったように、大きな循環場としては良好な天候を持続させるパターンであったようである。これは帰途、土地の人々の話によって裏付けられている。しかし気圧の谷が通るとき、南からの暖湿気の流入があるかどうかは、予測が困難であり、悩まされた。(11月23日から25日の降雪は確かに3日前チベット高原西方に寒冷低気圧が南下し、安成氏が11月19日ファックスで注意して下さったようになった。)また良好な天候の年にも関わらず、一度降雪にあうと上部ではかなりの積雪にみまわれた。また1990年の2次隊の残した記録にない、上部の風の強さにも悩まされた。この地域の天候に関しては、まだまだ未知の部分が多いことを実感させられた。

今回の気象に関して多くの方々のご協力と

援助をいただいた。特にヒマラヤの豊富な経験に基づいて懇切な助言と援助をいただいた京都大学名誉教授(AACK会員)中島暢太郎先生に深く感謝します。また自動気象観測システム・データロガー(白山工業株式会社製)を快く貸して下さいました日本山岳会大蔵喜福氏、長谷川厚志氏、およびNOAA受信システムNPS-1を快く貸して下さいました日本船用エレクトロニクス株式会社営業第一部部長伊藤寛氏、営業第一部課長大坂栄治氏に深く感謝します。特に長谷川厚志氏、大坂栄治氏には、色々な質問に答えていただき心からお礼申し上げます。

またお忙しい中いつも登山隊の気象の心配をしていただき、有益な気象情報を提供して下さいました筑波大学の安成哲三氏(AACK会員)に心からお礼申し上げます。

最後に、毎日の気象情報の提供という我々にとって大変心強い支援をしていただいた財団法人日本気象協会に対して心からお礼を申し上げます。その際、提供に関するお世話をしていただいた中央本部情報処理部長森本陸世氏(AACK会員)、実際に提供の業務を担当していただいた同本部気象情報部長中村猛氏、同予測情報課長高橋共一氏、同調査役奥山巖氏、島田健司氏、小花氏、市川氏の皆様にも心からお礼を申し上げます。

## 医 療

松 林 公 蔵

### はじめに

第三次梅里雪山登山隊の医療係りとしての基本的方針は、日中双方の登山隊員ならびに後勤隊員たちの健康管理に主眼をおいた。ベースキャンプが3,500メートル、頂上の高度が6,700メートルと比較的低く、高所の問題は、従来のヒマラヤ登山とは異なりさしたる問題とはならないが、厳冬期の登山であるために、最初の段階で高所順応に失敗すると寒さのための消耗によって回復が遅れることが懸念された。したがって、酸素を上部にあげることは考えずに、あくまで病人用としてベースキャンプに医療用酸素6本を用意した。今回の隊には、斎藤、松林と医師が2名いるので、斎藤はベースキャンプにおける医療を、松林は上部キャンプにおける医療を担当することとした。

また、今回は中国側から現地住民に対する施療は慎むよう要請があったが、万一のことを考慮して医薬品類は十分量を携行した。表1、2に携行医薬品リストを掲げた。

### ベースキャンプにおける隊員の健康状態

各隊員には、医薬品の使用説明を添付した個人用医薬品袋をおのおの携行させ、症状に応じて自己判断で服薬を指示した。表3に、個人用医薬品袋の内容と使用説明を示す。

先発隊はベースキャンプ入り後も、順調にルートのをのびし、特記すべき病状を訴えた者はいなかった。また、本隊隊員も健康上はとくに問題なくベース入りしている。ベースキャンプでは、夏小屋を利用し薪を焚いて暖をとっていたため、常時、室内に煙が充満し、中村、睦好が上気道の違和感をたえず訴えていた。このため、彼等は慎重を期して初期段階での順化をゆっくりと行ったが、行動自体

に支障はなかった。

ベースキャンプでは、中国側後勤隊員ならびに中年隊員たちから、頭痛、下痢、微熱等の投薬要請があった。葉総隊長、張俊に腰痛の処置を要した。

### 上部キャンプにおける健康管理

上部登攀中に症状を訴えた場合は、適宜、医師とのトランシバー通信によって服薬指示を与えたが、個人用医薬品で十分まかなえる程度の事例に終始した。

上部における本格的治療を想定して、点滴類、注射薬、外科セット一式、パルスオキシメーター1台、計約10kgを上部に荷上げしたが、これらを使用したのは、吉村の不調時の一度だけであった。

11月22日、C2入りした吉村は、激しい下痢と体調不良のため、午後4時過ぎからC1へ下降した。翌23日、C1入りした松林が診察すると、食思不振、顔面浮腫がつよく乏尿傾向を認めるため、Lasix0.5Aと維持液500mlの点滴を実施した。これにより利尿がつき、折から2日間の悪天停滞が休養となり吉村は完全に復調した。本格的な医療処置を要したのは、本遠征期間中を通じてこの事例のみであった。

一般的症状として隊員に多かったのは、下痢、咳ならびに微熱等の感冒症状、関節・筋痛であった。

### おわりに

本遠征隊では、医療処置を要する場面は、上記の吉村隊員の高度障害の事例のみであり、おむね隊員の健康状態は良好であった。吉村の高度障害もきわめて軽微なものであり、通常のヒマラヤ登山ならば、多かれ少なかれ、全隊員が経験する程度の症状である。懸念して

いた寒冷についても、行動が厳しい局面はあったものの、健康上の支障は生じなかった。

現地住民の施療は、雲南体委の要請もあり実施できなかった。住民側からの治療の要請もなかったようである。外科的処置を要する

事例はまったくなかった。

残余の薬剤のうち、副作用がなく使用しやすい整腸剤、ビタミン剤などを徳欽人民病院に寄贈し、一部の医薬品は、北京の日本大使館医務官あてに寄贈した。

表1 医療品リスト(1)

効能	薬剤名	用量	数量(錠、包、バイアル)	企業名
呼吸器用薬剤	PL granule	1g	500	塩野義
呼吸器用薬剤	Medicon	15mg	300	塩野義
呼吸器用薬剤	Meptin	0.05mg	200	大塚
呼吸器用薬剤	Resplen	20mg	500	中外
呼吸器用薬剤	SP-Troches		500	明治
呼吸器用薬剤	Isodine gargle	30ml	10	明治
循環器用薬剤	Neophyllin	100	200	エーザイ
循環器用薬剤	Neophyllin(注)	250mg	10	エーザイ
循環器用薬剤	Nitrol	5mg	100	エーザイ
循環器用薬剤	Lasix	40mg	100	ヘキスト
循環器用薬剤	Lasix(注)	20mg	50	ヘキスト
循環器用薬剤	Diamox	250mg	200	レダリー・武田
循環器用薬剤	Digoxin	0.25mg	100	中外
消炎鎮痛剤	Bufferin	330mg	1000	ライオン・萬有
消炎鎮痛剤	Sedes G	1g	1000	塩野義
消炎鎮痛剤	Pontal	250mg	1000	三共
消炎鎮痛剤	Loxonin	60mg	300	三共
消炎鎮痛剤	Pentagin	15mg	50	三共
消炎鎮痛剤	Inteban oint	25g	200	住友
消炎鎮痛剤	Herupex	200g	30	第一製薬
消炎鎮痛剤	Voltaren supo	25mg	200	萬有
消化器用薬剤	Nauzelin	10mg	200	協和発酵
消化器用薬剤	Phelloberin-A	100mg	300	カネボウ
消化器用薬剤	Methaphyllin	1g	1000	エーザイ
消化器用薬剤	Purusenid	12mg	50	サンド薬品
消化器用薬剤	Buscopan	10mg	200	ベーリンガー
消化器用薬剤	Buscopan(注)	10mg	200	ベーリンガー
消化器用薬剤	新三共胃腸薬	1.5g	2000	三共
消化器用薬剤	Gaster	20mg	500	山内
消化器用薬剤	Gaster(注)	20mg	30	山内
消化器用薬剤	Lopemin	1mg	500	大日本製薬
消化器用薬剤	Primperan(注)	10mg	50	藤沢
消化器用薬剤	Boraginol S suppo		100	武田
消化器用薬剤	Boraginol oint		20	武田
抗生物質	Gentacin oint	10mg	20	シェリングプラウ
抗生物質	Tera-cortril oint	5g	100	ファイザー
抗生物質	Minomycin	100mg	200	レダリー・武田
抗生物質	Kefral	250mg	500	塩野義
抗生物質	Shiomarin(注)	1g	10	塩野義
抗生物質	Rinderon-VG-oint	5g	100	塩野義
抗生物質	Cefmetazon(注)	1g	10	三共
抗生物質	Petacillin	1g	10	三共
抗生物質	Tarivit	100mg	500	第一
抗生物質	Tarivit eye drop	5ml	100	第一
抗生物質	Epocellin(生食100ml)	1g	10	藤沢

表2 医療品リスト(2)

効能	薬剤名	用量	数量(錠、包、バイアル)	企業名
点滴	KN3B	500ml	10	大塚
点滴	5% Dextrose	500ml	10	大塚
点滴	20% Glucose	20ml	50	大塚
点滴	生理食塩水	20ml	50	大塚
点滴	Glyceol	300ml	5	中外
その他	Solu-cortef(注)	100mg	20	アップジョン
その他	Solu-cortef(注)	500mg	20	アップジョン
その他	Travelmin		100	エーザイ
その他	Flagyl	250mg	100	塩野義
その他	Popon S	1g	1000	塩野義
その他	Rize	5mg	100	吉富
その他	Tathion	100mg	500	山内
その他	Xylocaine-1%	20ml	10	藤沢
その他	Xylocaine(E)-1%	20ml	10	藤沢
その他	Cercine	5mg	100	武田
その他	Rercine(注)	10mg	30	武田
その他	Vitaneurin		1000	武田
その他	Odmel eye drop 0.02%	5ml	50	武田
その他	Menesit	100mg	100	萬有
その他	Triludan			
その他	Polaramin	6mg	100	シュering・ブラウ
その他	Halcion	0.25mg	100	アップジョン

表3 個人用医薬品袋内容

薬剤名	数量	効能	用法	容量
ラシックス	1錠	利尿剤	1回	1/4錠
ケフラル	6包	抗生物質	1回	1錠・3/日
メジコン	5錠	咳止め	1回	1錠・2/日
ダイアモックス	4錠	高山病予防	1回	1錠・2/日
タガメット	10錠	胃・十二指腸潰瘍	1回	1錠・2/日
ブスコパン	4錠	腹痛時	1個/回	
ロベミン	4錠	下痢止め	1個/回	
セデス	5包	頭痛、歯痛	1回	1包
PL顆粒	5包	感冒薬	1個/回	2回/日
ロキソニン	5錠	鎮痛・解熱	1回	1錠・3/日
ポントール	10錠	鎮痛・解熱	1回	1錠・3/日
ハルシオン	1錠	睡眠剤	1回	1/4錠
新三共胃腸薬	56包	消化剤	1回	1包
タリビット点眼薬	1本	化膿性結膜炎	適宜	
リンデロンVG軟膏	1本	皮膚炎	適宜	
バンドエイド	1箱		適宜	
サンスクリーン	1本	日焼け止め	適宜	
リップクリーム	1本	唇あれ	適宜	
体温計	1本			
爪きり	1本			
裁縫セット	1組			

表4 医療処置品

品目	内容	仕様	数量
外科用具一式	摂子、クーバー、持針器、針、糸	消毒済み	2
整形外科用具一式	シーネ、包帯、バスタバンド、サポータ各種		1
注射器		5cc	10
注射器		10cc	10
注射針		22G	120
注射針		20G	100
サーフロー		22G	20
点滴セット			20
Isodine		50ml	1
Isodine		100ml	1
70% Alcohol		500ml	6
Gloves			30
脱脂綿			若干
酒精綿			若干
その他	Xylocaine-1%	20ml	5
	Xylocaineゼリー	25g	5
	清潔シート		3枚
	清潔ガーゼ		50枚
	バンソウコウ		箱巻(40巻)

## 装 備

中山 茂 樹

### 1. 主要な項目を以下に述べる。

(1) 極地法のタクティクスを用いたため、多量のフィックスロープを準備した。

しかし、今回の状況と、過去の状況との違いによってフィックスロープは必ずしも十分な量では無かった。一つは、以前の体験に比べ十分な降雪によるルート上の安定が保たれておらず、一つは初心者に近い中国側登攀隊員の安全の確保のために多量のフィックスを余儀なくされた。またバットレスよりも上部の行動についても予想以上の厳しい登攀(特に強風によるもの)が強いられ、フィックスが多用されたためである。

(2) フィックス用ロープには、6mmの高強度PE(ポリエチレン)ロープを採用した。

(3) フィックス用以外には、コンテ用には9mmナイロンロープを使用。また、バットレスの氷壁用には10mmケービングロープを用いた。

(4) ロープ固定用の支点には、スノーバー、アイスピトン、スノーアンカー(デッドマン)を用意したが、スノーアンカーは使用しなかった。これらについては特に新しい工夫はなく市販の装備を準備した。

支点とロープをつなぐ部分にカラビナを使用するか、直接支点にロープを結ぶか、意見の別れるところである。カラビナを使用すると、作業性は大きく向上する。また降雪に一旦埋没してもフィックスロープの長さの調節がきわめて簡単に行える等のメリットは大き

い。但し、荷上げ重量が大きな負担になる。今回は大人数の通過による支点の摩耗や、極地法による長期活動中の降雪による埋没からの修復作業等を考慮して、カラビナをすべての支点で使用した。

(5) ピッケル、アイスバイル、アイゼン、ハーネス等の個人装備の類は各自の趣味に任せた。特筆すべき点はない。

(6) テントについて、BC用にはとくにこだわらず多様なテントを使用した。上部テントはすべて、ダンロップのゴアテックスドームテントを使用した。設営時の操作性は大変優秀で、ゴアテックスの素材も居住環境を極めて良好に保ってくれる。バットレス上のC3のために特殊なテントを用意する必要を準備段階で検討したが、最悪の場合、かなりの労力を払ってでも斜面を削れば普通のテントが張れると判断し準備はしなかった。

(7) ヤッケ、オーバーズボン、ジャパングアテックス社のご協力を得て、唯一市販のものではなく特注品を作成した。かなり個人的な趣味も含まれるが、前開きのジャケットではなく、かぶり式で胸に大きなポケットを設けたヤッケを作成した。

上記のごとく、ジャパングアテックス社をはじめとして、装備関係についても多くの企業、個人の方々のご厚情とご協力を得た。ご協力頂いた方々は別掲させていただくが、この項でも深く謝意を表す。

### 2. 今回の登山隊で準備した装備を以下に記す。

物 品	数 量	備 考
フィックスロープ (6mm)	3600m	高強度PE (ポリエチレン) ロープ
メインロープ (9mm×45m) (ドライ)	4	ナイロン編みロープ
ケービングロープ (10mm)	2	
テープシュリング (10mm)	200m	
テープシュリング (11/16inch)	91m	
テープシュリング (1/2inch)	183m	
ロープシュリング (4mm)	4巻	
スノーバー L	100	
チューブラアイスクリュー	8	
スペクター	3	
ストック (トータルウィンター)	10組	
FLアジャスタブルボール (ブラックダイヤモンド)	5	
1インチ4ステップ (メトリウス)	5	
カラビナ	80	
雪崩ビーコン	20	行動中は全員携帯した
ハンディトランシーバ (FT-10)	10	
バッテリーケース (FBA-15)	10	
固定局トランシーバ (FT-4600H) (八重洲無線)	2	
リチウム電池 (CR-P2)	72	
発電機 (EG1200X) (ホンダ)	1	
八木アンテナ	1SET	
背負子 (エバニュー)	14	
ハードコップフェル L (モリタ)	7	
ハードコップフェル S (モリタ)	3	
フィルタ (コールマン)	2	
スーパーツェルト	2	
テント6人用	5	ダンロップ/ドーム型ゴアテックス
テント4人用	2	ダンロップ/ドーム型ゴアテックス
テント3人用	2	ダンロップ/ドーム型
オートキャンプ用テント	1	ダンロップ
アルミ盆 (コンロ敷き板)	12	
ウレタンマット	200m	
手付ポリタン 2L	5	BC用
手付ポリタン 5L	3	
BSポリタン 10L	5	
ツェルト (ゼロポイント)	4	
スーパーライトツェルト	2	
ショベルセット (ブラックダイヤモンド)	7	

## 食 料

小 林 尚 礼

物 品	数 量	備 考
ツェルト内フレーム (アライテント)	2	
ツェルトポールセット (アライテント)	2	
エマージェンシーパイプ (ダンロップ)	40	
ポラロイドカメラ	2	
ポラロイドフィルム	200枚	
フラッシュライト	20	
単3リチウム	100	
浄水器 (真清水)	7	
カートリッジ	10	
目印 (ビカビカ)	30	電池の寿命のある間点滅し続ける小さなライトを自作
パーコレータ (ミロー)	2	
ローソク L	8	
ホッカイロ	100	
竹材2m (竹ベグ用)	10本	
電気配線用具、電球	適量	
プルオーバーヤッケ	30	
オーバースボン	30	
テントシューズ	30	
帽子	30	
Big Chill Jacket (赤)	8	以下は土産を含み、中国側隊員への支給装備
オーロンTシャツ	20	
Tシャツ (ダクロンQD)	30	
長袖下着	30	
ズボン下 (薄手)	30	
ズボン下 (厚手)	30	
寝袋 (RAMSES) MHB430	13	
羽毛服 (マウンテンハードウェア) MHQ001	13	
コンパス #880	13	
環付カラビナ (ベツル)	5	
ロングスパッツ	5	
ヘッドランプ	5	
ナイフ (スーベニア)	5	
pp食器 (3個セット)	5	
靴下 (ウール)	5	
ハイキングソックス (モンベル)	5	
ホイッスル	5	
ユマール (ベツル)	5	
プラスチックブーツ (スカルパ・ベガ)	5	
ハーネス	5	
ピッケル	5	
ヘルメット	5	

### 準 備

#### (1) 作業の流れ

本登山隊の派遣は1996年の2月に入ってようやく固まりつつあった。食糧の準備は3月中に目処をつける予定であったが、食糧係の私が不慣れなことと卒業・就職などが重なって、実際に準備を始めたのは4月、作業全体の見通しがついたのは6月頃であった。

7月には交渉の難航から登山計画を断念しかけたので作業が一時中断したが、その後持ち直して、8月中旬には梱包を終えて9割方の食糧を発送することができた。

以下に作業の流れの概略を記す。

- ・ (前年まで) 市販乾燥食品のリスト作り
- ・ (4月) 各キャンプにおけるのメニュー作成
- ・ (5月前半) 市販食品の調査、乾燥食品の試食
- ・ (5月後半) 調達する食品のリスト作成 (募品・購入別)
- ・ (6月) 食糧会社へ募品依頼
- ・ (7月) 食糧の納品・保管
- ・ (7月下旬) 食糧の購入
- ・ (7月下旬) 梱包リストの作成
- ・ (8月初旬) 梱包作業
- ・ (8月中旬) 発送
- ・ (10月) 手荷物 (なま物、酒) の購入
- ・ (10/17) 先発隊出発
- ・ (11/5) 本隊出発

#### (2) 工夫した点

AACKには過去の遠征における食糧計画の事例は豊富にあるが、それを真似するだけで

は進歩がない。今回、工夫した点を以下に示す。

- ・ 上部キャンプ食を1箱=8kg/12人日に軽量化した
- ・ 各社の最新の乾燥食品を取りそろえて種類を豊富にした
- ・ 最近の他団体の食糧計画例も参考にした
- ・ 安いものは購入することで、募品の手間を省いた
- ・ 隊員間で乾燥食品の試食を行い、まずいものは避けた
- ・ 各隊員のリクエストを聞いた
- ・ 極力無駄な包装は外して、ビンに入った固形物はチャック付ビニルに入れ替えた

#### (3) 準備した食糧

本登山隊は日本と中国の合同登山隊であるので、事前の取り決めにより、BCまでの食糧 (BC食を含む) は中国側が全て準備し、BCより上部の食糧は日本側が全て準備することにした。日本側は通常の登山食だけを考えればよいので、準備の煩雑さは軽減した。

##### ①基本量

表1に食糧準備のために基本となる数量を示す。

まず、登攀隊員13人が実働26日+予備15日動くための食糧として324人日分用意した。この数字は行動計画表によっており、BCにいる隊員の食糧は含まない。更に、保険的な食糧として85人日分用意した。これらを小プラダン1箱=12人日として、34箱に梱包した。また、サプリメント食として重量15kg程度の特別食を10セット用意した。その他に行動食を2箱、調理具類を2箱用意した。





表4 上部キャンプのメニュー

①朝食パターン
1 ラーメン4
2 FD飯4 (キャパン)
3 α米3 雑炊の素4
FDもち1

②夕食パターン
1 FD飯4 (レガー)
2 FD飯4 (レガー)
3 α米500g ルウ1
FDもち1

③乾燥食1パック
豚肉or鶏肉(60g)1
牛肉(30g)1
野菜ミックス(40g)2
いちごorりんご(30g)1
鶏卵(30g)1
おかず類3
アリンorセー1
味噌汁2
スープ4
④飲み物1パック
緑茶15パック
紅茶1袋
インスタントコーヒー2パック
レジャーコーヒー5カップ
粉末ジュース1
砂糖300g
スキムミルク250g
ティーパック10
⑤味付け1パック
塩1
こしょう1
七味or一味1
醤油3
コンソメ5

ることは避けるため、国内冬山縦走の最低量程度は持つことにした。上部キャンプのメニューを表4に示す。

基本的には下部キャンプ食と同じで、水分を多量に含む食品を外し、1食分の量を2割程度減らすことで対応した。行動食はカロリーメイトを中心にして体積を減らした。

1箱(12人日)の重量は、約8kgまで減らすことができた。1人日当たり670g程度である。

⑥サプリメントボックス(特別食)

BC, C1, C2の特別食として、嗜好品やお菓子、麺類等をまとめたサプリメントボックスを用意した。ボックスの内容の一例を表5に示す。1箱を15kg程度とし、10箱用意した。この量は、登山可能期間60日と登山計画日数41日の差を埋める予備食としての意味もある。このボックスは荷上げに余裕ができたなら上げることにした。またマサコンの例にならって、内容一覧を予め全員に渡して

おき、上部からのリクエストに応じてばらして荷上げできるようにした。

⑦アルコール類

酒好きの人が多かったので、それなりの量を準備した。ビールは重いので、全員集結や登頂祝いなどのために必要最低量準備することとした。ウイスキー類を免税店で25本程度、日本酒をもらい物等で15本程度、缶ビールを現地で100本程度用意した。足りない分は前回の隊と同様に、現地のチンコー酒で補うこととした。ビール以外は極力ペットボトルに移し換えて持って行くこととし、飲む際に金属製の水筒に移し換えて少しでも旨く見えるようにした。

⑧手荷物

いたみの速いものやアルコール類は手荷物とした。つけもの、佃煮、チーズ、ハム類、好評のレトルトうなぎ等を用意した。これらは特別食として扱った。

表5 サプリメンタリーボックスの一例

Table with 5 columns: 品名, 個数, 重量(g), kcal, 補足. Contains lists of food items like ramen, instant noodles, and supplements for both breakfast and dinner.

表6 カロリー計算

Table with 4 columns: 品名, 個数/1人, 重量(g)/1人, kcal, 補足. Shows calorie counts for breakfast, lunch, dinner, and drinks, plus a total daily calculation.

(4) カロリーと栄養について

激しい運動する成人男子の必要カロリー量は3500kcal以上と言われている。下部キャンプの食事を計算した結果、表6に示すように3300kcal程度であった。これではやや足りないので、サプリメント食で補うことや、休養日やBCで努めて食べる必要があることが示唆された。

栄養についてはビタミン類が圧倒的に不足するので、個人管理でビタミン剤を服用することとした。

高所登山での必要水分量は、1日5L程度と言われている。そこで、飲み物の種類を多くして、意識して水分を採るよう心がけることにした。

(5) 乾燥食品について

登山用として各社から様々な種類のものが市販されているのに加えて、スーパーマーケットで野菜等の乾燥食品が安く手に入る。

登山用各社の製品は少しずつ味や重量、調理時間等が異なる。今回、使用した4社の製品の試食による評価は以下のようなものだった。イワタニリゾートは値段が高いが最も味がよい。キャラバンはフリーズドライ製法であり最も軽い。α食品のα米は、調理時間が最も短い。日本ジフィーは、老舗であり特注に応じてくれる。今回作ってもらったのは、いちご、りんご、豚肉、鳥肉、鶏卵の5種類であった。

今回使用した乾燥食品の一覧を表7-1、表7-2に示す。

(6) 燃料について

使い慣れているEPIを使用した。以前は特注によってブタンとプロパンの混合比を変えていたようだが、最近は遠征仕様としてプロパンガスの比率が高いものが市販されているのでそれを使用した。使用量は、調理用だけで国内山行の5割増として大缶1本を4人

表7-1 使用した乾燥食品(1)

品目	メーカー	特注	重量(g)/1袋	値段/1袋
<b>乾燥肉</b>				
牛肉	日本ジフィー		30	300
豚肉	日本ジフィー	○		
鳥肉	日本ジフィー	○		
しゃげ	キャラバン		23	650
鶏卵	日本ジフィー		30	300
<b>乾燥野菜</b>				
野菜ミックス	キャラバン		40	430
ほうれん草	日本ジフィー		12	300
玉ねぎ	日本ジフィー		8	300
ねぎ	日本ジフィー		12	300
ワカメ	(いずみや)		20	200
大根菜	(いずみや)		10	150
わけぎ	(いずみや)		10	150
とろろこんぶ	(いずみや)		10	150
かんぴょう	(いずみや)		10	150
<b>フルーツ</b>				
ドライフルーツ	日本ジフィー		30	450
いちご	日本ジフィー	○		
メロン	日本ジフィー	○		

表7-2 使用した乾燥食品(2)

必要量(袋)		155	
品目	メーカー	注分量(袋)	値段/袋
1	きんぴら	キャラバン	12 350
2	ひじき	キャラバン	12 350
3	切り干し大根	キャラバン	12 350
4	ひきわり納豆	キャラバン	12 350
5	野沢菜漬	キャラバン	12 350
6	なすの漬物	キャラバン	12 350
7	マーボウ豆腐	キャラバン	12 450
8	すき焼き	日本ジフィー	12 410
9	八方菜	日本ジフィー	12 410
10	大根おろし	宮坂	12 435
11	とうふ	宮坂	12 335
12	とろろいも	宮坂	12 470
13	油揚げ	宮坂	12 260
合計		156	
14	ちよっとぞうすい	?	40 30
15	お茶漬	永谷園	40 30

必要量(袋)		323	
品目	メーカー	注分量(袋)	値段/袋
白飯	アルファ食品	243	260
赤飯	アルファ食品	20	440
山菜おこわ	アルファ食品	20	440
五目おこわ	アルファ食品	20	440
さけおこわ	アルファ食品	20	440
合計		323	

必要量(袋)		180	
品目	メーカー	注分量(袋)	値段/袋
1	石狩ぞうすい	キャラバン	8 480
2	生が焼き肉どん	キャラバン	8 480
3	餅入り鳥雑炊	キャラバン	8 480
4	野菜雑炊	キャラバン	8 480
5	シーフードリゾット	キャラバン	8 480
6	親子どん	キャラバン	8 480
7	エビ玉雑炊	キャラバン	8 480
8	びびんば	キャラバン	8 480
9	ドライカレー	キャラバン	8 480
1	中華どん	日本ジフィー	4 420
2	ドライカレー	日本ジフィー	4 420
3	チキンライス	日本ジフィー	4 420
4	鶏飯	日本ジフィー	4 420
5	すき焼きどん	日本ジフィー	4 420
6	チャーハン	日本ジフィー	4 420
7	牛飯	日本ジフィー	4 420
8	椎茸飯	日本ジフィー	4 420
9	五目飯	日本ジフィー	4 420
10	山菜飯	日本ジフィー	4 420
11	天どん	日本ジフィー	4 420
1	ミネストローネライス	LAGAR	8 590
2	きのこリゾット	LAGAR	8 590
3	ビーフカレー	LAGAR	8 590
4	ガーリックリゾット	LAGAR	8 590
5	サーモンリゾット	LAGAR	8 590
6	ビーフストロガノフ	LAGAR	8 590
7	キムチリゾット	LAGAR	8 590
8	カレーピラフ	LAGAR	8 480
9	キムチピラフ	LAGAR	8 480
10	サーモンピラフ	LAGAR	8 480
合計		196	
11	おぞうに	LAGAR	36 480

表8 燃料関係

大カートリッジ (遠征仕様)	150個=9箱
極小カートリッジ (寒冷地用)	10個
セバレート型ヘッド	20個
小型ヘッド	7個
ランタンヘッド大	15個
ランタンヘッド小 (C3,C4用)	3個
セバレート型ヘッド用掃除針	21本
ランタンヘッド用掃除針	21本
ランタンヘッドマントル	60枚
もち焼き用網	10枚

日で使うこととし、ランタン用として大缶1本を3日で消費することとした。全部で大缶150個を用意した。表8に燃料関係で用意したものの一覧表を示す。

ヘッドは、カートリッジと燃焼部が離れているタイプを採用した。これは、燃焼部の位置が低くなるので安定性がよい。

アタック時の携帯用として、小型ヘッドと小型のカートリッジ (ガス量100g) を人数分用意した。

ランタンは下部キャンプには大型のものを、上部キャンプには小型のものを用意した。

(7) 調達について

これまでのAACKのやり方として、募品できるものは全て募品するということがあった。こうするとたしかに現金の支出は少なくてすむが、かける労力の割に節約できる金額が少ないという指摘もあった。特に今回は、食料費が総予算に占める割合は数%であるし、隊員のほとんどが京都を離れた社会人ということもあった。そこで、募品は過去に実績のある大口の品に限り、1社1万円以下のものは迷わず購入することで、余分な手間を省く方針とした。また、過去の例として募品食糧を必要以上にもらいすぎて無駄にしたことがあったので、今回は必要量に1割程度の保険量を上乘せするだけとした。この結果、梱包が

終わったときにはわずかの食糧しか残らず、後かたづけも楽であった。

現地調達は煩わしさを考えて、極力避ける方針とした。これも全体の労力と予算を考慮のことである。実際に現地調達したものは、ビールだけであった。

以上の結果、食糧と燃料において協賛いただいたメーカーは12社で、募品物品は総額百数十万円相当にのぼり、購入した物品の金額は現地調達まで含めて70万円程度となった。支出金額は過去の遠征隊に比べてやや割高であるかもしれないが、遠征未経験の京都を離れた者が中心になりながら何とか準備が間にあったのは、先輩方のアドバイスにより以上のような方針で望んだおかげだと思う。

(8) 梱包について

食糧の梱包は、過去の例にならって小ブール (47cm×28cm×28cm) に12人日分 (4人×3日) の食糧を入れることにした。表9に食糧BOXの内容一覧を示す。下部キャンプ食28箱、上部キャンプ食6箱、特別食・調理具等が14箱、合計48箱となった。

パッキング方法は、内側をビニール袋で覆って防水するとともに、ふたの裏にメモコンモにならってその箱のメニューを貼り一目で内容がわかるようにした。また、乾燥食パック、飲み物パック、味付けパックはそれぞれ一まとまりにして取り出しやすくした。

梱包作業は、予め表10のような梱包リストを作っておきさらに梱包の下準備をしておくことで、大勢の応援を一時期に集めて3日間で終わることができた。手伝ってもらった山岳部現役部員や山岳部・探検部OBの皆様には大変感謝しています。

2. 実際

全体としては、食糧計画は可もなく不可もなくというものであった。ナムナニ等これまでの山行でしばしば指摘されてきた、高所食

表9 食料BOXの内容一覧

ナンバ	種別	朝食	夕食	昼食	乾燥食	飲み物	味付け	缶詰	グロービ	重量
FR 1・2	中所食(12人日)	A・B・C	A・B・C	12食	1パック	1パック	1パック	3缶	1巻	12kg/箱
FR 3・4	"	A・B・C	B・C・D	12食	1パック	1パック	1パック	3缶	1巻	12kg/箱
FR 5・6・7	"	A・B・C	C・D・E	12食	1パック	1パック	1パック	3缶	1巻	12kg/箱
FR 8・9	"	B・C・D	B・C・D	12食	1パック	1パック	1パック	3缶	1巻	12kg/箱
FR 10・11	"	B・C・D	C・D・E	12食	1パック	1パック	1パック	3缶	1巻	12kg/箱
FR 12・13・14	"	B・C・D	D・E・A	12食	1パック	1パック	1パック	3缶	1巻	12kg/箱
FR 15・16	"	C・D・A	A・B・C	12食	1パック	1パック	1パック	3缶	1巻	12kg/箱
FR 17・18	"	C・D・A	E・A・B	12食	1パック	1パック	1パック	3缶	1巻	12kg/箱
FR 19・20・21	"	C・D・A	D・E・A	12食	1パック	1パック	1パック	3缶	1巻	12kg/箱
FR 22・23	"	D・A・B	C・D・E	12食	1パック	1パック	1パック	3缶	1巻	12kg/箱
FR 24・25	"	D・A・B	B・C・D	12食	1パック	1パック	1パック	3缶	1巻	12kg/箱
FR 26・27・28	"	D・A・B	E・A・B	12食	1パック	1パック	1パック	3缶	1巻	12kg/箱
FR 29--34	高所食(12人日)	1・2・3	1・2・3	12食	1パック	1パック	1パック	0	1巻	8kg/箱
FS 1	特別食	BC用調味料								18kg/箱
FS 2	特別食	C2用調味料								15kg/箱
FS 3--9	特別食	様々 (別表参照) コーヒードリッパはテントBOXに入ってます。								15kg/箱
FS 10	特別食	BC用生米								21kg/箱
FS 11	先発隊用	行動食 41食								9kg/箱
FS 12	本隊キャンプ用	行動食 41食								9kg/箱
FS 13	BC用調理具	圧力釜1、中華鍋1、まな板2、包丁2、お玉2、調味料								
FS 14	グロービ	グロービ24巻、単一乾電池60個								
合計: 48箱										

表10 梱包リストの一覧

食糧梱包リスト 46.728 M1

中所食 (C1, C2, 3C)	336人日 = 28箱
1box = 12人日分	
(1boxの内容)	
① H-朝食	1セット
② 昼食	12食
③ M-晩食	1セット
④ H-乾燥食	12食
⑤ H-飲み物	12パック
⑥ H-味付け	12パック
⑦ グロービ	1箱
⑧ 缶詰	3箱
⑨ 調味料	1箱
⑩ 圧力釜	1個
⑪ 中華鍋	1個
⑫ まな板	2枚
⑬ 包丁	2本
⑭ お玉	2個
⑮ 調味料	1箱
⑯ 単一乾電池	60個
⑰ グロービ	24巻

M2

中所食 (C1, C2, 3C)	336人日 = 28箱
① H-朝食	12食
② 昼食	12食
③ M-晩食	12食
④ H-乾燥食	12食
⑤ H-飲み物	12パック
⑥ H-味付け	12パック
⑦ グロービ	1箱
⑧ 缶詰	3箱
⑨ 調味料	1箱
⑩ 圧力釜	1個
⑪ 中華鍋	1個
⑫ まな板	2枚
⑬ 包丁	2本
⑭ お玉	2個
⑮ 調味料	1箱
⑯ 単一乾電池	60個
⑰ グロービ	24巻

糧の量・質に対する中国側の不満も余り聞かなかった。一つ予想外だったのは砂糖の消費量であるが、追加荷上げすることで十分対処することができた。

### (1) 輸送

食糧は8月中旬に日本から発送し、10月下旬に雲南省昆明で受け取ったわけだが、箱の崩壊や紛失はなく、中身の変質もほとんどなかった。マヨネーズやソース、ケチャップ類が心配だったが、特に変化はなかった。ただし、これらは手荷物にした方が安全であろう。

### (2) キャラバン

本隊用のキャラバン行動食は、先発隊が誤って運んでしまったため現地調達でまかされた。これは輸送計画のミスであった。

先発隊においては、雨崩村で5日間停滞した際に連絡管や公安官の往復のためにキャラバン行動食の予想外の消費があったため、登山活動用の行動食を消費した。

### (3) BC

コックのツェンさんの料理はなかなかおいしかった。朝はラーメンとおかゆ、夜はベーコンと野菜の炒めもの等のおかず2品とスープに白米が基本的なメニューであった。それが洗面器に無造作に盛られて出てくる。始めの頃は食堂テントもなく皆地べたに座って食べていた。なかなか豪快な食事であったが、それがBCの雰囲気合っていたように思う。品数の限られた油料理であるため単調さは否めなかったが、味付けが日本人好みなのだ。特に米が決してまずくなく、サプリメントの生米はほとんど消費されなかった。時折、鶏や羊を調達してくれたり、おやつに団子やあられを作ってくれたり皆を楽ませてもらったこともあった。雲南の米線(ミーシェン)という米で作った麺は、シコシコして歯ごたえがよく日本のインスタントラーメンなどより

はるかに旨かった。雲南風ゆばがふんだんに料理に使われているのも、京都から来た我々にとっては面白かった。私などは彼の料理をたらふく食うだけで十分満足であった。

BC~C1間で使う行動食を十分に用意していなかったために、下部キャンプ用の食糧BOXを開けて行動食だけを取り出して利用していた。これは、中国人やシェルパは日本の行動食を食べないと考えて、用意しなかったためである。実際には、彼らは我々の用意した行動食を文句を言わずに利用していた。

サプリメント食は種類・量とも十分であったと思うが、中国食が十分食べられたためにそれ程消費されなかった。特に利用されたのは、定番のレトルトうなぎ・フルーツ缶、酒のつまみとしてのハム・チーズ、中国食が嫌になったときのカップラーメン、レモン汁に蜂蜜を溶かしたものや抹茶、スパゲティー・お好み焼きなどであった。レギュラーコーヒーは日常のお茶感覚で大量に利用された。これは全く個人的好みによるが、私はこれらのインスタント食品よりもコックのツェンさんの心のこもった料理の方がおいしく感じられ、サプリメント食は余り口にできなかった。そのために食糧係としてはややサービス不足になったのかもしれない。報道の読売の方から差入れを頂くことがよくあったが、彼らの方がおいしいものを持っていることが多かったように思う。睦好隊員が手巻き寿司を作ってお返ししていた。

### (4) 下部キャンプ

乾燥食品中心になるのは仕方ないので、種類を豊富にして、試食でひどくまずいものは避けるという配慮はしたのだが、現場では特に好評も不評もあまりなかった。BCに下りてから「小林君の用意したまずい食糧が・・・」などと公に発言されてカチンときたこともあったが、もう少し改良の余地はあるのかも知れない。

量については、朝食でもラーメンに餅を入れるなど比較的多めに用意したのだが、皆しっかり食べていた。過去の慣例にならって基本食として缶詰やレトルトを入れたのだが、重いし特に必要ではないので隊の方針に合わせてよいと思う。

砂糖は国内の冬山と同程度の量(40g/1人日)を用意したのだが、不足したため追加荷上げた。高所では水分を意識して多くとるので、お茶に入れる砂糖の量も多くなるのだろう。12人日で1kg程度は必要であると思われる。計画の段階で先輩に聞いておくべきだった。また、飲み物ではコーヒーをたくさん飲みたいという要望がでたので、インスタントコーヒーを追加荷上げた。

C2への荷上げの際、嗜好品と思って上げたサプリメントボックスが調味料だったので、皆がっかりしたことがあった。食糧係が全ての荷上げは管理できないので、特別なものだけでも箱の表面に内容を書いておけば良かった。C2で食べたホットケーキが印象に残っている。

### (5) C3

C3に滞在したのは3日間だけだったので、詳しい評価は得られなかった。以下に若干気づいた点を記す。

全体的な量を下部キャンプよりも2割程度少なくしたわけだが(例えばラーメン+餅をラーメンのみにした)、問題はなかったように思う。やはり、5500mくらいになると多少食欲が落ちるようだ。あまり贅沢も求めなくなる。

砂糖は下部キャンプよりも更に少なくしていた(25g/1人日)ので追加荷上げた。

### (6) サプリメンタリーボックス

過去の例にならって全部で10箱用意したわけだが、量は十分過ぎるものであった。「1. 準備」でも述べたが、登山可能期間60日と登

山計画日数41日の差を埋めるためには、基本食を増やすよりもサプリメントボックスを少し多めに用意する方が無駄が少ないと思われる。

### (7) アルコール類

ウイスキーは早い時期に無くなってしまい、日本酒もやがて底をついた。どうしても飲みたい人は中国側のチンコー酒をちびりちびりやっていたが、それもやがて無くなったようだった。読売さんのテントに行くのご馳走してもらえるので通っていた人もいた。ウイスキーは普段飲めないような高級酒を持っていたので、特に寿命が短かったのだろう。隊員用はこんなものとして、常時BCにいる幹部達のために別に確保しておくべきだったかも知れない。

C1, C2には日本酒を数本上げただけだった。高所経験の多い隊員は結構飲んでいたが、若い隊員はほとんど飲まなかったのでその程度で足りたのだろう。

### (8) 乾燥食品

とにかく種類を多くしたので、多少は楽しめたと思う。特注したいちごとりんごはそれなりにおいしかったが、全BOXに入れたのは多すぎであった。キャラバンとLAGARについてはレポートを書いたので付録1・2を参照されたい。

### (9) EPI

キャラバン中に使うことは想定していなかったが、先発隊がランタン用として5本以上消費した。BC用は20本程度しか用意していなかったが、ランタン用やサプリメントの調理等で結構消費することがわかった。吉村隊員が気を利かせて10本程度余分に持ってきていたのでBC用として使わせてもらったが、それでも不足した。途中からEPI節約令を出して対処した。無ければならぬでどうにかすると

も言える。

C1以上での消費量として、大缶が4人日というのは妥当なものであった。ランタン用は、はじめ特に用意する必要がないと考えていたが、実際には今回用意した3日で1缶でも不足気味であった。ただし、これもあればあるだけ使ってしまうという性質のものである。セバレートタイプのヘッドは使いやすかった。

その他の点は、協賛メーカーに報告したレポートにまとめたので付録3を参照されたい。

### (10) 余った食糧とゴミの処理について

今回の登山は本隊が入山してから18日で終了したので、大量の食糧が余ってしまった。余分が多すぎないように準備したつもりだが、どの程度うまくできたのかを知る術はない。余った食糧は、中国側にあげたり来年行う登山隊に寄付したりして処分した。通訳の馮氏などは、お世話になった人にあげるのだかいつて何箱分も梱包していた。とにかくほとんど無駄にはしなかったと思う。

C1以上で出たゴミとEPIの缶はシェルパがほとんどBCまで下ろしてくれた。彼らには山をゴミで汚してはならないというルール（信仰）があるようだ。また、登山中にゴミを燃やしてはならないというルールもあるようで、全てまとめて最終日に焼却した。登山中に燃やしたら、山の神が怒るといふ言い方をしていた。夏村に何も残さないようにと思っくまなく掃除はしたが、生ゴミも多く燃え切らないものが大量にあった。穴を掘って埋める時間がなかったのが悔やまれる。ビンや缶などは村人が持っていないように、割ったり潰したりして極力体積を減らすのみにとどまった。全て持ち帰る登山隊もあると聞き、処理方法を事前に考えておくべきだった。

### 3. 反省・今後へ向けて

食糧準備のアドバイスを受けている際に

「食糧係はどうせ文句しか言われない」ということを聞いた。その意味は、「だから10回に1回くらいは誰もがうなる切り札を用意しろ」ということであるらしい。マサコンでは「当たりのトマトジュース」であったし、コンロンでは「レトルトうなぎと蟹味噌缶」であったらしい。今回は、これが切り札という一品を用意する余裕がなかった。過去の隊で良かったとされるものは一通り採用したつもりだったが、今一つパツとしない食糧計画になっていたかも知れない。

それにしても予想外の不満の声があった。「まぜい」、「こんなもの何に使うんだ」から「これまでの隊で最低の食糧係」というものまであった。特に、BCでの食事に副食を持って行くとか、休息日に何かおいしいものを作るといったサービス面が足りないという指摘を何度か受けた。また、BCの食糧を整理することに気づかなかったこともある。今考えるとこれには幾つか原因があると思う。まず私の先入観として、食糧係の仕事は国内山行と同じように準備・梱包作業と、現地での荷上げ管理がメインと考えていたことがある。また、遠征初心者としては登攀に専念して休日は体を休めるだけで手一杯で、おいしいものを作って皆を喜ばせる余裕がなかったこともある。さらに、個人的に大抵のものはおいしく食べられる方で、食事以外に何かを作ろうとは考えないたちであることもある。また、つい数年前まで現役として貧乏山行をやっていたものと、すでに現役を離れて10年以上たつ人とのギャップもあるかも知れない。マサコンの食糧係は「食糧係は決して炊事係ではない。遠征中の食生活を豊かにするのは、各隊員の食事に対する意欲である」と書いている。ただし、せつかく一所懸命準備したものが評価されないのは残念なので、もう少し全体のバランスを考える余裕があれば良かったと今になっては思う。

その他、既に触れたので繰り返さないが以

下のことは今後の参考になると思う。乾燥食品の種類、調達方法、軽量化、予備の考え方、砂糖使用量、EPI使用量、荷上げの行動食、ゴミ処理。

最後に協賛していただいたメーカーの名称をあげて食糧係の報告を終わりとします。

#### ○協賛メーカー

アルファ食品株式会社  
イワタニリゾート株式会社  
江崎グリコ株式会社  
大塚製薬株式会社  
株式会社キャラバン  
木村食品工業株式会社  
協和発酵工業株式会社  
日清食品株式会社  
日本クリニック株式会社  
日本ジフィー食品株式会社  
明治製菓株式会社  
ユニバーサルトレーディング株式会社  
(12社、50音順)  
ご援助いただきありがとうございました。

#### ●注

マサコン：京都大学ブータンヒマラヤ学術登山隊1985を指す  
コンロン：京都大学コンロン学術登山隊1988を指す  
ナムナニ：日中友好ナムナニ峰合同登山隊1985を指す

#### ●付録1

「キャラバンマウンテンエイド」  
・鮭の切り身：戻りが比較的悪かった。所定の時間では戻りきらずに固い場合が多かった。  
・野菜ミックス：高所食として常用した。戻りは問題ない。乾燥食臭さがかなり軽減されていると思うが、敏感な人は敬遠していた。

・野沢菜漬け、茄子の漬け物：高所では新鮮な味でおいしい。  
・キムチ：期待していた歯ごたえが無く、味も今一つ。  
・きんぴら：甘すぎる。  
・八宝菜：他社の製品よりもおいしい。  
・ほうれん草の煮ひたし：期待していた歯ごたえが無いが、味はまあまあ。  
・ひじき：なかなかいける。  
・ご飯類：調理法通りに作ることで国内と変わらないおいしさで食べることができた。種類が豊富で楽しめる。

総合的には、味と価格のバランスの面で他社の乾燥食品よりも良いという意見が多かったようです。

#### ●付録2

「イワタニリゾート-LAGER」

お米を基本にしたリゾット類、ピラフ類は調理法通りに作ることで国内と変わらないおいしさで食べることができました。

もちの入った「おぞうに」と「チリビーンズ&もち」ですが、どちらももちの戻りが悪く、調理法の倍の時間をかけてもしんの残っているものがあり、今一つ好評ではありませんでした。

総合的には、種類が豊富であり、他社の乾燥食品よりもおいしいという意見が多かったようです。ただし、購入するとなると比較的値段が高いことが気にかかるかと思われれます。

#### ●付録3

「EPIストーブ使用レポート」

今回の登山では、テントを建てて炊事・寝泊まりをしたのはC3(5500m)が最高点でした。その範囲で報告させていただきます。

##### 1. 燃焼状態について

(1)ストーブ(APSA-II)、カートリッジ(420EXS)BC(3470m)では、問題なく使えました。

## 輸送・梱包

高井正成

表1

サイズ	寸法 (cm)	重量 (g)
S	47×27×28.3	705
M	47×27×43	1050
L	48.5×29.5×88.6	1610

遠征隊で使用されてきたプラスチック製ダンボール（通称プラダン）に比べると多少強度が弱いように思えたが、今回はこのプラパールを採用した。

プラパールの基本的なシステムとしては、L箱にはS箱が3個おさまるようになっている。荷物をまとめて個数を減らすことができるから便利であろうと当初は考えた。しかし実際にS箱に10kg程度の荷物を詰めてL箱に3個入れると、L箱の重さが30kgを越えてしまうことになり、箱が重すぎて一人では運びにくいことが判明した。したがって荷物を詰めたS箱はL箱に詰めたりせず、L箱には大型でかさばる物か、軽すぎてたくさん詰めた方がよい衣類などを詰めることになった。

プラパールに対する率直な感想としては、L箱は大きすぎてあまり使い勝手がよくない。やはり手を伸ばしたときに箱の両端に手が掛からないと、ちょっとした移動の際も一人では持ちきれず、非常に面倒である。国内の運送業者も、このサイズの箱は一人で運べないと言って不平をもらしていた。

これまでのAACKの遠征隊で使用したプラダンでは、小型の箱を中型の箱に2個詰められるように設計されており、この場合は重量に気を使えば一人でも持ち上げるの

動点火装置の方が便利だと思える程度)

C 2 (5300m)とC 3 (5500m)では、点火できないことの方が多かったです。何度もカチッカチッやっているとそのうち点火しますが、しびれが切れてライターを取り出すこともありました。

## 3. その他

## (1)プリッカー

お世話になることはありませんでした。

## (2)マントル

約1カ月の登山期間で、ランタン1台につき1～2回取り替えることができました。

## (3)餅焼きアミ

登山ストーブ用として市販されているものを使用したが、特に問題ありませんでした。

C 1 (4450m)、C 2 (5300m)、C 3 (5500m)では、新品（満タン）のカートリッジを接続すると、燃焼が安定せず火力を強くすると消えてしまいました。弱い火力で5～10分程度使っていると、段々安定してきて全開でも使用できました。

このような状況でしたので空気調節リングを使用する機会はありませんでした。（空気調節リングの回転が固く回すのに手間がかかるため、燃焼の途中で調節しようという気は起こりませんでした。）

## (2)マイクロスーパーストーブ・M100カートリッジ

C 3 (5500m)以上の行動では非常用として携帯していたのですが、使用する機会は残念ながらありませんでした。

この2つのセットは、高所非常用として携帯するのに重さ・大きさともまずまずのものでした。

欲を言えば、ストーブを箱に入れた際の体積がもう少し小さい方がよいことと、M100カートリッジの遠征仕様を市販されたらよいということがありました。

## (3)ランタン

B C (3470m)、C 1 (4450m)、C 2 (5300m)ではマイクロスーパーランタンオートIIを、C 3 (5500m)ではランタンオートLFA-IIを使用しました。

ランタンは基本的に、燃料節約のため全開にすることはありませんので、安定してからの燃焼状態はC 3 (5500m)まで問題ありませんでした。

ただしC 1 (4450m)、C 2 (5300m)、C 3 (5500m)では、点火してもしばらくは薄暗い状態が続き、数分経つと突然ポッと明るくなって燃焼が安定するという状況でした。

## 2. 自動点火装置について

B C (3470m)では、問題なく使えました。

C 1 (4450m)では、時々点火しないことがありましたが差し支えない程度でした。（自

## はじめに

今回われわれが挑んだ梅里雪山は、これまで2回の本隊と2回の偵察隊が派遣された地域であり、アプローチに関する情報や地域住民に関する状況などは十分に把握されているはずであった。しかし実際には、これまでの登山隊（特に遭難事故を引き起こした第2次梅里雪山隊）の経緯に基づく地域住民との感情的なこじれや、ここ数年間の中国の開放政策の伸展にともなうインフレの進行などによる様々な状況の変化により、遠征隊の荷物の輸送における困難さはますます厳しくなっていたと言える。

以下に今回の遠征隊において荷物の梱包と輸送の際に生じた問題点を列挙し、改善すべき対策をいくつか提示したい。今後のAACKの遠征隊への参考となれば幸いである。

## 梱包

今回の隊の梱包においては、登山用品店で市販されているプラパール（プラスチック製ダンボール）と、一般の日曜大工店で市販されているプラスチックコンテナを使用した。これにガムテープで封をして、市販のPPバンドをかけて持ちやすいようにした。この2種類に梱包できないものは、大型のキャンバスバッグに入れるか、そのままの荷姿でダンボールなどで補強するなどして梱包した。

## (1) プラパール

プラパールは登山用品店であるカモシカスポーツが製作・販売しているオリジナル製品で、S・M・Lの三つのサイズがある（表1）。これまで京都大学学士山岳会（AACK）の

にもそれほど問題は生じなかった。今回のプラパールとの使い心地を比較した限りでは、AACK型（大型の箱に小型の箱を二つ詰める方式）の方が便利であると思う。

また、プラパールM箱は両手で持ててちょうどよい大きさなのだが、ピッケルやテントのポールは長すぎて入らなかった。もうすこし長い方がいいとは思いますが、長くすれば長くしたでいろいろと問題が生じるであろうし、どのくらい長くするかについての具体的な提案があるわけでもない。結局使用する方が工夫するしかないであろう。なお、プラダンに比べて多少弱いのではないかとと思われる強度であるが、遠征隊が終了するまで致命的に壊れた箱はあまりなかったのも、今のままで十分であろう。

## (2) プラスチックコンテナ

プラスチックコンテナ（通称プラコン）に関しては、今回は2種類の物を使用した。ひとつはこれまでどおり積水化学工業株式会社のプラコン、もうひとつは最近日曜大工店などで普及し始めたポリプロピレン製の蓋付き横長ボックスである。前者はこれまでの遠征で何度も使っており、かなりの実績があった。一方後者は、筆者が日曜大工店でつけたもので、基本的に車のトランクに収納し家族キャンプに使用する目的で作られたものである。蓋の上に乗っても大丈夫というふれこみだったので、今回新たに採用してみることにした。

これまで使ってきたプラコンの長所と短所であるが、こわれやすい物を入れたり、ふたに穴をあけてカギを付けられるようにすれば個人の貴重品入れに使用することができるので、これまでのAACKの遠征隊では必ず使用されてきた。しかしこのプラコンは深さがあるって容積は大きいのだが、長さが足りないのでピッケルが入らないことや、ポーターや使役獣（ヤク・ウシ・ウマなど）が背負いに

くいなどの欠点があった。

一方、今回採用した横長の蓋付きボックスであるが、日本でパッキングしていた時の隊員の感想は、プラコンに比べて強度が弱そうなので（材質がやや撓む傾向がある）遠征隊が終了するまでに壊れてしまうのではないかとという否定的なものであった。しかし同時に、ピッケルやストックなど長めの物が入れるるので便利だという感想もあった。

実際に今回使用してみた結果、遠征隊が終了するまでに壊れた箱はひとつもなく、強度的には十分に合格であった。併用した従来のプラコンと比べてこれといった欠点は見つからなかった。簡単なフック状のロック機構が付いているので、PPバンドをしていなくても蓋が勝手に開かないという点は好評であった。また、キャラバンで馬に乗せて運ぶ際にも、これまでのプラコンよりも背中にくくりつけやすいようであった。最初に意図したとおりの使い勝手であったと思われる。

今後はこれまでのプラコンとこの横長ボックスを用途によって使い分けるのがよいだろう。プラコンには、これまでどおり比較的立方体に近いかさばるもの（FAX機や発電器など）を詰め、横長ボックスには細長いピッケルストック類などを入れたらよいと思われる。

## (3) キャンバスバッグ

キャンバスバッグには背負い子など「軽量だがかさばる物」を主に詰めた。これまでの遠征隊では、ピッケルやストックなど、プラコンに入らない物はこのキャンバスバッグに全て詰め込んでしまうことにしていた。しかし、これまでAACKの遠征隊で使用してきたキャンバスバッグはプラパールのL箱と同じで、両手を広げて一人では抱えきれないことが多いので、あまり使い勝手がよくない。一応、両側に手で持つところが付いているのだが、キャンバスバッグ自体のサイズが大き

くて、ここに両手をかけても一人で運ぶのは大変である。この欠点を改善するにはキャンバスバッグのサイズを小さくするしかないのだが、そもそもこのキャンバスバッグのデザインが使いづらいように思われる。

そこで新しい提案だが、キャンバスバッグのかわりに米軍などが使用している「大型のスタッフバッグ」を使用するのはどうだろうか？市販されているようなナイロン製の物ではなく、頑丈な布製の物などを使用すれば、簡単にカギをかけることができる上に持ち運びにも便利だと思う。サイズとしては、テントのポールやピッケル・ストックなどが入ればいいのであるから、あまり大きくせず一人で肩にかけられる程度にすればよいであろう。今後検討する余地があるだろう。

## 3. パッキング

### (1) ナンバリング

パッキングにおける方式は従来とは何らかわりはないが、今回は箱のナンバリングにおいて多少の工夫を試みた。

基本的に、全ての荷物をF (food, 食料)、E (equipment, 装備)、M (medicine, 医療)、J (Japanese member, 隊員個人装備) の4種類に分類し、これらを更にいくつかに分けることにした(表2)。F (食料) はFR (ration, レーション)、FS (supplimentary, サプリメンタリー)、FG (gass, EPIガスボンベ) の3種類、E (装備) はEC (climbing, 登攀装備)、ET (tent, 幕営用具)、EX (exception, 装備その他) の3種類、M (医療) はMDのみ、J (個人装備) は各隊員にJT (高井) やJS (斎藤) などと記号を割り振ってナンバリングした。

この方式だと、どの箱にどんな物が入っているか現場ですぐに判断できると考えた。しかし実際には、梱包の際に装備関係の準備が遅れていたために、きちんと中身を分類せずにパッキングした箱が多く、EX (装備その

表2

分類	記号	内容
食料	FR	レーション
	FS	サプリメンタリー
	FG	ガスカートリッジ
装備	EC	登攀用具
	ET	幕営用具
	EX	その他
医療 個人装備	MD	医療
	JS	斎藤惇生個人装備
	JM	松林公蔵個人装備
	JF	福崎賢治個人装備
	JK	倉智清治個人装備
	JH	人見五郎個人装備
	JY	吉村千春個人装備
	JN	中山茂樹個人装備
	JT	高井正成個人装備
	JU	睦好正治個人装備
JA	中村真個人装備	
JB	小林尚礼個人装備	

他) ナンバーばかりが増えてしまい(合計41個)、最初に意図した通りにはならなかったのは残念であった。特に登攀装備をもっとEC箱としてパッキングするべきであったのだが、いかんせん装備係の方が全く混乱した状況であったためにこういう結果になった。何事も最初の準備が肝心である。

また今回新たに採用した方式として、小型のラベルプリンターを用いて図1のようなラ



図1



ベルを打ち出し、プラパールの場合は4つの側面に、プラコンの場合は4側面と上面の計5カ所に張り付けた。これまでの隊では、マジックでナンバーを書き殴ることが多く、ひどいときには箱の表面に内容物を全て書き出したりしていた。しかしこういったやり方をしていると、キャラバンや登攀活動が進むに伴って箱の中身が変わると、再び何度でもマジックで書き直すことになり、一体どの「マジック」を信じたらいいのかわからなくなってしまふ。登攀活動が終わって帰路のキャラバンになると、この傾向はますますひどくなり最後には殴り書きだらけという箱が続出していた。今回はこういった「殴り書きの上塗り状態」を多少なりとも削減できたように思う。

また中身を箱の表面に書き出すと、その箱を扱う人が中身を把握してしまいいろいろと面倒が起こる可能性が高い。別に密輸品を運んでいるわけではないのだが、税関で開封されて中身を改められると、いろいろと問題が生じることが多い。また今回のように漢字文化圏では、日本語が読めることもあるのでキャラバン中に「盗難事故」が生じる確率も高くなる。中身の書き出しとナンバー等の書き殴りは、今後一切やめるべきである。

大事なことは、中に何を詰めたのかはしっかりと把握し、全隊員が利用できるパッキングリストを作製することである。簡単で誰にでもできることではあるが、実際には中に何を詰めたのかがかきちゃんと把握できていなかったことを各隊員が認識してもらいたい。

## (2) 手荷物と帰路の荷物

手荷物は全てAD (addition, 追加手荷物) ナンバーをふり、帰路の荷物に関しては、BCでの梱包時にナンバーをリセットして、医療品以外はRE (return, 帰路荷物) ナンバーを付けた。従って帰路の荷物のナンバーは全てREとMDに統一されたので、例のナンバー

の二重書きによる混乱は生じなかった。ただし、中国側に帰路の荷物の船便での発送を依頼したのだが、日本に到着したのは半年後であった。どうしてここまで遅延したのか今持って理解しがたい。いくつかレンタルで借りていた製品などは、遅延料を請求されたために手荷物で持って帰った方がはるかに安上がりであった。

## 輸送

輸送は船便を2回発送し、残りは先発隊と本隊の手荷物とした。

### (1) 船便

今回の梅里雪山合同登山隊では、登山隊の正式な許可がおろるのが遅く、今年本当に登山隊が出るのかどうか船便発送の期限ぎりぎりまでわからなかったため、パッキングの際に大きな問題が生じた。船便の発送は中国に着いてから陸送にかかる時間も見込まねばならないので、最初は8月前半に船会社に引き渡す予定でいた。しかし登山隊の正式な決定が7月末まではっきりしなかったため、最悪の場合今年成立しない可能性も考えて、各係では様々な登山物資の注文等を控えていた。特に装備関係でこの遅れが大きく響き、8月のパッキング時にそろっていない物が多かった。このため、船便を2回出すという不手際になり、さらには手荷物の異常なまでの増大へとつながった。この点については後述するが、8月の第1週に京都大学山岳部の現役部員らの協力を得て、無事に船便第1便分のパッキングを終了し、発送することができた。ここに、お礼を申し上げる。

第1便の総重量は2300kg、荷物の個数は全部で116個になった。平均の重さは19.8kgとなった。8月24日に神戸港を出航し、予定どおり8月30日に天津新港に到着した。これらの荷物のうち、EPIガスカートリッジについては危険品扱いなので、危険品容器検査証と成分表が必要となる。また、危険品を詰め

る船が週2便しかないのので、一般の船便よりも多少便数が少ないことがわかった。今後の参考としてもらいたい。

船荷の第2便に関しては、荷物の量次第では発送せずに手荷物で持って行くことも検討したが、個人装備を第1便で送れなかった隊員が多く、また航空機には積むことのできない医療用の酸素ボンベを送ることになったので、やや時間的に不安はあったが発送することにした。本来はこういった装備類は全て第1便で発送すべきであったのだが、すでに述べた理由により第1便のパッキングに間に合わず、船便を再度出すことになった。2回の船便の受け取りのために中国側にたいへんな労力をかけることになったことをお詫びしたい。

第2便の総重量は350kg、総計25個になった。一個平均15.2kgである。9月15日に神戸港を出港し、9月19日に天津新港に到着した。こういった船便の輸出入に関してはKSA (京都 SHIPPING エージェンシー) 株式会社に全て依頼した。関係者の方々にこの場を借りて感謝いたします。

### (2) 手荷物

船便の方は、2回にわたって発送することにはなったものの、ほとんど問題は生じなかったが、本隊と先発隊の手荷物に関しては信じがたい状況になった。まず先発隊であるが、出発直前になって中国側からプラパールを輸送用に使用したいので150個ほど持ってきて欲しいという連絡が入り、急遽先発隊が手荷物で持参することになった。この総量が130kgである。これ以外に隊員の個人装備などがあり、結局総量416kgとなった。先発隊3人の手荷物の量としては信じられないくらい多い。

更に驚くべきは本隊の手荷物の量である。全部で124個、1800kgもあった！このうち37個約600kgについては報道機関として同行した読売新聞の機材であるから仕方がないとし

て、残りの1200kgは登山隊の物である。このあまりにも常軌を逸した手荷物の内容を検討してみると、87個の荷物のうち登山用品、気象観測器具、医療器具など登山隊としてどうしても必要な物は56箱にすぎず、残りは「土産物」の箱が31個456kgにもものぼった。

一体全体、手荷物で500kg近くにもなる「土産」を運ぶ必要がどこにあるのだろうか？輸送係は必要であると隊で決定した荷物を、手際よくパッキングして無事にBCまで運ばせることが使命であるが、この本隊の異常なまでの「土産」の量には疑問を感じざるを得なかった。もしこのようなまでの量の土産を持参しなければ登攀活動が円満にいかないような山ならば、それはもはやスポーツとしての山登りとは言えないのではなからうか？

前回遭難した第2次梅里雪山登山隊も、同様の「莫大な」量の荷物を輸送していたことを思い出していただきたい。彼らも同じように莫大な量の荷物輸送に苦しみ、結局キャラバンで全てを運ぶことが出来ずに、昆明や途中の部落に大量の物資を積み残さざるをえなかった。これが地域住民との様々なトラブルを産み、さらには今回の隊にも悪影響を与えたことを忘れてはならない。我々は、前回の隊の教訓を何も生かしていなかったのではないだろうか？

本来、輸送係がこのような荷物の中身に関してまで批判を加えるべきではないのはわかっている。しかし、この莫大な量の手荷物を紛失することなく無事にBCまで輸送するために、我々日本側だけでなく中国側のスタッフにまで多大な労力を強いたことは事実である。不必要な「土産物」のために、無駄な労力をさくのは止めるべきである。

「中国への遠征隊は山のようにお土産を持って行かねばならない」という前世紀の遺物のような発想は、もはや捨て去るべきであろう。そうでなければ、我々はこの山を永遠にのぼることは出来ないに違いない。

その他

全体を通してみた輸送・梱包係の反省としては、ガムテープの量がやや不足していたと思われる。帰路のキャラバン用のパッキング時にガムテープが足りなくなり、隊員に迷惑をかけた。「中国式」のあればあるだけ使うという発想も困りものだが、帰路用の梱包具として特別に確保しておくべきだった。昆明でも粘着テープの類は購入できるのであるが、やはり、日本製の布ガムテープが一番使いやすい。昆明に多少残しておくべきだったであろう。今後の教訓としたい。

隊員行動記録

睦好正治

先発隊 隊員別行動一覧 (11月2日~11月12日)

	2-Nov	3-Nov	4-Nov	5-Nov	6-Nov
人見	BC→デポ	BC→C1	BC→C1	BC滞在	BC→C1
中山	BC→デポ	BC→C1	BC→C1	BC滞在	BC→C1
小林	BC→デポ	BC→C1	BC→C1	BC滞在	BC→C1

	7-Nov	8-Nov	9-Nov	10-Nov	11-Nov
人見	BC→C1	BC→C1	BC滞在	BC滞在	BC滞在
中山	BC→C1	BC→C1	BC滞在	BC→C1	C1→C2
小林	BC→C1	BC→C1	BC滞在	BC→C1	C1→C2

	12-Nov
人見	BC滞在
中山	BC←C1→C2
小林	BC←C1→C2

本隊 隊員別行動一覧 (11月19日~12月3日)

	19-Nov	20-Nov	21-Nov	22-Nov	23-Nov
人見	BC→C1	BC滞在	BC→C1	C1→C2	C1滞在
中山	BC→C1	C1→C2	C2→R工作	C2→R工作	C2滞在
小林	BC→C1	C1→C2	C2→R工作	C2→R工作	C2滞在
高井	BC→C1	C1→C2	C1滞在	C1→C2	C2滞在
吉村	BC→C1	C1→C2	C1滞在	C1→C2	C1滞在
睦好	BC→C1	BC→デポ	BC→デポ	BC→C1	C1→C2
中村	BC→C1	BC→デポ	BC→デポ	BC滞在	BC→C1
斎藤	BC→デポ	BC滞在	BC滞在	BC滞在	BC滞在
松林	BC→デポ	BC→デポ	BC滞在	BC→C1	BC→C1
福崎	BC→デポ	BC→デポ	BC滞在	BC→C1	BC→C1
倉智	BC滞在	BC滞在	BC滞在	BC滞在	BC滞在
袁	BC滞在	BC滞在	BC→C1	C1→C2	BC←C1
木	BC滞在	BC滞在	BC→C1	C1→C2	BC←C1
シエルバ	BC滞在	BC→C1→C2	デポ←C1→C2	デポ←C1→C2	デポ←C1
シエルバ	BC滞在	BC→C1→C2	デポ←C1→C2	デポ←C1→C2	デポ←C1

# 隊員名簿

	24-Nov	25-Nov	26-Nov	27-Nov	28-Nov
人見	C1滞在	C1▷R工作	C1滞在	C1▷R工作	C1▷C2
中山	C2滞在	C2▷R工作	C2滞在	R工作C2	C2▷R工作
小林	C2滞在	C2▷R工作	C2滞在	R工作C2	C2▷R工作
高井	C2滞在	C2▷R工作	C2滞在	R工作C2	C2▷R工作
吉村	C1滞在	C1▷R工作	C1滞在	C1▷R工作	C1→C2
睦好	C1滞在	C1▷R工作	C1滞在	R工作C1▷R工作	C1→C2
中村	C1滞在	C1▷R工作	C1滞在	R工作C1▷R工作	C1▷C2
斎藤	BC滞在	BC滞在	BC滞在	BC滞在	BC滞在
松林	C1滞在	C1▷R工作	C1滞在	C1▷R工作	C1滞在
福崎	BC滞在	BC滞在	BC滞在	BC滞在	BC滞在
倉智	BC滞在	BC滞在	BC滞在	BC滞在	BC滞在
袁	BC滞在	BC滞在	BC滞在	BC滞在	BC→C1
木	BC滞在	BC滞在	BC滞在	BC滞在	BC→C1
シェルバ	BC←C1	BC滞在	BC滞在	BC滞在	BC→C1
シェルバ	BC←C1	BC滞在	BC滞在	BC滞在	BC→C1

	29-Nov	30-Nov	1-Dec	2-Dec	3-Dec
人見	C1滞在	C1→C2	C2滞在	C2▷Y山口偵察	BC←C2
中山	C2滞在	C2→C3▷R工作	C3▷R工作	C3▷R工作	BC←C3
小林	C2▷R工作	C2滞在	C2→C3▷R工作	C3▷R工作	BC←C3
高井	C2滞在	C2→C3▷R工作	C3▷R工作	C3▷R工作	BC←C3
吉村	C2▷R工作	C2滞在	C2→C3▷R工作	C3▷R工作	BC←C3
睦好	C2▷R工作	C2▷C3	C2滞在	C2▷Y山口偵察	BC←C2
中村	C1▷C2	C1→C2	C2▷C3	C2滞在	BC←C2
斎藤	BC滞在	BC滞在	BC滞在	BC滞在	BC滞在
松林	C1滞在	C1滞在	C1滞在	C1滞在	BC←C1
福崎	C1▷C2	BC滞在	BC滞在	BC滞在	BC滞在
倉智	BC滞在	BC滞在	BC滞在	BC滞在	BC滞在
袁	C1▷C2	C1→C2	C2▷C3	C2滞在	BC←C2
木	C1▷C2	C1→C2	C2滞在	C2滞在	BC←C2
シェルバ	BC←C1	BC→C1▷C2	BC←C1	BC滞在	BC▷C2
シェルバ	C1→C2	C2▷C3	BC←C2▷C3	BC→C2	BC←C2

## 〔日本側〕

総隊長 斎藤 惇 生  
 統括隊長 松林 公 蔵  
 秘書長 倉智 清 司  
 気象隊長 福崎 賢 治  
 登攀隊長 人見 五 郎  
 登攀隊員 吉村 千 春  
 高井 正 成  
 中山 茂 樹  
 睦好 正 治  
 小林 尚 礼  
 中村 真  
 シェルバ ナワン・ドルジ  
 パサン・ツェリン  
 ゲンドゥ  
 パサン・キダール  
 通訳 馮 士 剛  
 報道隊員 (読売新聞社)  
 井原 敦  
 宮坂 永 史  
 橋野 薫 史  
 永尾 泰 史  
 (通訳) 張 紅 軍

## 〔中国側〕

総隊長 葉 明 寿  
 秘書長 張 俊  
 登攀隊員 木 世 俊  
 袁 世 紅  
 宋 一 飛  
 金 一 彪  
 王 飛 名  
 李 趙 偉  
 余 徐 智  
 鄭 鄭 弘  
 徐 貴 華  
 徐 運 来

## 梅里雪山第三次隊反省会

(本会議は、平成9年11月16日に京大会館において行われたものを、録音からおこし、議事録を参照してまとめたものである。) 文責：松林

参加者：高村奉樹、木村雅昭、上尾庄一郎、酒井敏明、平井一正、新井 浩、阪本公一、上田 豊、横山宏太郎、斎藤惇生、松林公蔵、福崎賢治、人見五郎、中山茂樹、高井正成、吉村千春、中村 真、陸好正治、小林尚礼 (順不同)

### 司会 (松林)：

本日各先輩がたにはお忙しいところを、第三次梅里雪山反省会にお集りいただきありがとうございます。本登山隊は、御承知のように登頂を果たすことなく登山を終了せざるを得ない結果になったわけですが、登頂失敗に終わった経緯にはさまざまな反省点が考えられます。その点につき、皆様の忌憚のない御意見を賜れば幸いと存じます。討議してゆく項目は多岐にわたりますけれど、一番核心部の所から始めていきまして、その後に、その背景とかそういうところへ触れていきたいと考えております。お手元にレジメをお配りしていると思えますけれど、大体このような順番でご意見・ご批判等を頂けたらと思っております。

申し遅れましたけど、今日この反省会の座談会で色々出た意見を一応テープにおこしまして、そのうちの要点を反省会という格好でAACK時報に載せたいと思います。もちろん全部の人の発言を全て正確にそのまま残すわけではありませんけども、要点だけをおこしたいと思っておりますのでよろしくお願いします。

### 平井：

今日の会議はどういう範囲の人々に声をかけたのか、その点についてちょっと教えて下さい。

### 松林：

旧ヒマラヤ委員会といいますか、ヒマラヤ委員会にご出席頂いた方々を中心に案内状をお出しまして、参加していただけるかどうかをおききました。

### 平井：

ヒマラヤ委員会というのは誰でも関心のある者は来てもいいというたてまえがあるわけで、私はそういう意味で参加していたのですが、一度でもヒマラヤ委員会に来た人には声をかけた、そういうことですか？

### 松林：

私が大体ヒマラヤ委員会に来ておられたと考えられる方をリストアップしまして、斎藤総隊長に、これらの方々にお集まりいただきたいと考えておりますがよろしいでしょうかと決裁をおおぎました。

### 最先端の行動状況

### 松林：

ではよろしいでしょうか。

まず、ルート工作隊は最上部の稜線上まで出たわけですが、この先かなり余裕がない、ギリギリの状態で登山活動をしており、雪崩に遭ったりしているわけですが、その辺のところを中山から12月3日の行動を少し詳しく説明してください。

### 中山：

今雪崩の話が出たんですが、雪崩はですね、C3が建設される前でした。11月末C2で2、3日雪が降りまして、停滞していました。その時にC2で1m程の積雪がありました。停滞後1日あけてC3へもう一度登り直しのときに、表層雪崩がバットレスの基部でありました。C2からC3へのルート工作では、幸い登りにとりついてルートは1ピッチのトラバースだけで、その後は急登に入ります。1ピッチ目の終了点の15mほど下から亀裂が入って、真ん中あたりを登っていたトップの高井と小林が足をすくわれたかたちでフィックスにぶら下がりました。僕は一番後ろを歩いてたんですが、そこが局地的にかなり急な斜面を乗り越えるところでした。乗り越えた直後に雪崩が来まして、僕だけちょっとぶら下がったかたちになりました。この局面に関する反省事項としては、行動中フィックスに入る直前に僕はピッケルのシャフトで雪面をたたいて、5、6cmの表層がスパッと切れて滑るような事を3人の目の前でやって確認してるにも関わらず、その直後に雪崩に遭って3人とも流される状態になったということ、何でそんな事が起こったのかという事自体問題として隊の中では反省していきたいと思えますし、もう1つ全体の流れの中で考えたときにそういう状況でも、フィックスがあったからという安心感は当然3人共の頭の中にはあったとしても局所的にどう行動するかという様なこと自体が非常に曖昧に行動してたのかなー、とあとから考えました。全体の行動の流れの中で言えばやっぱりそれも余裕がなかった事に原因の1つはあるのかもしれない気がします。実際に12月2日の行動ですが、当初というか、前日の夜C3に入ったのが4人おまして、小林、吉村、高井と僕です。その4人の中では、できれば4時とか4時

半頃に行動開始してできるだけ高いところまで行ってみようという話になってました。その1つとしては、4人とも頭の中にバットレスの急な部分を越えたら頂上稜線までは少し距離はあるものの、かなり傾斜がゆるくなるんで、後はコンテですとかなりピッチを上げて進めるんじゃないか、というもくろみもあったんです。結果として朝スタートしたのは6時でしてかなり遅くなりました。ヘッドランプをつけて一番最初は行動してたんですが、その日は7ピッチザイルをのばして6,250の最高到達点に着いたのが3時半でした。それから下降にうつりC3着は夕方の6時でした。このようなタイムスケジュールで動いたんですが、実際には、3段雪壁の残り最上部というのは、前日に垂らして帰ってきたザイルを小林がトップで登って末端をフィックスしたこともありすぐにぬけられたんですが、そこから先が本当にカリカリの氷でしてかつ強風でした。もしも風がなかったり、くるぶしまで埋まるような雪だったとしたらコンテでどんどん上がったと思うんですが、結果的にはフィックスのベタ張りでないかと非常に危ないという判断をして、6,250mに到達してフィックスを全部はりました。手持ちのザイルをすべてはりきったと同時に時刻が3時半でしたので、その日は降りる事にしました。気象報告の方にもあるように、午後1時半とか2時頃からだと思うんですが、サイクロンに関する交信が聞こえてきました。その日は人見と陸好が太子雪山側のコルの方に偵察に出かけていたこともあり、行動隊が2パーティー動いてたんですけど、同じチャンネルでBCとC1の間で気象のやり取りが始まりました。その日の夕方の交信で、いったんBCへ退避することが決まりましたが、降りてきた僕たち4人としてはもう1度もし1日だけ許せるような時間があるとしたら、アタック

を明日本当に3時半とか4時頃スタートして、例えば午後2時まで行けるとこまで行って、もしたどり着いたら、もうこれで納得というような議論も出ました。しかし、実際問題としては2日の行動中にヘッドランプを2人が落としてたり、1人がザックを飛ばされたり、というようなアクシデントもあったという事も含めて、いったん下降が決定した後は、C3からの意見としても1度ワンチャンスくれないかということ自体は交信しませんでした。そして翌日12月3日に下降したわけです。その、今申し上げたようなことが撤退前の最上部の動きです。

**松林：**

今撤退以前の最上部の動きを報告してもらいましたが、もし天気が問題なければ12月3日に私もC3に上がって、それで最終アタック体制を人見と相談しようという状況でした。その12月2日の行動で、ヘルメットを落としたりとか、また交信ですと非常に余裕がないような状態が頻繁に入ってきたんですけれども、その上部の隊員の状況は、登攀隊長としては、どのように把握しておりましたか。

**人見：**

1つは先発隊の行動で、中山と小林に非常に負担がかかっていると感じておりました。しかも、その先発隊の2人に吉村と高井が何とかついて行くという格好で本隊が追ったわけです。今後アタック態勢をとるときに、1つはきちっとC4を上げてアタック態勢をとるという選択肢と、もう1つはかなりラッシュ的な先端アタックをするというような選択肢が可能だったわけですが、C4をつくるとなるとかなりまだ長期の時間がかかる、それと先端で活動している4人に対してはさらに深く関わってくるという状態だと思います。それまでに、睦好・中村というのがキッチリ順化してあ

がってきてくれる、それに間に合うかどうかという感じだったわけです。現実的に考えると、C3に上がっている4人がもうアタック隊で動いてもらう、それとかなり厳しい、肉体的にはかなり厳しくなるだろうという状態、なかなかそこでうまく人が手配できないという状態でした。

**松林：**

もし最善のアタック体制をとろうと思ったら、いくつかのキーポイントがあると思うんですが、1つはシェルパをどう使うかという問題と中国隊員を上げる気はあるかというその2つが問題となるわけですが、この点についての腹づもりはどうでしたか。

**人見：**

そのシェルパについては、色々意見が出てくるだろうと思うんですけど、われわれの当初の計画ではシェルパはC2まで使うというところで登攀隊員の中でコンセンサスを得てました。隊員の中にはシェルパを活用する事自体がナンセンスだという意見もありました。基本的にはこの山は京大の登攀隊員で登るのだという強いコンセンサスが登攀隊員の中にありました。当初の段階でも非常に厳しいことは厳しいんですけど、まだシェルパを全面的に使うという風には我々は考えていませんでした。それともう1つ、中国側隊員の問題ですけれども、かなり登山条件が厳しくなっているので、せめてバトレスを経験してもらう程度が、限界であると考えていました。登頂隊員の中に組み入れるということは、全然余裕がないのでそれは無理だろうと僕は考えておりました。

ちなみにちょうドルート工作隊が稜線まで到達したときに、僕と睦好で太子雪山方面に上がって、裏側のちょうど直下の雪原の状態を偵察に行ったわけなんですけれども、その時に彼等の動きも見ながら考えたのは、明日アタックできるだろうと思いま

した。

**平井：**

明日というのは3日ですか？

**人見：**

そうです。3日の日にアタックできると睦好と話をして、それからC2に折り返した途中で福崎、松林の交信を聞いたのです。

### シェルパの雇用に関する問題

**松林：**

ずっと隊内で話をしてきて、シェルパはC3くらいまでは使うけど最後の頂上工作には使わないという登攀隊員の気持ちはそういうことだったんですけど、私はその考えがよく分からないんです。たとえば、ガネッシュに行かれた方は木村さんとか上田さんとかは単独・独力でやられたわけですが、シェルパの使用についてお考えをおきかせいただければと思います。

**上田：**

雇っておきながら使わないというのはおかしくて、限定的に使うのも使うことに変わらないわけですね。ただそういうもともとハンデをつけていく余裕が隊にあるかどうか、それと隊員たちがたえそうであったとしても、AACK自体がそういうタクティックスでハンデをつけてこの隊を送り出すということだったのか、この点が問題であると思います。ほかの事は現地判断で言う事はないけれど、AACKの構造的なものから出てくるこの隊に関する問題はシェルパの問題にほとんど僕は尽きるような気がします。要するに主導権はあくまで日本人が握りながら使えるもっと有効な使い方もあったと思いますね。

**木村：**

シェルパの問題というのは、シェルパを絶対確保してほしいと松林から要請されました。その時には私が聞いたのは荷上げの

スピードが全然違うということだったんですね。その時には第2とか第3くらいまでの荷上げを考えておりましたが、僕の考えでは、この山は下部が危険だから早く通すのは合理的だ、したがってシェルパ採用することに同意したわけです。シェルパがC2までという話は帰ってきてから聞いたんです。当初のシェルパ使用のコンセンサスはどうかだったのですか。

**松林：**

基本的に登攀隊員たちはシェルパに依存するというのをきわめて嫌っておりました。しかし現実的に荷上げ、特に機材があるのを知っておりましたので、TVとかですね、荷上げには絶対必要ということは皆認めてまして、私自身の感じではもし余裕があれば勿論下部の方だけで使って実際は上の方は使わないということもありましようけど、非常に余裕がなかった時は実際使わざるを得ないだろうと私は考えておりました。そして、現実には下部では、シェルパに多大な協力を得たわけです。予定どおり私が12月3日にC3に上がって最終態勢を人見と相談する時には上部のシェルパ使用を、私個人としては人見と相談するつもりであり、多分人見も同意すると思っておりました。

上田さんがおっしゃるように、最初からシェルパをどのように使うかという見方、上層部と若手登攀隊員の間では、そのポリシーに関して若干温度差があり、そこにあえて一線を引かずにいた事は間違いないだろうと思います。

シェルパ使用には、強い反対意見をお持ちだった吉村隊員はどのように考えてましたか。

**吉村：**

結局現場へ行って考えた事と、行く前とは違っていましたね。まざまざとシェルパの強さというか、大きさは現場で分かったですね。

齋藤：

登山の潮流として、無酸素登山とシェルパレスというのは現実に主流になりつつあるんですね。したがって若い人たちは、そのような時代の流れを見て自分たちだけでやろうという気を持っておったと思うんですね。これはもう僕らの時代とはとは全くかけはなれております。僕はシェルパを使ってどうにかやっただ方がよいと思うし、最後に頂上をおとさなければしょうがないですからね。だけど、最終的に今第2キャンプまでということ、現実には第3キャンプまで使うという提言は若手は受け入れてくれました。

上尾：

シェルパと高所協力員というのがありますよね。ニュアンスが少し違うわけでしょう？今や中身は同じような気はするんですけどね。私自身は昔ガネッシュの時に雇ったシェルパとカンペンチンの時に補助協力員としてはチベットの4人を雇った経験がありますが、両者の差がだんだんとなくなっていくような気がします。

齋藤：

だいぶん近くなってきてますがね。馬力は変わりませんが、実力からいくとやっぱりシェルパの方がはるかにうまいと思います。

上尾：

64年の学生隊の時でも、ネパール1の実力のあるシェルパにも、始めはルート工作は何もさせてませんでした。しかし、ある程度実力もわかり、安全であることを確かめた後はかなり使わせて、頂上まで行ったら荷揚げにはもちろんスタッフ、隊員並みに行動したけれども、当時ではそんなにおんぶにだっこということはありませんでした。ちよっとシェルパというものに対するイメージが悪く植え付けられているという気がします。ただ、シェルパって

のは一体何ができるか、その辺りの考え方として私は何か変な印象がまだそのまま若い人の間にあるような気がします。

齋藤：

必ずしもそういうことではないと思います。

横山：

上尾さんの時代からも少し後でシェルパたちがどんどん力をつけて、かなり安全面ではできるようになってきた。僕らが多分学生から院生だった頃だったと思うんですけども、私なんかが見てますと、隊によっては極端な言い方をしますとシェルパに頂上まで引っ張り上げてもらうような隊もある、と。これはおかしいんじゃないかというような批判が出てたのは記憶しています。そういったこととは逆にやはり登る人たちの間でこれはおかしいという発言が出てきたのだからと私は想像してるんですけども、今回の隊の人たちの考え方として、シェルパとしてはもう限定的に使う、と。本当は使わずに自分たちだけでと思いたいけれども、それではちよっと荷が重い。で、限定的な使用であれば感情としても納得できるし、それに自分たちが登れるということだろうと思いますけども、それについての議論が不十分だったんじゃないかと。ただ自分なら、そうするという意味ですけども、実際にそれでは登れないということになってきた時には、向こうでの対応がまた違ってくるだろうと、もしもっと力のあるシェルパたちであれば、その力を有効に使って、頂上にたつような方策に変わっていくだろうというような考えを自分の頭の中では持っていた。あくまで想像するだけで、実際自分ならばどうしたかといえば自信がないんですけど、今考えるとそのあたりが一番問題だったんじゃないだろうかと思います。

結果を見ると状況が厳しくなった時には

多分使えば今回の結果よりはかなり頂上に近づけたんじゃないかと思えますし、例えばさっきのそのC3から4人アタックした時サポート全然いませんわねー、それをカバーできるのはシェルパだと思うんですけど、そういう使い方にしても、この場には考えなかったということでしょうし、昔からのシェルパの使い方ということであれば、躊躇なくそういう使い方をしてたんじゃないかと思えます。

齋藤：

その通りですね。現在では、シェルパはかなり実力をつけておりますので、逆にシェルパが先にドンドン行くと、今度は工作隊員が後ろから追いかけていくというようなことが、ちよっとチョモランマあたりではかなり行われてるわけですね。そういった反省とか批判とかをみて、若い人達にもシェルパとは下だけで使うという妥協案がうまれたのではないかと思うんです。僕はいつか使わざるを得ないと思ってたんですけどねー。まあその時に隊員たちがどう考えたかですけど。

高村：

私もその点については1つ大きな問題があると思ったんです。去年の1月の帰国早々に、やはり上田氏がシェルパの使用を誤ったのではないかと批判されました。私もその時の中山の報告で、自分たちの美学を通すのはいいけれど、エクスペディション全体の成否というものをどう考えているんだと一言いいたかった。ところが後から色々山岳雑誌を開くと、ソロのクライマーの精一杯の行動やらを見てますとね、やっぱりちよっと皆さん年齢的に過渡的なところへ来て、ずっとソロのクライミングやってないから、そこらへんで、中途半端なんだよね。それともう一つは、C2までといったけれどC3まで実はシェルパを使っている。それで12月6日までの食糧があが

ってるでしょう。これで良かったと僕は思わんでもない。ただ、そこから先のソロについてね、本当にそれだけの力を皆さん蓄えて、十分な準備して行ってなかったというところは、また言いたい。人見はC4も考えていたというが、C4建設にシェルパを使用せずに考えてたのだろうか。それにこれは例のヘッドランプをおとしたりですね、サブリュックを落としたりというのは明らかに実力不足です。私自身サブリュックを転がしてYさんに取りに行ってもらったことがあるので、これもあんまり偉そうには言いません。あの高度だったらね、だから、言いたいのは、個人としてのソロでいこうというような意識と、それからあの程度までシェルパ使っていこうと、そのあたりの精神的整理ができていないことを、上田さんやら横山さんが指摘してるんじゃないかと思うんです。

木村：

だから最初からそれでいくんだったら筋が通るんですけども、要するに大いなる戦力がここにいるにも関わらずそれを使わないという、その判断というのは非常に、やっぱりこれはまず別の判断と思うんですね。今回のような隊は持てる力をすべて投入しても頂上を落とさなければ社会に対する説得性はないわけで、そこで個人的な美学を追求していただいたって、私自身それは単なる主観的なモノログで何の説得力も持たないと。だから最初はシェルパレスと、それは初めからそのように行動しているのならば筋が通るわけですけどね。今からすれば私が思うのは、これから隊の撤退の話になるんだけど、この隊が危機の所になるんだけど、要するに登攀力とか判断力の力不足でリタイアしたんじゃないで、別の部分でリタイアしてきたんだから、シェルパの問題は報告なんかで正面きって書くほどの事もないだろうという気もするんですけど。

高村：

もう一つね、こちら本部側の当時の判断を申しますと、松沢氏が、読売のインターネットから出される行動表を毎日とりながら我々に連絡した。それでこの11月の末の段階ですが、まさにこちらで立てた戦略とものごくうまくいっていますね。だから基本的なタクティクスとしてたいへんうまくいっていると、辛口の松沢も実は言ったんです。こんなこといったら彼、今更と言うかもしれないけど、それだからこそ、最後のツメをするところで今のような問題があった、と。僕は今日はそれだけ申し上げたいんです。

平井：

シェルパの問題や若い人の意見はわかりましたが、しかし登攀に責任をもつ登攀隊長以上の人はそれに対してどう考えてたのかというのがちょっと疑問なんですけど。というのはチョゴリザの時に、できたら酸素使ってでも何でもいいからおとせという指令で、ああいう7,600の山に酸素を使うというのは僕も藤平さんも個人的にはものすごく反対した。しかし、上層部の意見で藤平さんも最終的には合意したけれども、とにかくだんだんと食料も燃料もなくなってきた段階で、これを使わないと登れないという時にはやっぱり使って登って正解です。もし使わなかったら、ワンピバークのあと次の日にどうなったかしらんけどギリギリで登ってたか、引き返したかどっちか、あんなに順調に行けてないのは確かです。僕も皆もあの時もやっぱり個人的には反対だったけど、やっぱり冷静に責任持った人が「使え」といったから私ら個人的には反対だったけど使った。だからやっぱり若い人の意見をアイデアとして聞いて、まあ、人見はどうおもったか知らんけども、斎藤総隊長とか松林が、シェルパの使用をもう少し強引にすすめたらどうだったのですか……

斎藤：

第3キャンプまで使えというのは、人見もその通り受け入れました。それから先は、最後の攻撃態勢のありかたによってちがうわけですが、必要となれば使うだろうと考えていました。

人見：

松林さんと話した時に、最終局面では必要があればシェルパを使うというようなことは2人で話しておりました。これちょっと隊の成立段階にさかのぼっちゃうんですけども、相当この問題では議論沸騰したんですね。シェルパを使うんだったら俺は降りるというような意見も隊員の中で出てくるんですよ。その中で僕は、隊の中でコンセンサスを得るために努力したのが、これだけの日数でこれだけの荷物をこういうかたちで上げるにはどうなるかっていうところで、するとどうしてもこのシェルパなり高所協力員っていうのは必要になってくる。だから、これはもう必要、どんな状態だったとしても必要なスタッフになるんだということですね、皆でシェルパを雇ったわけですよ。で実際使っていくと、シェルパっていうのは薬でいうとステロイドみたいなもので、悪魔の使者みたいなものと言ってたわけです。そして彼等に頼っちゃうとか、ほとんど頼れちゃうという存在になっちゃうわけですよ。おかげでC2までの荷上げも予定以上にきちっと荷上げて上がりました。C3ぐらいになると、言うほどの資材量ではないですから、それもシェルパ1回使えば必要な資材は隊員だったら2日かかる所を1日でサーっと帰って来れるみたいな、非常に強い。で、僕なんか最終局面でサポートなりなんとかです、使うという事はあり得るだろうな—と思ってたんですけども、何かあんまり頼りすぎると、さっきの自分たちの登り方みたいのがどこまでできるかと

いうですね、結構そこのジレンマみたいなのに陥ったわけです。

中村：

シェルパの話に関してちょっと、言っておきたいことがあります。主に日本を出発する前に、なるべくシェルパを使わない方がいいというような意見を言ったのは、主に僕と吉村さんだと思うんですね。うまくまだ皆様に伝わっていないことは、まず1つは同じC2なりC3なりにシェルパを使うにしても、できるだけ使いたくないんだけど必要だから使うのか、とにかく最初にシェルパを雇うんだから使おうっていうのか、現象としては同じでも何か意識の上で違うと思うんですよ。だからシェルパは結果的に使うけれども、できるだけ使わずにやりたいから、自分では毎日大文字山に登って鍛えようと考えていました。何か最初からとにかく雇うんだから、ここまでは荷上げしなくてすむという発想は私はとりたくないの、あえてシェルパをできるだけ使いたくないっていうことを議論に上らせたわけです。実際向こうに行ってからっていうものは、もう登攀隊長の人見さんに100%従うっていうのは僕自身はそう思っていましたから、C3までシェルパが上がったことに対して何も僕は抵抗を感じませんでした。なぜならば、行く前にそういう議論がなされた上で、人見さんがそういう判断をしたっていう意味で僕は完璧に納得してたということがありました。だから現象を問題にしてるわけじゃなくて、どういつもりで登るかっていう意識を僕は問題にしてたわけです。で、それがなぜ問題になるかということ、一人の登山家として梅里という山に京大が登る際に、なんとかコントリビユートしたいとか、寄与したかったわけです。なぜあの山が難しいかというと、1つは政治的に入りづらいということ、あと気象条件が難しいという2点だと思

ます。政治というのは要するに登山家としての範疇を越えた話であって、何か政治的な力で、あるいは政治的に上手に動いたおかげで、最終的に登れたとしても、嬉しさ半減です。たとえそれは仕方がないとしても、また実際政治的経過を経てBCまでは行ったわけですけど、BCから先も今度はシェルパのおかげで登れたというようなかたちになったら、一体京大の僕らの山は何かということになります。それで登っても京大が本当に登ったってことになるんだろうか、というのを僕はいつも当時は考えていたというのが実情です。だから最終的にシェルパ使ったにしても意識としてできるだけ使わずに最大限にやったんだけども、必要に応じて使ったという意味で登ったのであれば、納得いくけれども、最初から頼るつもりで登ったのであれば価値は落ちると思います。

上田：

ご意見の主旨はわかりましたが、C2までなら納得できてそれ以上なら納得できないっていうのは分らんのです。それに、僕はシェルパ荷上げだったらどこまで行ってもよいと思いますし、それをC2で止めなければならないという点も理解できません。それからもう1つは、勿論シェルパを使いたくない人も成功するのが最大の目標だったと思うんですが、そのシェルパをできるだけ使わずに、登れるという範囲で行こうとか、そういう判断をしながら行けるような山だったのかということ。いつどんな悪い天気も来るともしれない、その為にはやっぱりできるだけ早く、能率良く登頂態勢を整えるということがタクティクスにあったと思うんですよ。それと、繰り返しになりますが、特にこの問題は、最後は隊員たちの判断に残されて隊の中で判断されていったわけですけど、前の梅里遭難の後、一番反省点として出たと思う

んですけど、その辺の問題をなぜ最終的にAACKとして判断しなかったのか、という点が気になります。

中村：

今の上田さんのご意見に対して私見をのべれば、シェルパの使用がC2までかとかC3までかという問題ではなくて、できるだけ自分たちで登ろうというつもりで行くのか、そうじゃないのかという点に問題点を提起したわけです。行く前にはそういう主張はしませんでしたけど、結果的に頂上までシェルパを使ったにしても、僕は多分納得してたと思うんです。ですからシェルパの使用に対して、線を引く所を問題にしてるわけではないんです。

#### 登頂態勢直前の準備状況

阪本：

技術関係でもうちよっと明らかにしてほしいんですけど、12月2日に6,250mに4人上がっておられますね。その時は上部に何かデポされたんですか？何日くらいの食糧・装備、どのくらい程度のものを。それと、その日6時に稜線から降りてきた。で、翌日うまくすれば再度雪壁を登って稜線に出て、次のキャンプを設営して今日中アタックするというような計画だった。その時にはどの位の荷物が必要という想定だったのか？たまたまいったん降りて、そのままBCまで降りちゃったんだけど、再度上がるためにどれだけの装備がいて、果たしてそこでシェルパを使う必要があったのかどうか、その辺の事実関係ちよっと詳しく説明して頂けますか？

中山：

2日に最高到達点に上がった日には実際に手持ちのザイルとケイビングロープとか全部ひっくるめてなんですけど、7本4人で持って出て、コンテ用のザイルも含めて

7本張りました。で、張りきったので置いてきました。ですから、最高到達点には直下にハタザオをクレバスの割れ目にデポしただけで実際に使う登攀装備類は一切デポしていません。食糧も何にもなしです。で、バットレスの雪壁の途中で確か3本だったと思うんですがザイルをデポしてあるのはそのまま、翌日上がるとすればそれを途中で回収して最高到達点からコンテで上がるようになるというような目算をしてました。

阪本：

すると次の時に上がる時は、テントと食糧全部もって上がらないかんわけですな。

中山：

だから2日の夜の僕の個人的な考えでは、アタックをC3からかけるのであれば、万一の場合を考えて、ツェルトなりワンビークがができるような態勢で食糧を2日分持って途中のザイルを回収してコンテで上がっていく、ということでした。またC4を立てるのであれば、態勢を組み直す必要があるんで、多分登頂までは4、5日かかるんだろうという観測でした。そのためには、キッチリとフィックスを張る作業が出てくるので、途中の不要なザイルを回収してC3まであげる作業があるな、ということを考えていました。

平井：

ラッシュをかけるとすれば4人と考えていましたか、2人と考えていましたか。

中山：

ラッシュをかける時にしてもC4を建設するにしても、最短で物事を考えるとすれば、2人を登頂隊員として、空身に近いかたちで先行させて、ビバークができるような資材を持って2人がサポートで後を追うようなかたちにならざるを得ません。

平井：

その必要な資材はあがっていたわけです。

ね。

中山：

それはC3にはありました。

阪本：

2日の夜に、C2の2人とベースキャンプは、今後のタクティクスについて、資材的な面、人的配置、その他具体的な話は議論していたのですか。

中山：

それをちょうどやる日だったのが3日でした。ただやはり全体を支配していたのは、悪天が来るというアナウンスが先に入りましたので、C3の4人で議論したのは、許される時間が1日あるとすればラッシュをかけたくなーということでした。それをC3の総意としてBCなり人見さんに伝えるかどうかということも議論してたんですけども、実際問題ヘッドランプが2つなかったりというようなことがあったもんですから、言うのはやめとこかということになって、最終的に人見さんのBCへ下降という命令にそのまま従いました。したがって、ルート工作から降りてきた2日の夕方に、C3として、C4をあげるか否か、あるいは今後の登頂に向けてのタクティクスに関する議論は全くしませんでした。

松林：

この隊の至上命令というものは、登頂と安全の2点でした。もちろん、安全はどの隊でも基本でしょうが、死亡は当然ながら万が一怪我人が出てもいけないし、しかし登頂も果たさねばならないという立場でした。したがって、純粋に山登りという意味では、私自身は美学に固執はしていませんでした。個人的にはシェルパレスでやりたいという美学はなくて、とにかく安全と登頂とをふたつながら確保するというところだけを考えてきました。そういう意味では、若手のシェルパレス主義に対しても、若干タカをくくってありまして、出発前の会議

で議論すれば平行線ですけども、頂上が見えてきたら、実際に安全確保の上からもシェルパを使わざるを得ないだろう、と考えておりました。また、そういう局面になったら、若手も必ず納得して従ってもらえるものだと思います。ただ、2日がちょうどさあこれからという時で、3日以降、3日の段階で私もC3にあがりますし、上部の隊員たちとも話し、また人見とも十分話し合っただけで今後の態勢を相談しようという時でした。私自身は、ラッシュユってことはあんまり個人的には考えておらずで、C4をつくって、そこにはシェルパを投入して、そこで態勢を整えて4、5日かけて登るという事を頭に描いて、その案を人見と話そうというのが3日でした。しかし結果的に、3日には下山になってしまったわけです。したがって、2日からラッシュユでやろうという発想はあらかじめあったわけではなくて、悪天が来たところから生まれてきた議論で、そういう最終アタックを考える前に悪天で降りてしまったというのが実際です。

阪本：

ということは、C3以上でシェルパを使うとか使う必要ないとか、そういう議論にも至らなかったし、実際最終撤退の時にシェルパが原因になったということはないわけですか？要するにシェルパをもう少し有効に使ったら行けたのだが、シェルパをどうしても使いたくなかったから、撤退したとか、撤退の原因としてシェルパが関与したということはないのですか。

斎藤：

それは全くないです。

木村：

先ほども申し上げたように、隊の美学は美学として私は賛成したいけれどしかし客観的に見ればこの隊はシェルパを有効に使わなかったがゆえに失敗したというわけで



はないのですね。

齋藤：

シェルパをC3まではきわめて有効に使ったのですが、最後の段階でシェルパをどうするかといったことが議論になる段階にまで至らず登山を終了せざるを得なかったわけです。

中山：

登山経過がそこまで進行してなかったのではなく、シェルパが先発隊と同行せず、本隊と一緒に来たところに、1つの原因があったと思います。先発隊はどんどん先へ進んでおりましたから。先発と一緒にシェルパが入ってたら、展開も全然違った可能性もあります。

高村：

シェルパが先発隊と行動を共にしていたらという中山君の仮説は、必要な食糧や資材の面からのタクティクスについても、ちゃんと考えた上で選択されているのか、あるいは単にはやく来てくれていればといった感覚なのか不明ですが、いずれにしても、C3までは非常にうまく使われてたと考えてよいと思います。それから先のことは、さっきから出ているような登山の美学の問題になります。

横山：

先ほどの木村さんの指摘にも関連するので、少し話したいと思いますが、しばらく前に「AACKの将来を考える会」というものがもたれました。その時も私は言ったんですが、登り方についてかなり今AACKの会の中でも開きがあると思います。このような機会ですから言わせてもらえば、AACKの隊として隊を創ってると意識のひと、それからこの山は自分の山だと考えてでかけてゆく、という二つの考え方の間に開きが非常に大きいと思います。そしてそれははっきりしないで出ているということが、先程私が言った技術的にシェルパをどうする

かということに関わってきてるのではないかと思います。

#### 12月2日の気象状況

松林：

最終段階とも関係しますので、最前線の動きに関しては、次のサイクロンの問題を議論したのちにもう一度ふりかえりたいと思います。

福崎：

ニューズレターの原稿のコピーでお示ししましたが、気象報告の天気図から見た気象情報を見て頂ければ、大体の経緯が分かると思うんですが、まず、やはり色々反省しましてここに書かなかったことで気づいたのが2点あります。11月29日にサイクロンの情報はつかんでいます。しかし、当初は、大体のこの頃のサイクロンのパターンは、だんだんと北上するにつれて東へ向く、つまり雲南省の方に向かうというのが通例です。当然南からの大湿流の流入が問題となります。気象協会からの意見でも、数日前に経験した悪天はその大湿流が原因である、暖かい湿った空気の流れが何らかのかたちで吹き込んだのだろうという見解でした。実際にノアでも雲の流れは認められまして、それから非常に不安定でした。しかし結果的には、そのままインドに上陸して消滅しました。そのような経緯から、11月29日以降、気象係としてヒヤヒヤしながらノア及び観天望気で雲の流れをいつも注目してたんですが、12月2日に安成さんからFAXが届きました。内容はお手元のコピーにあります。事実経過としては、13時半ぐらいにファックスが届きまして、BCで、齋藤総隊長、倉智秘書長、読売新聞の3人、それに中国側スタッフと相談し、これはたいへんなことになった、という話をしました。数日前の大湿流でも上はかなりの降雪にみ

まわれまして、非常に心配しました。先程、中山から指摘があったんですけども、松林がC1に待機中ですので、C1に連絡して相談しようということで通信を開始しました。それ以前からバットレス難関部は人見登攀隊長から望遠鏡指示が続いておりました、実は下部の方では、無線は使用自粛となっております。しかし、事態の重さもあり、意識が甘くなったのか通信封鎖をやぶりました。そして、無線を開いた今一つの理由は、以前から人見には頼んでおきましたけども、BCの谷間から見えない南の近海、これがかなり大湿流の流入の経路となりますので、気象協会からもそこを注意してほしいとの連絡しておりましたので、人見に雲の流れをききますと、その日は高層の雲の動きが大きいということでした。気象係りとしての反省は、サイクロン情報は、夕方6時の定例の会議までまって、6時に全員に周知し議論すれば良かったかという点にあります。

松林：

私自身は最初気象情報を福崎から聞いたわけですが、その時点で気象情報を流したのが悪かったという意見も分かりますけれども、おそらくBCでは大議論が起こるだろうと予想しましたので、私の退避すべきだという意見具申をBCに伝えておこうと思いました。ですが、テントが離れているとやはり議論というものがなかなかうまくしにくいですね。だから夕方6時まで気象情報を伏せておくのが本当に良かったかどうかという点については、必ずしも賛同できませんが、BC-C1のやりとりが、最先端行動グループに悪しき影響を与えたということは認めざるを得ません。

平井：

今の経過を聞いていて、安成のFAXが非常に大きな影響を与えてそれで皆が降りたという風な意味に感じておりましたので、後

で安成に確かめたのですが、安成からのニュアンスは少し異なっておりました。安成の意見と彼がBCにおくったFAXを改めてみたのですが、その内容は、単なる天気予報であって、そんなにバタバタするようなものではないように思います。僕はこれを読んだ時に思ったんですけど、6時まで待たずに無線で流したのがいいのか悪いのかという前に、このFAXを受け取って、なぜそんなにもすごいサイクロンが来るということになってしまったのか、その点がよくわかりません。

福崎：

やっぱりそれが問題なんです。僕自身の判断では、気象録に書きましてように、北京と昆明の気象台ともに、12月4日から6日も含む10日ぐらいの間に、大雪が来るという中期報を出しておりました。ですから、僕の判断では、熱帯擾乱がありますので、サイクロンがいつきてもおかしくはないとは思っていました。安成さんの説はここに書きましてように、それはチベット西方の気流が関係しているということがありますが、気象協会の奥山氏の意見でも、大湿流がいつ来るか、あるいは来ないのかといった判断は難しいといったご意見でした。したがって、これは100%ではありませんけれども、かなり危険な可能性を含んだ状況だなというのは感じました。

齋藤：

私現場において最終的には、いったんBC退避に賛成したんですけども、1つには相当好天が続いておりましたので、いつ天候がくずれるかという点をたいへん警戒しておりました。そういう際にこのような予報が入ってきて、そしていつも南から湿流が上がってきた時は大体少しくずれたんですよという福崎の経験的な意見があり、さらにもう1つは、シェルパが天候の異変を感じてさっさと上から降りてきて、天候は

まもなく崩れるという。また実際、空を見ると雲の流れが非常に早い。これらのことから、もうすぐ天気は崩れる公算が大きいのではないかと考えてしまいました。なるほどな—と思っているところに安成の情報が入ってきたというのが実情です。冷静にと平井さんはおっしゃるけれども、現場ではそういう状態の時に警戒ファックスが来ると、やはり慎重にならざるを得ません。僕は聞いたんですよ、ペタンに。安成と気象協会とどっちが予報があたりやすいだろうと率直に聞いたんですよ。彼が言うには安成は世界的大学者であると。(笑)これはやっぱり大学者の言う通りにせんといかん—とあって反対しなかったですね。私は行くまでには、どんな天気が変わってもC2からは降ろさんでおこうと思っていたんです。その理由はC2で待機できると思ったけど、やっぱりあれを冷静に読めって言ったって、僕は難しいと思いますね。

平井：

安成情報は、何もサイクロンが来るって言うことは言ってない、このふたつがもし連動すればという、いわば仮定の警告に過ぎないでしょう。

上田：

平井さんは単なる天気予報だっというんですけど、これを実際に読むとまず緊急やと文頭に書いてある。しかも下の方には十分に雲の動きに警戒して下さいと書いてあり、さらにもっとも警戒すべき事態も考えられるとある。こういう事態であれば、まず慎重に判断するのも理解できますがね。

斎藤：

時期的に、ちょうど行ける登頂態勢が整ってきつつあったから、高さは低いけどベースに降ろして皆に鋭気を回復させたいわ、タイミングとして一旦下降も悪くないな—と僕は思ってたんですね。ところが結果として下降時にルートが悪さに遭遇し

て、このような結果になったわけですが……

### サイクロンの可能性をどこでやり過ぎるべきであったか

松林：

天気予報が当たるか当たらないかという議論は、今少しおきまして、そういう可能性はあるという情報が入った段階でどうすればよいかという事が次の問題となるわけです。まず私の意見を言いますと、C3にいったん上がりましてけれども、この前ネパールで降った大雪級の降雪にあった場合に、C2で十分に持ちこたえられるであろうかという懸念がありました。C2はまず雪崩は大丈夫という場所でしたけれども、大量の降雪に埋もれることは間違いないわけで、終夜を徹した除雪とテントの張り替えが続きますと、かなり登攀隊員達の身体は消耗してしまいます。しかも、すでにシェルパはいないという状況です。そのような状況が予想される場合、安全なBCで大雪中は十分休んで、再度やりなおせばよいという風な意識を私自身は持っておりました。それが結果的には登頂断念につながってゆくことになったのですが、いやC2に留まるべきだったというご意見もあるかと思いますが、いかがでしょうか。

斎藤：

結果論から言えば、C2に留まっていたほうがよかったですね。しかし、本当にサイクロンが来た場合は、そうやね、それはC2で頑張り切ったかもしらんけど、不安はありましたね。

酒井：

C2とC1をくらべれば、居住性はC1の方がいいわけでしょう？

斎藤：

はるかにいいですね。

酒井：

実際の居住性やら、雪に対する危険とか考えて、それも3-4日持ちこたえるという意味ではC2よりもC1で留まったほうがよかったですのではないですか。

松林：

ネパールの大雪級というのが、実際どの程度のものかと言う点はわからないのですが、このような場合、現実的には過大評価するわけです。それと、BCは絶対安全ですし、BCからC1までは私の感覚では登攀的には難しいところはありますけれども、1日で上がってこれるわけですし、待機するならBCがベストと考えてました。C1では中途半端でありましょう。

酒井：

12月2日の段階でシェルパはどこにおったのですか？ベースですか？

斎藤：

ベースです。シェルパたちは彼等の観天望気と勘で、天気が悪くなると読んで、下降してきたわけです。そのような状況にちょうどタイミングよく、例のファックスが入ってきたわけです。

木村：

私12月2日夕方5時ごろに大学が終わってAACKのルームに行った時に、新井さんからこの安成君のFAX用紙をみせられました。そして、これはたいへんだと思った。その時私がまず第一に考えたのは今年のネパールの大雪雪崩。このネパールの事例が頭にあり、ものすごショックだったんですね。これが来ればもう大変なことになると。それで、僕はすぐ安成君に電話連絡とったんです。いったいどうなんやと聞いたら、大体そのFAXのようなことを言ってくれたんです。私はその時安成君にできればベースと連絡をとってくれないかということ言ったんだけれども、彼はその時非常に忙しかったわけです。その日の晩に筑波をたつて

京都に学会で来るという話で非常に忙しくて、ベースと連絡をとりあう時間がとれなかった。それから次に、気象協会の森本君と連絡がとれたのですが、彼がいうには、「そう大してシリアスなものじゃないですよ、いったいだれがそのようなこと言ってるんですか」という。安成情報だということ、森本は、安成さんもわれわれ気象協会のデータに基づいて言ってるわけで、森本自身の考えでは、単に空気がもやもやとしていだけで大したことないというわけです。予報について意見が分れたかたちなので、僕はその時現地ではいわゆるその気象ファックス等の気象配置を予想できる装置は持っているのか？と聞いたら、持ってますという。現地でそれで判断できるんですか？と聞いたら、それはできるでしょうという。それで、私は森本に、現地に対してはまったく逆の意見を与えないで置いてほしいと依頼しました。現地で判断させようと考えたわけです。それに関しては1月15日に中山がそんな情報があったなら、なぜBCに知らせなかったのかと聞いてみたが、それはまあ結果論ではそうだったんですが、京都の経過を言いますと、京都のルームで以上のように色々連絡して、それをベースキャンプの斎藤総隊長にも慎重に判断してくださいと伝えて帰宅しました。夜10時ごろに斎藤総隊長から私のところに電話がありまして、BCに降りることに決定となりましたということをおっしゃたんですね。僕はちょっとからかって、それじゃ満天の星空でしょって言ったら、そうやと。それはちょっと嫌味を言っただけですが、内心はああ良かったなあと思ったんですよ。つまり二重の意味で。1つは、大雪が来るかもしれない、これはあくまでもかもしれないという意味あいですが。もう1つはやはりここで休養できると。もう1度捲土重来で、まさしく登攀の途中で、一度BCまでおろ

して鋭気を養い、あとアタック体制を組んで一挙にやればよいと。C4を作ったあとまあ5日ぐらいで頂上アタックになるのではないかと、まあそういう風な感想を持ったですね。

齋藤：

私もそのように判断しました。

木村：

しかし結果的には、BCとC1との間のルートが非常に悪かった。私は1月の報告会でも言ったんですが、この結果的にはBCに降りたことが、ルートの悪化の発見につながって、それをもとにして撤退したわけですけど、それはたまたまの結果論で、降りたことが果たして撤退につながったから適切な判断ではなかったのではないかなという詮索は、あまり意味がないのではないかなと思うのです。つまり逆に言うならば、そこで大雪が来てですね、実際は予報通り大雪が来て、BCとC1の間のルートが雪崩で非常に悪くなって、通れなくて撤退する場合なども考えられるわけで、一度BCに降りるとい判断が隊の行動上適切であったか否かを検討すべきだと思うんですけど。

上田：

あと登山するのに必要なものはすべてC1あるいはそれ以上に上がってたわけですからね、BCから上げるようなものはもうなかった。

松林：

C4をつくる計画で態勢を立て直すなら、もう一度C1から荷を上げる必要がありましたし、C3以上への荷上げも必要でした。BC退避のあとをどうするかというところまで話を広げていきますと、いわゆる撤退、BC退避と言う時にですね、人見と齋藤総隊長と私の間には、意見のニュアンスの違いがありました。私は全部荷物をデポして再起を図るという構図を考えておりました

が、人見はテントを含めて全てもちおろせという指示を出しました。その指示を聞いた齋藤総隊長がテントだけはデポするように修正するという経緯がありました。この時点で、最先端とC1の私、BCの隊員の間には、BC退避のもつ意味合いが少し異なっていたようです。中山が、一度おりたらもう登れないんじゃないかなというような発言をしましたが、それがかなり上部隊員には影響していただろうと思われま。精神的疲労度やそれにとまなう将来への観測が、テントによって異なっていた面があるようです。中山の再起は不能だという意見は、大雪が来た場合という想定のものと思いますが、結果的にはBCへ降りてC1-BC間のルートの悪化を発見し、登山中止を決定することになります。このあたりの経緯を人見のほうから説明してください。

人見：

昨年のネパールの大雪級の降雪がくる可能性があるというBCからの情報だったわけですが、中山との交信は記録に残ってるんですけども、僕の考えでは、いったん本格的な悪天が来たら、おそらくそのルートを補修することが非常に難しくなるだろうという風に思ったわけです。実際それ以前の段階で3日ほど沈没してる時があってC1、C2間の積雪も40cmぐらいの積雪でしたが、相当ザイルが埋まってしまい、掘りおこせなくても1度張り直すというようなことをしてるわけです。そういうことを考え本当に来たらこれどうしようもないなと僕は思いました。それは中山も同じ意識だったと思うんです。ですから、僕は、大雪の時に無人のテントがどうなるかなんてのは想像つかなくて、テントをつぶしていった方がいいのか、つぶしていったらもう埋まって掘り起こせないのではないかな、そういうことも色々考えて、必要な資材をすべて降ろした方がいいと考えたわけです。

その後、BCやC1との話し合いで、テントはそうそうつぶれないから、置いといても大丈夫だということで、テントを残すことにしました。

齋藤：

テントを残せといたのは私ですが、ナムチェバルワの時に2mほど積もりましたが、掘り出したらちゃんと立っていた経験がありますので、現在のテントの強度は大変つよいので、置いといても大丈夫だろうと考えたわけです。

### BC-C1ルートの悪化

松林：

以上のような経緯で全員がBCに降りた結果、登山は中止になったわけですが、そのBC、C1間のルート、私は読売新聞の記者とそれから陸好と中村くんの4人で下降しました。4人は久しぶりにBC-C1間を降りたわけですが、その際近くの読売新聞の人と話をしながら降りたのですが、もう1回行くならかなり気を付けないと危ないねーと言いながら下ったわけです。しかし、私自身の感覚としてはこれは中止すべきだというような感じはあまりありませんでした。最後にベースに人見と中山たちが降りてきて、倉智さんが言うには、人見と中山がかなり暗い顔しているといっておりましたが、疲労のためだろうと考えていたわけです。その後、BC-C1間のルートの危険性に関する会議が2日ぐらい続いたわけですが、結局会議を通して登攀隊員たちが中止の方がベターだろうという風に判断していったところを説明してもらえませんか？

人見：

C1からベースキャンプに戻ってきたわけですが、最後にC1を通ったのが11月23日。以後、BC-C1間を日本人が

通ったのが10日余りのブランクがあった状態です。我々は降りてきてびっくりしたことはルートの荒れです。レジメの中にも書きましたが、いくつかのポイントでザイルが寸断されてます。特に僕とか中山は先発隊の段階からここを何度も通り、ずっとルート見てきて、その状態に愕然としました。先発隊の段階でも、このルートの危険性を常に考えており、ブロックの崩壊とかに対しては非常にナーバスになってたわけですが、それがさらにひどくなっている。果たしてここを今後も使っていいものかどうか僕自身非常に悩みました。事実、今までにも落石に、小さい落石にみまわれたり、ブロックの崩壊に出会ったりしている連中もいるわけですね。これは評価の問題となるかもしれませんが、今までは運が良くてもなかったのか、これからもう何回か通ることがはたして十分大丈夫なんだろうかと悩みました。これまでたまたま運が良く通ってきたところを、さらに悪い条件の中で通るのがはたしてよいかどうか。僕の預かっている側の人間としたら、非常にリスクが高い状態ですし、そこで何かあった時、つまりリスクを十分認識していた中で突っ込むという状況で、それでもしも事故が起こったりしたらどうい結果になるのかと考えてしまったわけです。もう1つは隊の中で非常に意見が分かれて、その分かれた状態で、もう1回行くことを決めることが、良いことなのか悪いことなのか。やはりそういう意見が分かれた状態で再度やることもまずいかなと思いました。その2つのことを判断して最終的に撤退というような結論を出したわけです。

阪本：

23日以降シェルバはBCとC1の間を何回ぐらい通過したんですか？

人見：

かなり動いています。

阪本：

彼等から何か反応はなかったんですか？  
あんまり恐ろしくて行くのが嫌とか、あるいは勘弁してくれとかいうような。

齋藤：

それは言っていないですね。彼等はドライ・ラマのお米持ってたら石にはあたらないという信念があるからかもしれません。まあ、恐い、very dangerousとはよく言っていたけど、絶対行かないとは彼等はいわないですね。

平井：

偵察隊はあがる時にすでにここが危険である、落石が続くブロックが崩壊している危険性は察知してるわけだから、ちょっと冷静に考えたら、これだけ時間が経って晴天が続いたんだから下は荒れてるやろうな—ということは想像しなかったのかなと思うんですが。だから降りる時に、皆もう少しいろいろなケースを考え、こうなったらこうなるという風なことにかなり色々真剣にディスカッションしたらどうやったかというのはかなり僕は悔いが残るんですけど。ただ単にサーっとこう波が引くようにして降りてしまった。その時にもう少し議論をしてたら、例えばC1までやったらどうかとか、C1—BC間はこういう変化が見込まれるからこう対処するとか、そういう意見がいろいろ来なければならぬと思うんですよ。

中山：

結局、この話をする時も、BCまで降りたほうが良かったか否かということにからんでくるんですけども、今日の反省会としてどういう結論でいいのか悪いのかっていうのをもう1回おさらいしますと、BCに降りたことが良かったか悪かったかということについては、私としては17人の仲間が死んだということを経験している僕たちが、去年のネパールの大遭難に匹敵するか、それ以上かもしれない悪天が来るかもしれ

んという前提で議論をした時には、BCに降りたという判断は正解やったと思うんですよ。松林さんがおっしゃるように、C2で果たして留まれたかということ、非常に各人が不安を持ちながらのC2滞在になったわけですからね。

平井：

要するに、実際の判断が下されるまえに、色んな可能性がチェックされてそれでBCへ下山したのならばそれはそれでよいということですよ。

中山：

僕が申し上げたいのは先発隊で入る前に91年と90年の2月に1番最初に偵察に行ってるんです。その時はラツパ口の入り口を今回と同じように下から見て右、斜上するところだけがフィックス必要で、あとは1ピッチ上がったところからは荷上げのためにフィックスを張ってたようなことで、深いところでは膝まで埋まるようなラッセルでずっと細いガリーを上がっていきんです。全部雪が詰まってて今回のようにその右斜面の崖から崩壊など全然なかったはずですし、だから実際フィックスはってること自体上からの雪崩で逃げられなくなるような、逆効果さえあるようなことをやらざるを得なかった。今度2回目に今回の先発隊で入った時は全然様子が違うな—というのが第一印象でしてね、ただしその時も前日まで雨が降っていて上は雪でしたから全部埋まってたわけです。埋まっていたのが、雪が解けてきて本隊と合流した直後に、隊の中では僕が一番最初に上がって全然降りてこなかったわけです。ですから僕の個人的な感覚では、あくまですごい崩壊があつたガリーの中に詰まってる、それが全部雪が解けて全部裸でむき出しになっているということは少なくとも僕は想像できませんでした。

平井：

したがってBCまで降りるべきか、C1までにとどめるべきかといった、そういう議論はなかったのですか。

中山：

ですから、降りるのがどこまで降りるかという議論では松林さんや齋藤総隊長がおっしゃるように、BCまで降りたほうが十分休養できますし、BCまで降りようという判断は決して間違ってもなかったし正しかったと思います。

木村：

ベースキャンプからはC1ルートは見えなかったんですか？

齋藤：

見えないですね。ラツパ口の入り口見えるけどね。

阪本：

松林さんにちょっと質問したいんですが、観点を考えていえば、シェルパはBC—C1間を2日以降上がっていたわけですね。その間誰か例えば松林さんなり福崎さんなりがBC—C1を往復するような行動をしていれば、これは危険だ、例え登れたとしても上から降りてくる時、大変な事故になるからここでやめよう—というような判断が起きるような、それ程の危険性があつたかどうか、そのへんはどうですか？

松林：

そうですね、ルートの確率的危険性に関する判断というのは各人が少しスケールが違いまして、私は11月23日にC1に上がってるんですけど、その時も確かに危ないな—と思いましたが、事実、恐かったです。ただその10日後の12月3日に降りた時に、やはりより荒れてはおりましたけれど補修可能で、例えば11月23日の危険性が1としますと、12月3日の危険性は3とか4倍ぐらいかな—という感覚です。しかし、中山はもっと何十倍にもなっているという。そう

—というような感覚のスケールの相違があります。私自身も最初からある程度恐かったです。確率的な恐さですね。しかし山登りですから、この程度の怖さというのは、まあ許容範囲内といたしますか、そりゃもちろん何かが起こってしまったらだめですけど、許容範囲内ではなかろうか—という感覚でした。上部の中山たちはもっとはるかにスケールが強く感じたと言うだろうと思います。

齋藤：

確かにあのルートは事故がおこっても不思議はないルートで、僕も直下まで見に行つて、約30分早く行つておれば、丁度ブロックの崩落にあつて死んでましたわ。したがって、ルートがひどいと言われたらもう実感できたわけです。こりゃえらいこっちゃなど。それで撤退に同意したわけですけど、登山家はみな運命論者ですから、確率的な危険は分からんわけですけど、確かにひどくなってるだろうな—と僕はそう思ってたんですね。

横山：

極地法としては割と短期間だけれども、やっぱりルートは刻々変化するわけだから、ルートの補修を強いてやるのが常識だと思うんですけど、その辺はどう考えてますか？

福崎：

BCに居たのは僕と齋藤さんと倉智さんで、シェルパが往復しております。それでザイルが切れている箇所があるという報告で、その都度フィックスロープを渡して補修をさせておりました。それは齋藤さんとC1ルートを見にいつてブロックの崩壊にあつておりますので、随時補修はしていました。

上田：

もうこれはBCに下ると決めたから無理でしょうけど、様子見て下つたらかなりやばいから、上でとまっとう—というふうな

発想はでませんでしたか。

松林：

私には全然ありませんでした。

木村：

BCへ退避ということはすでに新聞発表されるので、それにしぼられたということはないですか。

斎藤：

それはいいですね。天気が崩れ出す可能性は12月3日の午後からで、BC退避を開始したのは3日の午前中ですので、その時点では決定的な天気の予測はできませんでしたから。

平井：

下山開始の決定が早すぎた、ということはありませんか。

中山：

福崎さんの気象予報情報としては、その安成さんの予報では4日～6日後にチベットの寒気団とベンガル湾の大湿流が合わさった大きな影響がでてくるというもので、その大きな問題の前に、小さなトラフが実は1個あるということでした。その最初の影響がでてくるのが3日の午後ぐらいだろうという予報やったわけです。したがって、降りるのであれば3日しかないわけです。

### 登山中止の判断

松林：

C1までのルートは確率的危険性は、中心的な隊員達が危ないので行きたくないというのをおして絶対に行けということではできないぐらいの危険性だと思います。実際、その是非を議論する段階で、中山、吉村、人見は非常に危険であり、止めるべきだという意見でした。陸好と中村は登攀隊長の危険感覚に従うと。私と高井、小林は、恐いけど行こうという意見だったと思いますが、中山と人見は登山中止を主張した危険

性に関して、C1ルート以外にはありませんか？

人見：

全体で見た時に、相当皆がしんどい状態にあるっていうのは当然ありまして、僕としてはもうあと2人ぐらい強い登攀隊員がいたら、もう少し違った展開になったかなあっていう反省はあります。結局精神的な面も含めた負担が、各隊員に非常に蓄積されてたっていう状態があつて、中止を決定しました。松林さんや高井の感覚で、あのルートは恐いけれども可能だといわれても、あそこを何度も通ったばかりと中山の危険感覚と異なるのです。毎回あそこに身をさらして登っていくと、ものすごいストレスがかかります。ですから同じルート見ても、怖いけれどもまだ行けるのではないかというのと、今まで運が良かったんだから次には事故をおこす可能性があるという感覚とは、随分評価が違って来たんじゃないかと思えます。そういう意味では、僕自身もやはり余裕を失って来ていたんだと思います。

松林：

冷静になって考えてみますと、結果的には登れなかったわけですが、その限られた隊員達の精神的あるいは身体的力量で無理をしなくて良かったのではないかという感じを今ではもっております。ただ人見の判断の底辺に、仮にBC-C1間を無事通過できても、さらにもう1回やり直すとして、さらに上部で事切れてしまうのではないかという意識はなかったんですか？

人見：

ぼくは、BC-C1さえクリアされればやれると思っていました。だからこそ、元に戻りますけど、12月2日の段階では成功を確信したのです。このままでやれるっていう風なんです。ですから、BC-C1間のルートがもし何も問題なければですね、この山は確実に登れる山だと、ぼくは思っ

てました。

阪本：

ベースに降りられて、動ける隊員が少ないっていうおられましたね。もう1度登り直す時にはシェルバの有効利用っていうのは考えてみなかったんですか？

人見：

その意見も松林さんから出たんです。シェルバを使ってそして小林や元気のよい隊員で再構成したらどうかという話も出ました。しかし、そのようなことをしたら、何か隊がバラバラになってしまうのではないかとことを恐れました。それで、その意見は採用できなかったのです。つまり、このルートは行くべきではないというような判断のあるグループがあつて、そして非常に変則的にシェルバを投入して何人かで登るということを、私の感覚ではできませんでした。

酒井：

ラッパ口っていう所は最初からキーポイントですね。91年5月の岩坪捜索隊の時も、そこを突破できなかったわけです。ですけども彼は当時、登山協会の強い何人かを一緒に行動させて、あそこの上り下りの回数、期間をなるべく少なくしたわけです。ですから、シェルバを雇う案が出て結局は、その延長ではなかったかと私は考えているわけです。したがって、あそこをいったん降りるとあとが大変であることは最初から分かってるはずなのに、BCまで退避したことが、私は腑に落ちません。最初から、C2ないしC1で頑張り、悪天候をやり過ぎすいう意見がどうして出てこなかったのか。もちろん上も大変でしょう。最後の頂上稜線には未知の部分がのこっておる。ですけども、分かってる範囲では、BC-C1間が最も問題だ。だから、隊の登攀能力というものが大きな議論になってたわけです。したがって、結局はシェルパレス

っていうか若い力だけで登りたいっていうような何人かが出てきたために、今回リタイヤしたということになりませんか。

中山：

僕が酒井さんのお話をお伺いした感じでは、議論がずれてきていると思うんです。吉村さんのシェルパレスという議論とも関連するのですが、例えばコンセンサスとして全員登頂で7人の隊員がいたら、全員が登頂するためにはC4に荷物をどれだけ上げて、その為にC3にどれだけ上げてC2にどれだけ上げてというタクティクス組みますよね。C2まではべらぼうな重量になるんですよ、具体的なタクティクスの上から、C3以降はそれが日本人であろうがネパール人であろうがチベット人であろうが1日か2日で上がる量です。もちろんC4なんてその何分の一かのはずですから、結果としてはシェルパなんて絶対嫌と言う隊員と一緒にコンセンサスを得たのは、かなりの物量を投入しないとイケないC2まではとにかく悪天が来る前に登らなければならぬので、シェルバを雇いましょうということでした。僕が申し上げたいのは、別にシェルパでなくても、山岳部の若い連中が10人でもよかったわけです。それで、隊員として行きたいと言う僕たち登攀隊員7人の仲間は、7人ともが頂上まで行くつもりで行くんだから初めからタクティクスとして2人を頂上に上げるためにはあとの5人は荷上げしなさいということはタクティクスとして組まなかったんですよ。その結果として出てきた案が、シェルパかチベット高所員を雇用するということです。だからC3まで使うのが嫌だとかじゃなくて、C3まで使う必要がなかったんですよ。では、BCに降りてからなぜシェルバを使わなかったのかということですが、その前に、僕は実際登攀メンバーの中で一番人見さんに相談を受けられやすい立

場として、会議の中でも人見判断にかなり大きな影響を与える立場におりました。その僕自身の感覚としては先程も申し上げたように、90年の2月に行ったルートとはもちろん全然違いますし、これは危険だなと思いました。BC-C1ルートを見た時に、確かに皆が言うように個々人の捉え方で行ったら行けるという人もおれば、絶対怖いという人もいるし、こんなもんやろーと思ってる人もおる。しかし、僕は正直いって、行けば行けるかもしれないけれども、もしもの時は死亡事故につながる可能性が高いと考えました。したがって、僕がもし、個人的にポジティブな意見をだせば、人見さんの考えも変わったかもしれないし、このような結果にはならなかったかもしれませんが、それがやっぱりできなかったんです。できなかったということは自分が五分五分かなーとか、行ったら行けるかなーとか思いながらもやっぱりすごく怖いと思った証拠だと思うんです。そして、ここ半年以上色々みてみると、確かに精神的かつ肉体的な疲れがネガティブな方向に判断を知らず知らず導いていったようにも思います。

平井：

12月2日に無線を通じて中山が人見に、BCへ降りるのであればこの山の登頂は放棄せざるを得ないといったことは、そのような疲労が影響していますか。

中山：

あの発言は、疲れていたということよりも、ザイルに限界があるのに、このうえ大雪が降ったらどうしようもないなーという意味でした。2日の時点あるいは3日の午前中までの時点と言うのは、大雪が来たという前提で行動してましたから、僕は個人的にC3に上げた装備も全部おろしてたんです。私の意見は以上です。

上田：

これは仮定の話ですけども、このラッパ

口はまた雪が降れば安全になるとか、そんなとこじゃないんですか？

斎藤：

その可能性はありますね。

中山：

100%の確信はないですが、今回ラッパ口に大岩が詰まったたというのは、その下から見て右側に切り立っている岸壁の1部が白っぽく剥げ落ちてるところがあって、多分そこから崩壊していると思われます。ですから89年とか90年の時点では崩壊は全然なかったはずで、いわばテンポラリーなアクシデントの1つやと思うんですよ。崩壊したものが全部そのガリーの所にたまっていて、僕たち先発隊が行った時には雪で埋まっておりましたからそのようには見えなかったのですが、あとで降りてきてみてそう感じました。

松林：

この結果はひとことでいいますと、状況の問題もありますが、やはり相対的な隊の全力量の問題と考えざるをえないと思います。結果的にはサイクロン情報で皆ネガティブな方向へ急速に転がるような格好で、判断がよくいえば慎重な、悪く言えば弱気な方向へ向いてしまいました。

阪本：

BC-C1の状態が悪くても、これが、かつて遭難した梅里雪山以外の他の山やったら登ってるんちやうんかーと思う。おそらく人見君の気持ちとして、これで事故起こしたらもう詫びても詫びられんような、そういう状態じゃないかと。だから絶対やっばり2度と事故起こしたらあかんということがまず頭の中にこびりついて、無理をせずにもう撤退と。おそらくそこに行きついてしまったんちゃうか？

斎藤：

大体僕もまじかにブロックの崩落を見るわけやけど、最終的にいえば、大体山な

んで安全なとこないですな。いつも運やと思っただけど。今度はね、もしやっばり起こったら申し訳ないと。どうしてもやっば頭にありましたね。

横山：

出る前にそういう話が少しあったと思うんですが、この前の事故のプレッシャーがないかという議論があって、その時には、なるべく感じないようにしますというようなことだったように記憶しております。まあ、そう答えるしかなかったという風な気もしますし、実際行った時に僕は絶対プレッシャーを感じておりました。少なくとも自分ならかなり強く感じるだろうと思いましたが、それで登り続けるのはかなり大変なことだと思います。阪本さんの言われた通り、普通の、過去の経緯がない山登りとはちがいます。しかし、それに耐えるだけの、それを押しのけるだけのものを持ってたかどうかということだと思います。これはさっきから出てる通り、皆かなり消耗してきてる、そういう状態でなかなか強く持てないなーというのわかりますが、そこが残念です。もう1つは、ネパールの遭難の話をよく言われるんですけども、91年の事故、それからネパールの雪崩事故というのがやっぱり強く頭にあるもんですから、考える時に、降りたらどうなるかということより先に、その気象の問題だけで判断してる気がします。ここはC2から下へ、降りるような必要ないとはいいましますが、期待やプレッシャーを受けながら、それから事故のことは嫌でも思い出しますわね、そういう意味では、事前の検討段階で検討が不足していたとも言えるわけです。

木村：

私は、もうこういう風に判断して帰ってこられたんだから、それはまさに既成事実で、もちろん皆さんそれぞれ感想お持ちになるでしょうし、私も持ってますが、それ

をぶつけあったって、もうこれくらいが限度じゃないかという感じがしますね。2つ僕は感じたんです。1つはね、日本の山でも、そうなんですけど、このシビアナ判断の時に皆の意見を聞くのが果たしていいのかどうかっていうことなんですよね。私の乏しい経験では、ある意思を決定する時に合理性を追うと、ろくな事ないなと。合理性を追求してゆくと、どうしてもネガティブな方向に進みがちです。そここのところが、僕は意思の決定の仕方として、まずかったのではないかと思う。それともうひとつは、中山君が日本人全員登頂という事をおっしゃったけど、タクティクスではそうじゃなかった。2人が登頂であと2人は予備で、個人的には、そんなこともつたいないから全員登頂してこいや、とはいいますがそれでも、タクティクスでそうじゃなかったでしょ？だから、全員登頂で行こうという気持ち自体は、私としては非常に高く評価してるんですけど、中堅隊員の意見が独走したことになりませんか。

人見：

議論を続けても結局は平行線であろうと思ひ、一番はじめに私自ら一番ネガティブな決断というものをしました。

阪本：

この時に斎藤先生は総隊長として、そんなことをしてはいけない、もう一回登り直さないかということは言われなかったのか？

斎藤：

それは言わなかった。僕はそういう結論になることを期待していたけど、自分が前線に出るわけでもないし、登攀に関しては人見にいっさい任すという事を宣言してましたから。だから登攀の継続の可否はすべて人見に託しました。

平井：

その時松林はどういう立場にあったんで

すか？階層的にいうと登攀隊長、総隊長と松林の意見もかなり重要な意見になってくると思うけど、例えば隊長、登攀隊長が相談しながら決めなければいけないと面もあると思うのですが。

**松林：**

それは隊の成り立ちの性格にもよるんですが、この隊はだいたい、牛田、藤田、陸好とかの若い隊員で盛り上がってきました。その最初の段階では、松沢が登攀隊長ということだったんですが、松沢クラスの年齢層が全権を指揮するのは嫌だ、若手だけでラッシュでやりたい、というのが若手たちの強い要望でした。結局は、長い長い政治折衝とかあるいは若手隊員のひとりの遭難で、若い人達が段々脱落してゆくことになりませんが、初期の頃の気持ちみたいなものはずっと継続されておりました。斎藤先生と私の仕事は、どちらかというと、BCにはいるまでのことをすることとそれから隊を維持してゆく役割であって、BC以上はすべて若手がしきりたいという哲学で、この3年間継続されてきました。そして、最終的に人見のもとに登攀隊員7人が結集したわけです。ですから現実的には登攀に関しては人見が全部指揮をとるとするのは規定路線で、人見も登攀隊員にも決定的なコンセンサスでした。私たちは意見は言うけれど最終デシジョンは、少なくとも登攀に関する限り、人見に任せてほしいということがありました。この隊の性格としては、とにかく若手でやるんだということがずっと根着いていて、それ自体が逆に言えば登頂を果たし得なかった反面、安全を選んだと私も思いますし、やっぱりAACKも年齢が開くと必ずしも統一的な一枚岩になりにくい面を強く感じました。

**平井：**

今日の中心的な問題については3人で色々相談したんですか？

**松林：**

人見と斎藤先生と私と福崎とは何度も相談しました。その時は、ネガティブに転ぶといわれますけれども、やっぱり安全策をとるという事に関しては、我々も全員プレッシャーはありまして、事故だけは絶対にさげねばならないという思いは、それぞれにつよいものがありました。ですから少なくとも、成功はしていないけれども、人は死んでいないと。そこに僕自身は納得したという面があります。

**阪本：**

むしろ無事に全員帰っていただいて全体としてのデシジョンはそれなりに正しかったんじゃないかと思ってるんですけども、そのデシジョンの前の段階、今、松林がいったけれども、全員が一枚岩になっていなかったのではないかと。隊の登攀する人達の力が少し弱い面があったんじゃないかと思えます。それまで一緒にどのくらいトレーニングしていたのか、この辺にはやっぱり反省すべき点が相当あると思えます。それが直接の原因ではないけれども、やはり最終の撤退をする時の判断材料にはなっていないかなという危惧はもっております。

**斎藤：**

残念ながらその通りなんですね。やっぱりトレーニングや文献の検討が、一応やってはありましたが、毎晩のようにわたる政治折衝にあけて、私もふくめて若い隊員たちにおいても不十分であったことは否めません。

**松林：**

若手隊員たちは出発前はある程度一枚岩であったと思うのですが、3年間のあいだに、隊員が徐々に脱落していった一つの理由は、京都でやる山以外の政治外交の仕事があまりにも多くおさまられたわけです。中村君などは、トレーニングしなければいけないという急先鋒の主張者であった

わけですが、その時間もなく、事務的な対応に追いまわられてしまったという傾向は、いわばAACKの山登りのあり方の1つの一番悪い面がでたと思います。

**上尾：**

ヒマラヤに限りませんが、エクスペディションとか探検の歴史で、政治なり経済を無視して成り立ったなんてのはどの歴史を見てもないですよ。だから、そういうふうのがないのが純粋なクライミングであるという発想は、単純な北アルプスの岩登りならばあてはまるかも知れませんが、未踏峰の遠征となれば、ある程度やむを得ないと考えてもらう必要があります。

**斎藤：**

この山は、それがあまりに多すぎた点が問題です。

**木村：**

それは私も実感しております。だいたい隊の出発2ヶ月くらい前になると凝縮力がでてきて、あとは一気に出発へとテンションが高まるのがふつうですが、それがなかなか、テンションが高まりかけると、次から次へと色々な政治的難題が出てくる。しかもその問題自身はたいしたものじゃないけれども、解決にはおびただしいエネルギーを使うといった性質の問題ばかりでした。僕は、議定書の調印が終わった段階で、あとはスムーズにゆくと思っていたのですが、実際は、それからが大変だった。ひとつの問題が終わったと思ったら、その解決策が次の問題を生むといった感じで、僕は中村君だけじゃなく、参加した隊員諸君は愉快じゃなかったんじゃないかと思うんですね。だけどもせめて日本を出れば後は梅里という目標があるからまあ心配してなかったですが。

**斎藤：**

いやまったく、そのとおりでした。

**上尾：**

昔でもやったんですから。それはねえ、そんな簡単に行ってるわけではないですよ。

**斎藤：**

それはその通りやけどね。政治的諸問題はやっぱり二次隊のあたりから引きずってくるんですよ。

**平井：**

通常、政治折衝は、対外国政府とのやりとりですが、今回はそこがちよっと違うわけで、そのへんが難しかったのではないかと。

## 2次隊C3の位置について

**上尾：**

もう一ついいですか。私自身実際声だして発言した事はないので気が引けるんですけども、第二次隊のC3の位置です。前回遭難した隊の判断が、私はどう考えても間違っているとは思えないんですが。しかし、あたり前の如く前回の轍をふまない場所を避けているんですが、事実、彼らが消えてしまった事は確かで、それは予想外のとんでもないことがあったわけで、常識的にはあの場所は、ヒマラヤの歴史をずっとみれば、通常であれば、キャンプ地として間違っているとは私には思えない。今回、C3を上げたことによって、何かメリットはありましたか？以前と同じ位置にテントをはっていたら、かなり余裕がでたんじゃないか、という気持ちもするんですが。

**中山：**

2次隊の考えというものがあったと思います。彼等の考えでは、バットレスで、まともなテント地はないだろうという大前提がある。本来C3の位置は、テントははりたくない位置です。なぜかというC2と目と鼻の先で、確かに大雪が降ってラッセルの場合は結構時間もかかるんですけど、高度が下がるだけで、大雪原を横断した低いところにはるようなことになるんで、普通

考えたらキャンプはほりたくない位置です。もし今回同じ場所を使ったとしても、前回の隊がC1を作る時にデポキャンプをはったような位置づけでしかなかったと思うんですよ。ただ僕たちは実際にしんどいラッセルをして大雪原を横断してから、バットレスにとりつくような行動を何日かしたんですけれども、そういう意味で有効利用ができたテンポラリーのテントとしての位置付けにしか過ぎないだろうと思います。確かに前回遭難しているという大前提があって、絶対その周辺にテントをはってはいけないという気持ちがなかったかというと確かにあったんです。

上尾：

C2を名目上のデポ地にして、本格的な基点を彼らの2次隊の位置にする、すなわち彼らのとったタクティクスはですね、私にはもっとも合理的だと思ってるんですけどそれはどうですか？

人見：

結局、2次隊がC3を作ったのは、C2附近が強風で、毎日滞在するのはかなわんという認識があり、もう少し下りたら風も少ないし、近いからルートも近くなるからという観点で、C3を作ったと思います。事実上、C2を放棄しております。風さえ我慢すればC2は非常にいい場所です。全体を良く見渡せるし、C1からも荷上げできるし。

中山：

2次隊の時はC1からC3の荷上げでメチャメチャ苦勞してるんですよ。距離がありすぎて。ですから、2次隊がとったタクティクスを今回とるべきであったかという、そうでもないと思います。

酒井：

2次隊のC3、たぶんここであつたらうという場所ははっきりと同定できましたか？

中山：

はっきりとはわかりませんが、佐々木さんのメモとかで、一つ小山みたいものがあり、それよりもC2側だから大丈夫やという記述があって、たぶんそれほど大きく地形が変わらないとすれば、大体この辺というのは分かると思います。顕著に小山がつながったような地形がありました。

平井：

そこは今でも、テントをはるのを躊躇するような位置ですか？

中山：

それは、そうはあまり思わないだろうし、皆もそう思っていないと思います。現実にはバットレスの斜面からデブリが何本か落ちてくるんですけどずっと手前で下流の方へ曲がって行ってますね。

横山：

地図を検討した結果でも、大抵のデブリは手前で下流へと流れる地形となっております。だいたい場合は、まさにその通りだろうと思うんですけど、しかし条件が悪い場合は来るかもしれません。

松林：

現在のC2でしたら、ネパールのサイクロン級であれば分かりませんが、普通の雪だったら別段1-2日は耐えられると思うんですけど、旧C3では、厳然とした事実もありますし、大雪をやり過ごすには、心理的不安があると思います。

### 総括的討論

松林：

時間も迫って参りましたので、総括的なまとめに入りたいと思います。全般的な御意見はありませんでしょうか。

横山：

さっきから再三その検討がまだ足りなかったのではないかと、自分も反省している

のですが、もし差し支えなければ聞きたいのが、隊員の皆さんがいく前に知っていた自分達の隊の力をどう判断していたのか？もう一つ言えば、一番最初の頃の人が残っているのかどうかはわかりませんが、その時に極力政治問題抜きで登りにいこうというその気持ちは分かるんですけども、それが本当に可能と思ったのかどうか、これまでの経緯考えると、僕はそれはそれで甘い判断だったと思うんですけど。

人見：

まず、自分達の力の評価ということについてですが、シェルパの問題もからみますが、一つの結論としては、技術的な面ではクリアできると、それだけの技術はあるという自信はありました。ただもうひとつ、平均年齢が高いですし、そういう意味では絶対的パワーの不足と言うのは当然あった。ただ、その絶対的パワーの不足というのも、例えば20代前半の隊員だったら5時間で通るところを我々は7時間かけたら行けると判断でした。それが2日に伸びるというほど我々の力は不足してるわけじゃないと。そういう意味ではこの山に実際に対応できるはずだというのが隊員全員の認識だったと思います。ただ今回、先発隊の話が出てこなかったんですけども、本隊で入った人々というのは、正月11月17日から2週間でもうアタック態勢という状態になってしまったんです。普通だったらアタック態勢に入るのは1ヶ月ぐらいが、ゆーに経過してですね、順応が十分出来てる状態になっているのが普通です。今回はそれが2週間で、6,000メートルのところまで活動するような状態になりました。結局、中村君とかですれ本来だったら十分力を発揮できるはずなのが、十分には順応しきれない2週間のところでもう最終的な局面を迎えてしまったわけですね。それで本隊の人々にしてみたら、そういう意味では力を

出す前に終わってしまったということですね。そういう意味では力量不足の隊であった、という感じには思うんですけど。さっきも2人いたらというのは少し情けない話だというふうにいわはったんですけども、人数的にはちよーどいいと僕は思うんですけど、あの局面では後2人くらい、つまり全員がフルにきちんと動ける状態であればよかったということですけど。そういう意味では力量が若干足りなかったというふうに思ってます。

横山：

全員がちゃんと動けないと登れないというのは、厳しい話だと思います。たとえば、高度順化についてももっとよく考えて、それができるパターンで動かさないといけないと思います。いろんな事情があつたにせよ、そういう焦りを覚えたような所に相当無理があつたんじゃないんですか？本当に確実に動けると言う人達ばかりならいいですが、そういうわけでもないですし。それにしても、一人くらい突発的に何か動けなくなる可能性はあるわけで、それが全く許されないメンバーだったというのであれば、僕としてはびっくりします。

松林：

私の感じでは、高所順化の点もありますけれども、やはり基礎体力のせいだと一つは思います。私はC2までしか行ってないんですけども、若手でも極めて強いという感じの人がそんなになくて、ゆっくりであれば確かに行ける、テクニカルについては着実なんですけども、どの遠征隊でもめっちゃ強いやつがいますが、今回はそのような局面が見られなかった。小林はかなり強かったですけども、そういう体力の面では今後改善すべき面が、あつたんじゃないかと思います。

平井：

本隊と先発隊がなぜあんなに離れたんで



すか？今の話し聞いてると、本隊と先発隊の期間が離れたために、2週間で登頂態勢に入らざるをえなかったということですが。

酒井：

本隊が1週間でも早く出たら、局面はかなりかわったかということやね。

斎藤：

これは仮定の問題ですけど、可能性はあったかもしれませんね。

松林：

当初、先発隊がこれほど順調に行くとは考えていなかった点もあって、本隊との時期関係はこの程度が適当だろうとのコンセンサスで計画をすすめたのですが、結果的には、先発隊の先行が、思いのほか早かったというのが実情です。

横山：

通常の経過からすればこのスケジュールでいいということなんですよ？これまでのデータから考えていたよりは、好天が早期に長く続いたということですね。

阪本：

登山期間はいつまでやったんですか？

松林：

本来は12月28日まで登山期間がありました。ところが政治的なことで12月16日がリミットだということが雲南に行って決定されました。

斎藤：

この、登山期間変更は、雲南に行って初めて知り、最初は困ったなと思ったのですが、先発隊の進みかたから考えて、期間内には登れるだろうと踏んで了承しました。

上田：

先発と後発を、今回わけたのはなぜですか。

松林：

全員が本隊として行ってすぐそのまま登山を開始する場合がありますけれど、ある程度、準備態勢と少しでもルート偵察が進

んでいた方がいいだろうという一般常識的な考えでやりましたけど。

斎藤：

それから現地に住民の反対感情があるという情報がありましたので、まず行ってどんな状態かさぐってもらおうという、そういう意図もありました。

上尾：

現地感情については、軟禁されたり盗難にあったり、報告書を読むとかなり深刻そうにかいてあるんですけども、そのへんの実情はどうだったのですか。

人見：

先発隊としては非常に深刻な、つまり僕と中国隊員2人の装備が盗まれ、何度かその捜索がありました。だから私から言わせると、先発の人間と本隊とで、何か現地に入ってから意識が全然違うんですね。先発の方が、中国側もかなりナーバスになっている、しかもナーバスにしているという盗難に遭ってですね、そういう意味では僕は苦勞しました。

上尾：

それは上田さんの言う質問の趣旨とも関連するでしょうが、小さい隊はやられやすい、大きい隊はやられにくいというのが通常ですから。しかし、その辺の話は一応リスクの内と考えていたわけですか？

斎藤：

しかし、C1まで登って盗難にあうとは、想像を超えていましたね。

木村：

徳欽県の民情はどうでしたか

人見：

我々の感想で確かかどうかはわかりませんが、登山隊が入ることに対する村民の感情は悪いというのがまず一つ。それと我々に対する感情もそうなんですけど、徳欽県と昆明との間の感情もあるようで、複雑なようでした。

上尾：

ひとりかふたりで、山登りということではなく、入れそうですか？

人見：

それは可能みたいですね。

上尾：

ややこしい政治問題などがなかったとしてですよ、ある形でもう一度行きたいという風に思いますか？そういう人がどれくらいいますか？

中村：

山には行きたいと思います。あくまでも仮定の話なんですけど、麗江まで飛行機で直接入って、宴会やらも何もせずにバスに乗って現地に入って現地の人と仲良くなれるとすれば、たいへん嬉しいとは思いますが。

斎藤：

かつてのチベットがそうでしたから、いざれそういう時代はくるかもしれません。

中山：

僕は横断山脈研究会というのに入れさせていただいているんですけど、県政府とだけ交渉しては入れる道があるのかという風なことを勉強させてもらいたいというのが大きな動機で入っております。中村保さんにこの前JACの会合でお会いして伺ったのは、県長と直接対談された時に、なんておっしゃったかということ、梅里雪山は有名になり過ぎているからそれは多分困る。しかし、それ以外やったら直接県に来てそれから段取りできますよというお話でした。ただし旅遊するという名目でおいでなさい、というようなことは間違いなく県長がおっしゃったと。

司会：

まだまだ語り尽くせない部分は多々ありましようが、とりあえず、今までのご意見をまとめまして印刷の手前までは仕上げたいとます。

それでは一応、本日は終わりということ

にしたいと思います。どうもお忙しい中ありがとうございました。

注) 上記の議論以外にも、第二次隊以後の流れのなかで、約5年間にわたる対北京外交や、対雲南折衝についてもこ種々議論されたが、今回はAACKの内部的反省会という趣旨にのっとり割愛した。

## 梅里雪山の失敗

—なぜサイクロンの影におびえたのか—

平井 一 正

前にAACKニュースレター第4号に、「梅里雪山登山の失敗に思う」と題して私の感想をのべた。その中で、会員である筑波大学の安成哲三（文中敬称略）からベンガル湾に発生したサイクロンが北上し、大雪のおそれありとの緊急予報がBCに入った、この予報にもとづいて上部の隊員がBCにおいて、結局登山は失敗した、とのくだりがある。これはその前に行われた登山隊報告会（97・1・15）で論議されたことを受けて書いたものである。

このまま私の記事を素直に読むと、どうも安成の予報が、登山失敗の大きな引き金になったような印象を受ける。その後、森本を通じて、安成から、彼がどのような判断にもとづいて情報を送ったかの実態をあきらかにしたい、との意向が伝えられた。私も情報の伝達による歪みについては興味があるので、ここで安成が現地に送ったファックス、日本気象協会からのファックス、関係者の意見などを掲載して、どうして現地がこの予報によって揺れ動いたかを考えたい。

### 筑波大学安成哲三からのファックス

「緊急 1996.12.2. 14:37

大量の貴重な気象観測報告をありがとうございます。非常に参考になります。

さて予想ですが、チベット西方の寒気塊の動きがややよくなりました。またGMS画像には、ベンガル湾上にサイクロンが発達北上しています。この両方がもし連動すれば、昨年11月のネパール大雪雪崩のケースに近いことが、ヒマラヤ東部—雲南で起こる可能性

があります。

多分4～6日頃が山場になると思いますので、十分にこの2つの動きに注目してください。チベット西方の寒気塊がヒマラヤ山脈西端にひっかかった2日後位か。梅里付近で最も警戒すべき時期かと思います。」

これが問題のファックスであるが、よく読めばわかるように、サイクロンの動きに注意せよということだけで、必ず大雪になるとは言っていない。普通の天気予報である。

さらに安成からは天気図と一緒につぎのようなファックスも来ている。

「12.3. 20:26

梅里のデータなど、たしかに受け取りました。気象庁数値や報告の96 HOURまでのグローバル予報天気図を見ました。

チベットの西の寒気はより北の大きなトラフにつながっているようです。たしかにサイクロンは予報では5日12時頃には消滅するようにでているのですが、4日12時頃からチベット北の大きなトラフからの寒気が高原東縁を回り込んで雲南に流れこむように出ています。それとサイクロンくずれの水蒸気流入で、どれだけ崩れますかが、かぎです。いずれにしても山場はやはり4日～6日で、これを越せば、天気は確実に良くなると判断します。あとは現地の判断をお願いいたします。皆様のご健闘と安全をお祈り致します。」

このファックスの存在は、今回はじめて明らかになったが、それによると4日～6日を越せば、好天が予想されている。ただ発信の時間をみると、すでに下山のあとであり、B

Cの決定に影響を与えていないのは、残念である。しかし最初のファックスを読んでも分かるように、そんなに危機感があるようには思えない。なぜ、もう少し上部でがんばろうという意見がでなかったのか、理解に苦しむ。

日本気象協会気象情報部島田さんからのファックス

「1996.12.2. JMT16:00

1. 梅里雪山付近はひきつづき500HPAの強風軸付近にあり、頂上では30M/Sの強風だが、天気は安定していると思われる。

2. 3日～4日と5日～6日のトラフが通過、山系南側で組織的な上昇流の発生が考えられる。このため、ベンガル湾に存在する熱帯低気圧からの暖湿気が流入するおそれがある。しかし、ひまわり画像からみると、熱帯低気圧はゆっくり西進中で北上する様子はなく、梅里雪山付近に向かって吹き出す雲はうすい上層雲だけである。明日以降の熱帯低気圧の動きに注意したい。」

気象協会の情報処理部長である会員森本陸世の意見

1996年12月2日の気象情報の経緯について

12月2日の19時頃（時間は正確ではないが17時30分以降であることは確か）にAACKの高村会長から、サイクロンが近づいており、危険だという情報が日本から現地に入ったが、どのような様子なのかという問い合わせがあった。私もそろそろ登頂時期なので、2日の昼ごろひまわりの画像を気にして見ていたが、サイクロンがベンガル湾にあるものの、ゆっくり東進しているようなので、アタック時期にはおおきな影響は当面ないと考えており、その旨を伝えた。また私の所属する日本気象協会の気象情報部から当日送信したファックスを取り寄せ、内容を確認したが、サイクロンの今後の動きに注目するようにという記述があるのみであった。

再度AACKに電話し、木村氏に私の感想と、予報担当部局がだした内容を連絡した。木村氏との間で、いずれにせよ、現地にNOAの受信や他の気象情報が入っているはずなので、それらを見ても、サイクロンの動きや梅里雪山周辺の雲の状況は把握できるはずであり、現地判断に任せてよいのではないかと話したように記憶している。そのとき、安成氏からの情報とわかったので、判断の根拠が気になり、筑波大に連絡したが、不在で連絡はとれなかった。

現地の判断

以下は福崎の私あてのメールから。

12月2日のファックスでは12月4日から6日まで要注意というものです。12月3日のファックスでは現地判断を強調しており、安成さんがむやみに危機をあおったとは思えません。

一方気象協会からのファックスは、熱帯低気圧の動きに注意するよというものです。ただし南からの暖湿流に注意するよう書いてあります。これも熱帯低気圧の影響です。（熱帯低気圧＝サイクロンです）

また雲南省気象台及び北京の気象台より12月4日から6日を含む1週間ぐらいの間に大雪の恐れがあるとの予報が出ていました。

安成さんのファックスを12月2日現地で受け取ったのが、13:30ぐらい？でした。現地での気象は強風で晴れ、ときどき雪が舞うというものでした。高層の雲の流れも早かったです。対応としてはすぐに、4日から6日の悪天のくる前にアタックをかけるという意見がすぐに出ました。私の直後の判断は、様子を見ようというものでしたが、上部が疲れていることもあって、安全策としていったん下山しようという意見が出て揺れました。

とりあえず、上部には安成さんのファックスの内容を伝えました。Yさん、倉智さんはすぐ下山には反対のようでした。しかし晩の

18:00からの交信で、一時下山が初めに出されたためそうになりました。

しかしこの経過は微妙なので、また詳しく書きます。

私としては、安成さんが危機をおおったのではなく、いわゆる普通の気象予報をしたと思います。現在の気象学の発達により、大きな悪天の予想もできるようになったと思っています。

前回の隊の遭難でナーヴァスになっていることも事実であり、最大限の安全をとることも一つの方法だと思います。その後の経過はまた別問題だと思っています。

#### 弱気が増幅された？

1月に行われた報告会では、言葉の省略もあって、安成の天気予報がかなり信頼できるもので、大雪の降るおそれがあるという警報であったような印象を、ほとんどの参加者が持ったことはたしかである。しかし、福崎も書いているように、安成のファックスは単なる天気予報で、いたずらに危機感をおおったものではないことが明らかになった。前回のニュースレターの私の記事で会員が誤解を持たれたとしたら、それは私の責任でもあり、ここに深くお詫びしたい。

しかしそれでは一体なぜ、いったんBCまでおりようという話になったのか、いささか理解に苦しむところである。まず、BCから上部テントに予報を知らせるときに、一字一句を知らせるわけでもないので、当然語句の省略がある。この省略された部分がかなり重要な意味をもつと思う。BCしか安成のファックスの全文を知らないで、よく予報を吟味した上で、ある程度BCで判断した上で、指令を上部に知らせるべきであった。

前回の遭難で皆がナーヴァスになっているところに、大雪という言葉が飛び込み、過度に反応したと思われる。ただ言えることは、いろいろと情報の伝達に問題があったかもしれ

ないが、やはり上のテントの連中のたたかう姿勢に欠けるものがあったのが、サイクロンの影におびえた最大の原因であろう。少しの弱気が、この「予報」で増幅されてしまった。残念でならない。

#### 安成哲三のメモ

次に、梅里雪山の天気予報について安成が書いたメモをそのままのせる。

今回の私自身の梅里での気象予報（予想）では、これまでの私のネパールヒマラヤや雲南地域の冬の大雪や寒波に関する多少の経験と気象解析の結果から、チベット高原のすぐ西、中央アジア、パミール高原付近から、ヒマラヤ主脈の南面からインド平原部まで南下する寒気団に最も注目しておりました。

この付近で大きく南下した寒気団（気圧の谷）により、ヒマラヤ主脈とチベット高原の地形による気象力学的効果で、主脈沿いに局所的な低気圧が急速に発達し、早いスピードで東進するケースの多いことが、私たちの解析で明らかになっています。（安成・藤井、1983、Yasunari and Tien, 1989、安成他、1996など）。

91年1月の梅里遭難時も、まさにこの状況でした。95年10月のネパールでの大雪、雪崩の場合は、これにベンガル湾からのサイクロンが合流することにより、あのような大量降雪になったようです。この局地的な低気圧は、現状の高層天気図にはほとんど現れないので、91年の場合も、現地で天気図を見ているだけでは、悪天の予想ができなかったと察しています。しかし、寒気団のヒマラヤ主脈、インド平原への南下の仕方、その強さで、ネパールから東のチベット、ヒマラヤ地域に与える影響は微妙にちがひ、どのようなケースにこの「ヒマラヤ低気圧」が発達するのか、その正確な予測は、現在得られる観測データと数値予報モデルではまだ不可能に近い状況であることも確かです。

したがって、私ができる予測（というより

予想）も、チベット高原西に、この「ヒマラヤ低気圧」を引き起こす可能性のある寒気団の南下があるかないか、というところに絞らざるをえず、その意味では、あくまでポテンシャルの予報でしかありませんでした。あとは、現地での気圧、気温の動向や経験に基づく観天望気による判断しかないと思います（これも、明確なシグナルを与えてくれる保証はないでしょう）。

結果的には、何のお役にも立たなかっただけでなく、隊員の方々の判断にかえって大きなノイズを与えてしまったようで、後悔しております。しかし、天気予報といった情報も、それに関わるコミュニティの状況と相互作用的であり、予報の流し方も十分考えないといけないということを改めて痛感しました。

そういう意味では、AACKとしては誠に残念な結果になったわけですが、私個人としては、苦いながら、良い経験だったと思って自らを慰めている次第です。

なお、梅里雪山地域を含むヒマラヤ、アッサム、雲南での大雪予測に不可欠な、上記の「ヒマラヤ低気圧」の形成、発達の機構を明らかにすべく、今年から、ネパール気象局の研究者と共同で、より精度の高い地域気象（数値予報）モデルによる研究を開始することにしております。また、ヒマラヤ高地での気象のリアルタイムモニタリングシステムを、環境ODAの一環でなんとか実現したいと、現在、ネパールなどの気象関係者などと進めています。これらの研究やプロジェクトは、梅里で眠る研究仲間の井上治郎のヒマラヤ気象研究の志を継ぎ、発展させることにもなると思っております。

AACK会員諸兄のご理解、ご協力を今後ともお願いしたい次第です。

#### 福崎からの回答

ファックスやコメントなどを読んで生じた疑問を福崎に送り、彼からの回答を得た。以下

にこれをそのまま掲載させていただく。

#### 平井からの質問

一. 上の隊員をおろすことに反対、もうすこし様子を見る、という意見がBCであったにもかかわらず、なぜそれが実行されなかったのか。上に予報を知らせるときにどういう経過で知らせたのか。そのままか？ またはよく吟味した上でか？ 上の連中が下山を主張したときのBCの反応は？

二. 安成の2番目のファックスは、結局どうなったのか。ファックスが着いたときは、すでに下山してきたのか？ もしこれが先にきていたら反応はちがっていたと思うか。

#### 福崎からの回答

一. について。

安成さんの12月2日付けのファックスは当時BCに居た日本人、Yさん、倉智さん、福崎、読売チームは全員読みました。また中国側にも通訳を通じて伝えられました。（丁度その時中国側との会議がありました。登頂成功時の連絡態勢についてのものです。）その時はどうしようという相談はなされませんでした。各人が、色々意見をいっただけです。

理由は、当時隊の行動は、毎日午後6時からの交信で決定されるのが常でした。登攀隊長の人見はC2にあり、統括隊長の松林はC1に居ました。従って当然、2日のその日も各人そのつもりで居りました。

〔上部への安成ファックスの伝達について〕

通常気象情報は毎晩6時からの交信で伝えます。しかしこれは重大と私が判断して、とりあえずC1の松林に伝えることにしました。よく吟味した上ではなく、ほぼそのままの内容を伝えたいと思います。松林の反応は、全員BCに一時避難しようというものです。人見は当時、C2のCOLからバットレス登攀チームに（望遠鏡を使つての）ルート指示をし

ていました(または、メイリ上部の偵察に行っていました)。従って直接私から連絡しなかったのですが、無線を傍受したようです。私の記憶では統括隊長だけにまず知らせるという気持ちだったと思います。(ただし他の隊員に確かめなくてはなりません。基本的には午後6時からという気持ちだったと思います。しかし無線は傍受できますから無意味でした。【一時下山決定について】

午後6時からの定期交信でまず安成ファックスの内容を私が各キャンプに伝えました。ほぼファックス通りの内容です。その後人見が交信を始め、全員BC待避をいいました。で後は各キャンプの同意を得る過程になりました。C3のケイハク達も渋々同意し、C1松林も同意し、BCでは私も気象係として同意しました。BCではYさんも同意しました(登攀隊長の判断に従うということのようでした)。ただその時、ケイハクがこれはメイリをあきらめることやで、という趣旨の発言(理由は、一度大雪が降るとルートの修復がかなり大変、ザイルの予備がほとんど無かったのに、更に必要となる、ということらしいです)。また何を持ってBCに下るかという時、人見が余りにも多くの物を降ろそう、テントをつぶそうといったのに対して、Yさんが、再挑戦もあり、テントはそのままよいというコメントをしました。

ここで注意したいのは、(これは隊の反省会でも出たことですが)、ほとんどこれに関する議論がなかったことです。気象係の立場からいっても、ただ安成ファックスの報告だけで、気象係としてのコメントはしませんでした。その後ディスカッションで気象係としての意見をいうつもりでした。(私の意見は、ひとまず様子を見る、そのために最大安全策の一時BC避難とC2待避、この二つで揺れていました。そして予測として人見はC2待避をいうであろう、というものでした。)今から思うと、隊の反省会でも出ましたが、上部

はほぼ確実な気象予報と思ったということらしいです。もちろんそれまでも、気象予報は、日本からの情報と、現地のノアの画像等から現地での判断をしていました。もう一度当時の私の意見を述べますと、安成ファックスははずれるかもしれないが、念のため少なくとも、C2で様子を見るというものでした。最大安全策をとるなら松林が言ったように、BCに待避する、というものでした。隊の進捗状況から、悪天がくる前にアタックというのは無理でした(C3、もしくはC4に取り残される)。当時の数日前からの天気予報は、風はきついが、それほど崩れない、ただし南からの暖湿気流は注意、というものでした。従ってノアの画像を見ながら予報を出していましたが、このような事情でここ数日は大丈夫という予報は無理でした。また上部及び私が安成ファックスは本当かもしれないと思った根拠に、2日は高層の雲の動きが以前と比べ激しかったこともあると思います。ちなみにシェルバはC1・C3間の荷揚げをしていたのですが、悪天がくるらしいと言うことでBCに降りています。彼らの体力ではBCからすぐC2、場合によってはC3に行くのも可能なようです。

2日の午後6時からの無線によるミーティングでのYさんの態度は、以前からのように、登攀は任せる、というものでした。Yさん自身は、よく言いますように、気象予報を余り信用していないようです(3国共同チョモランマの例)。倉智さんも自分の方針として登攀活動にタッチしないを貫いていました。しかし2人ともBC待避は慎重すぎると思っていました。議論をしても、松林が言ったように、BC待避になったかもしれませんが、ほとんど議論なしということは、反省会で強く指摘されたように、まずいと思っています。気象係としても深く反省するところです。気象係として、ひどい悪天の恐れがあるが、必ず来るわけではない、ということ冷静に言

うべきでした。その後、そうしてC2待避ぐらいだったら登れていたかもしれないと、何度も悔やみました。  
二. について。

12月3日付けの安成さんのファックスは、12月2日のファックスを見てから急遽安成さんに問い合わせた答えです。3日は朝から天気がよかったです。既に決定済みということで、上部は皆下山に入っていました。その意味でも決定に影響を及ぼしませんでした。ここで気象係として反省すべきは、安成さんに問い合わせているのだから、ということで、前日2日の晩、決定を延期するよう提案すべきでした。3日は天気は余り崩れないということは予想できました。(ただし私は午後から崩れるかもしれないともいいましたが。)エピソードですが、3日の朝早く張俊が私のテントに来て、天気がよいのだから、決定を取り消さないか、といったのをよく覚えています。

繰り返しますと、安成さんの3日のファックスが来たときは、既に上部はBC下山を開始しておりました。もし決定前だったら、現地判断の重要性ということで、もう少し議論がされていたかもしれません。しかしわかりません。けれど、現地判断ということは当たり前前のことで、当日のファックスがなくとも十分議論すべきだった。とにかくBCにいる私等が、冷静に状況を見るべき、そして議論の方向付けをするべきだったと反省しております。

今までの回答をお読みになって、余りにも安易に重大な決定がなされた、とお思いになるかもしれません。確かに私もそう思います。その原因が、前の隊の遭難だったかもしれません。また同時に、まだ時間があり、確かにメイリの高さでは途中全員が休息をとるとしても、BCに滞在する必要はありませんが、別にBCに下って態勢を立て直してもよいという考えも、確かにあったと思います。また前の遭難の大雪の時には、C2もテントが埋め

られた、ということもあったかもしれません。とりあえず以上で終わります。客観性を保つためには、誰か他のメンバーにも当時の状況を聞くべきだと思います。しかしとりあえず私の記憶ということでご了解下さい。

# 御支援いただいた企業・団体・個人一覧

## 企業・団体

旭化成工業株式会社  
株式会社アシックス  
株式会社アライテント  
アルファー食品株式会社  
井上工業株式会社  
イワタニプリムス株式会社  
イワタニリゾート株式会社  
江崎グリコ株式会社  
大阪ガス株式会社  
大島事務用品販売有限会社  
大塚食品／製薬株式会社  
京都支店  
大豊建設株式会社  
株式会社大林組  
株式会社大林組名古屋支店  
株式会社大本組大阪支店  
株式会社奥村組  
オムロン株式会社  
鹿島建設株式会社名古屋支店  
川崎重工業株式会社  
川崎重工業株式会社  
汎用ガスタービン事業部  
株式会社川島織物  
関西電力株式会社  
機動建設工業株式会社  
木村食品工業株式会社  
株式会社キャラバン  
京セラ株式会社  
協和発酵工業株式会社  
近畿日本鉄道株式会社  
株式会社熊谷組  
株式会社クラレ  
京阪電気鉄道株式会社  
株式会社建設技術研究所  
株式会社鴻池組大阪本社  
コニカ株式会社  
五洋建設株式会社  
五洋建設株式会社名古屋支店  
三共株式会社大阪支店  
サントリー株式会社

## 三洋電機株式会社

株式会社三和銀行  
株式会社シナノ  
清水建設株式会社大阪支店  
清水建設株式会社名古屋支店  
シャープ株式会社  
ジャパングアテックス株式会社  
昭和電工株式会社  
新日本製鐵株式会社  
株式会社スポーツニッポン  
新聞大阪本社  
株式会社スポーツニッポン  
新聞東京本社  
株式会社住友銀行  
住友化学工業株式会社  
住友ゴム株式会社  
スポーツ事業部  
住友重機械工業株式会社  
住友生命保険相互会社  
住友電気工業株式会社  
積水ハウス株式会社  
積水ポリマテック株式会社  
第一製薬株式会社  
大成建設株式会社大阪支店  
大成建設株式会社名古屋支店  
ダイセル化学工業株式会社  
大日本土木株式会社  
太場工業株式会社  
株式会社大和銀行  
大和ハウス工業株式会社  
タカラスタングード株式会社  
武田薬品工業株式会社  
株式会社竹中工務店  
株式会社田中組  
千代鶴酒店  
株式会社テトラ  
有限会社トーク  
東亜建設工業株式会社  
東レ株式会社  
南開工業株式会社  
南海電気鉄道株式会社

## 西松建設株式会社

日清食品株式会社  
日本技術開発株式会社  
日本クリニック株式会社  
日本国土開発株式会社大阪支店  
日本ジフィー株式会社  
日本生命保険相互会社  
日本ポラロイド株式会社  
野村証券株式会社  
株式会社間組名古屋支店  
長谷虎紡績株式会社  
株式会社パレスサイドビルディング  
阪急電鉄株式会社  
阪神電気鉄道株式会社  
株式会社日立製作所  
富士火災海上保険株式会社  
富士フィルム株式会社  
富士フィルムバッテリー株式会社  
不動建設株式会社名古屋支店  
株式会社毎栄  
株式会社毎日広告社  
株式会社毎日新聞社  
松下国際財団  
松本酒造株式会社  
三井東圧化学株式会社  
株式会社三井三池製作所  
大阪支店  
三菱レイヨン株式会社  
明治製菓株式会社  
株式会社森本組  
八重洲無線株式会社  
矢作建設工業株式会社  
株式会社ユアサコーポレーション  
株式会社有楽通信社  
ユニバーサルトレーディング株式会社  
株式会社読売新聞社  
株式会社ワームレス

(五十音順)

個人	木吉	村良	雅竜	昭夫	谷田	口尻	朗人	船古	原田	尚作
足立	桐工	栄藤	竜良	夫三	月辻	原一	人博	古細	田井	耕作
安仁	藤工	藤田	良秀	雄平	月辻	一敏	博郎	堀堀	内屋	了健
安藤	藤倉	敷原	秀順	平二	出寺	井水	則明	堀前	田田	栄琢
伊藤	藤上	桑古	隆良	雄策	伊井	下本	均敏	前田	田田	三磨
伊井	藤上	桑古	隆良	雄策	伊井	下本	均敏	前田	田田	三磨
今川	西邦	近藤	秀達	明夫	今西	利戸	富太	前松	井井	司男
今西	秀芳	近藤	公夫	正夫	今西	利戸	徹隆	松松	井井	男也
今西	秀芳	近藤	公夫	正夫	今西	利戸	徹隆	松松	井井	男也
今井	岩倉	岩坪	敏雅	明晴	井岩	中中	真伊	松松	本本	次郎
岩井	岩坪	岩坪	敏雅	明晴	岩井	中中	真伊	松松	本本	次郎
岩井	岩坪	岩坪	敏雅	明晴	岩井	中中	真伊	松松	本本	次郎
植田	内田	内田	安正	弘彦	植田	永中	道暢	村本	山山	治郎
内田	内田	内田	安正	弘彦	内田	永中	道暢	村本	山山	治郎
内田	内田	内田	安正	弘彦	内田	永中	道暢	村本	山山	治郎
宇野	梅棹	藤藤	善誠	和彌	宇野	西野	恒高	守森	安山	秋彦
宇野	梅棹	藤藤	善誠	和彌	宇野	西野	恒高	守森	安山	秋彦
宇野	梅棹	藤藤	善誠	和彌	宇野	西野	恒高	守森	安山	秋彦
江藤	遠藤	倉澤	忠昭	夫彦	江藤	野野	福高	安山	山山	三彦
江藤	遠藤	倉澤	忠昭	夫彦	江藤	野野	福高	安山	山山	三彦
江藤	遠藤	倉澤	忠昭	夫彦	江藤	野野	福高	安山	山山	三彦
大津	大津	大津	隆堂	治彦	大津	林林	一毅	山山	山山	三彦
大津	大津	大津	隆堂	治彦	大津	林林	一毅	山山	山山	三彦
大津	大津	大津	隆堂	治彦	大津	林林	一毅	山山	山山	三彦
大岡	本森	本森	義次	己雄	大岡	東日	昇隆	山山	山山	三彦
大岡	本森	本森	義次	己雄	大岡	東日	昇隆	山山	山山	三彦
大岡	本森	本森	義次	己雄	大岡	東日	昇隆	山山	山山	三彦
沖藤	乙藤	斐岡	洋一	一郎	沖藤	平廣	正治	吉村	村良	一男
沖藤	乙藤	斐岡	洋一	一郎	沖藤	平廣	正治	吉村	村良	一男
沖藤	乙藤	斐岡	洋一	一郎	沖藤	平廣	正治	吉村	村良	一男
甲斐	片岡	川庄	比古	朗章	甲斐	上神	義忠	川村	田平	助之
甲斐	片岡	川庄	比古	朗章	甲斐	上神	義忠	川村	田平	助之
甲斐	片岡	川庄	比古	朗章	甲斐	上神	義忠	川村	田平	助之
北川	上尾	神茂	比古	朗章	北川	川瀬	正治	藤藤	藤藤	助之
北川	上尾	神茂	比古	朗章	北川	川瀬	正治	藤藤	藤藤	助之
北川	上尾	神茂	比古	朗章	北川	川瀬	正治	藤藤	藤藤	助之
川瀬	川瀬	川瀬	卓卓	卓卓	川瀬	川瀬	卓卓	川瀬	川瀬	卓卓
川瀬	川瀬	川瀬	卓卓	卓卓	川瀬	川瀬	卓卓	川瀬	川瀬	卓卓
川瀬	川瀬	川瀬	卓卓	卓卓	川瀬	川瀬	卓卓	川瀬	川瀬	卓卓

(五十音順)

# 梅里雪山、大岩壁を登る日本登山隊

## <編集後記>

遅れに遅れていた梅里雪山第3次隊の記録を、ようやく会員諸兄のお手元にお送りできるようになりました。非常に長い時間がかかってしまったことを、ここにお詫びいたします。

本来は、中国側と分担して正式な「報告書」として作成すべきなのですが、諸般の事情により報告書作成の段階にまでこぎつけられない状態にあります。しかしながら、この状態でいたずらに年月を重ねるわけにはいきません。そこで関係者で協議した結果、登山活動、反省会での発言等を会員諸兄に知っていただくために、あくまで「記録」という形で本書を残すことになりました。将来報告書が作成される際には、本書が貴重な記録となることを願ってやみません。

梅里雪山の当事者として、「失敗」という事実は今もなお我々の中で重くのしかかっています。いただいた多くの批判を真摯に受け止め、これからのAACKの活動、そして我々の登山をより内容のあるものにする事で、この「重し」を取り除いていきたいと思っています。

編集担当 人見 五郎  
中山 茂樹

AACK時報13号 1998年11月15日発行  
発行者：社団法人京都大学学士山岳会  
〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学内  
TEL 075-771-2500 FAX 075-771-4410  
代表：会長 上尾 庄一郎  
編集：人見 五郎、中山 茂樹  
印刷：株式会社土倉事務所  
〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8  
TEL 075-451-4844 FAX 075-441-0436

